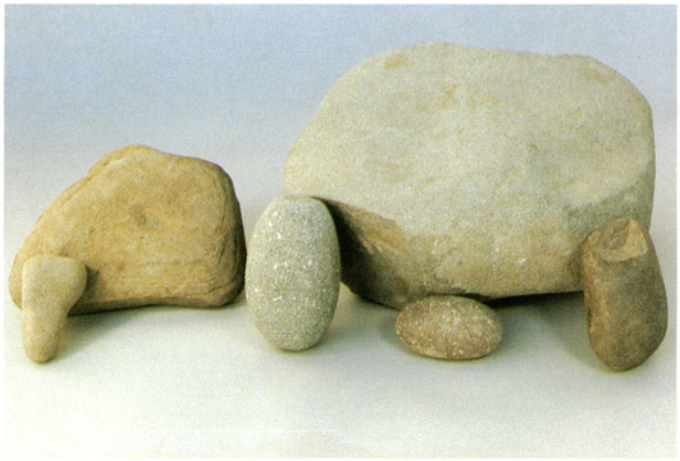
黒谷川郡頭遺跡 II

昭和60年度発掘調査概報

1 9 8 7

徳 島 県 教 育 委 員 会

調 査 区 全 景 （南より）



（上）　井戸１出土東阿波型土器
（下左）石臼・石杵　　（下右）溝22出土朱付着土器

序

黒谷川中小河川改修事業に関連して，昭和59年度から継続している黒谷川郡頭遺跡の発掘調査は今年度が第II次調査にあたります。

本遺跡は弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけて，旧吉野川に面した極度の低湿地に形成された徳島県内有数の遺跡であることが明らかになってきております。第I次調査の成果を踏まえ，今回は遺跡の規模，性格等の把握に重点を置いて調査しましたところ，新たに本遺跡が赤色顔料である朱の精製を行っている数少ない集落跡であることが確認されました。

徳島県では朱の原石である辰砂を採掘砕石した遺跡として阿南市若杉山遺跡が知られておりますが，本遺跡との関連も伺われます。より具体的な様相は次年度以降にも継続される発掘調査に委ねられますが，朱の流通について貴重な資料が提供されるものと考えております。

刊行にあたり，本遺跡の発掘調査について御指導・御協力いただきました関係各位ならびに関係機関に厚くお礼申し上げるとともに，次年度以降の調査にもご支援下さいますようお願い申し上げます。

昭和62年３月

徳島県教育委員会

教育長　松　本　冨　夫

例　　言

1　本書は黒谷川中小河川改修事業に伴う発掘調査概要報告書である。

2　発掘調査は徳島県土木部河川課の委託を受けて教育委員会文化課が実施した。

3　調査は昭和60年９月３日から61年１月22日まで行った。

4　収録した資料のうち遺構は全員が分担実測したが，遺構の製図，遺物の実測製図，写真撮影は菅原が行った。

5　本書で用いた絶対高は海抜を表す。方位はすべて磁北である。

6　土色の判定に際しては，小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帳』1967に依った。

7　fig.２の地形図は建設省国土地理院発行の２万５千分の１の地形図「大寺」を転載したものである。

8　今回の調査において下記の方々よりご教示を受けた。

市毛　勲，大山真充，岡山真知子，笹川龍一，相田則美，高橋　学，滝山雄一，出原恵三，寺沢　薫，広瀬常雄，藤好史郎，松下　勝，森　浩一，奈良国立文化財研究所

9　調査は以下の組織で行った。

調査主体　徳島県教育委員会文化課
課　　長　前川　武(当時)
課長補佐　清水　博
庶務係長　富積忠男
主　　事　大八木芳子
文化財保護班長　立花　博(当時)
調査担当　主事　菅原康夫
文化財調査員　早渕隆人，川人伸一(当時)，橋本　浩(当時)，藤島則之(当時)

10　本書作成にあたっては河野剛次，赤穂英樹，小浜直弘，平野　剛(文化財調査員）の協力を得た。

11　本書は菅原が編集・執筆したが，遺物観察表の作成は主として早渕，赤穂が行った。

本 文 目 次

頁

I 調査の経過 …… 1

II 遺構と遺物 …… 6

溝 15 …… 6
溝 16 …… 21
溝 17 …… 23
9号住居址 …… 24
土 坑 26 …… 29
土 坑 34 …… 30
8号住居址 …… 32
10号住居址 …… 34
12号住居址 …… 35
井 戸 1 …… 37
溝 1 …… 45
溝 23 …… 48
溝 19 …… 48
溝 22 …… 49
土 坑 27 …… 53
土 坑 29 …… 53
土 坑 33 …… 54
3号建物址 …… 56
4号建物址 …… 56
石 製 品 …… 57
鉄 製 品 …… 60

III ま と め …… 61

挿　図　目　次

頁

fig. 1　調査区位置図…… 1
fig. 2　黒谷川郡頭遺跡周辺の遺跡…… 2
fig. 3　試掘調査地点柱状断面図…… 3
fig. 4　調査風景…… 4
fig. 5　調査風景…… 5
fig. 6　遺構配置図（４Ｃ４グリッド～４Ｊ６グリッド）……（折り込み）
fig. 7　遺構配置図（４Ｂ13グリッド～４Ｋ15グリッド）……（折り込み）
fig. 8　溝15実測図（４Ｃ４グリッド～４Ｆ４グリッド）……11
fig. 9　溝15実測図（４Ｇ４グリッド～４Ｊ４グリッド）……13
fig. 10　溝15出土土器実測図……15
fig. 11　溝15出土土器実測図……16
fig. 12　溝15出土土器実測図……17
fig. 13　溝15出土土器実測図……19
fig. 14　溝15出土土器実測図……20
fig. 15　溝15出土土器実測図……21
fig. 16　溝16実測図（４Ｄ６グリッド～４Ｅ５グリッド）……22
fig. 17　溝16・19出土土器実測図……23
fig. 18　溝17実測図……24
fig. 19　溝１・17出土土器実測図……25
fig. 20　９号住居址実測図……26
fig. 21　９号住居址出土土器実測図……27
fig. 22　９号住居址出土土器実測図……28
fig. 23　４Ｅ６グリッド出土縄文土器実測図……29
fig. 24　土坑26実測図……30
fig. 25　土坑34実測図……30
fig. 26　土坑34出土土器実測図……31
fig. 27　８号住居址実測図……33
fig. 28　８号住居址出土土器実測図……34
fig. 29　10号住居址実測図……35
fig. 30　10号住居址柱穴実測図……35

頁

fig. 31　10号住居址柱穴出土土器実測図……36
fig. 32　12号住居址実測図……36
fig. 33　12号住居址出土土器実測図……37
fig. 34　井戸１実測図……38
fig. 35　井戸１出土土器実測図……39
fig. 36　井戸１出土土器実測図……41
fig. 37　井戸１出土土器実測図……43
fig. 38　井戸１出土土器実測図……44
fig. 39　溝１実測図……46
fig. 40　溝１出土土器実測図……47
fig. 41　溝23実測図……48
fig. 42　溝19土層堆積断面実測図……49
fig. 43　溝22土層堆積断面実測図……49
fig. 44　溝22出土土器実測図……51
fig. 45　溝22出土土器実測図……52
fig. 46　土坑27実測図……53
fig. 47　土坑29実測図……54
fig. 48　土坑33実測図……54
fig. 49　土坑26・27・29・33出土土器実測図……55
fig. 50　３号建物址実測図……56
fig. 51　４号建物址実測図……56
fig. 52　石臼・石杵実測図……58
fig. 53　石臼実測図……59
fig. 54　鉄製品実測図……60
fig. 55　黒谷川郡頭遺跡出土土器における器種構成と結晶片岩含有率（Ⅰ・Ⅱ式）‥64
fig. 56　黒谷川郡頭遺跡出土土器における器種構成と結晶片岩含有率（Ⅲ式）……65
fig. 57　東阿波型土器分布圏と朱関連遺跡位置図……72

表　目　次

頁
tab. 1　器種構成一覧表……67
tab. 2　結晶片岩含有比率一覧表……68
tab. 3　出土土器観察表……76

図　版　目　次

ＰＬ．１　調査区全景
ＰＬ．２　遺構面検出状態
ＰＬ．３　東側調査区（４Ｃ４グリッド～４Ｊ６グリッド）全景
ＰＬ．４　西側調査区（４Ｂ13グリッド～４Ｋ15グリッド）全景・溝16全景
ＰＬ．５　溝15遺物出土状況（１）
ＰＬ．６　溝15遺物出土状況（２）
ＰＬ．７　溝15遺物出土状況（３）
ＰＬ．８　溝15遺物出土状況（４）
ＰＬ．９　溝17遺物出土状況
ＰＬ．10　溝１遺物出土状況
ＰＬ．11　９号住居址・12号住居址全景
ＰＬ．12　土坑34全景
ＰＬ．13　８号住居址・10号住居址全景
ＰＬ．14　井戸１全景
ＰＬ．15　溝19・溝１全景
ＰＬ．16　土坑29・土坑26全景
ＰＬ．17　出土遺物（１）
ＰＬ．18　出土遺物（２）
ＰＬ．19　出土遺物（３）
ＰＬ．20　出土遺物（４）
ＰＬ．21　出土遺物（５）
ＰＬ．22　出土遺物（６）
ＰＬ．23　出土遺物（７）
ＰＬ．24　出土遺物（８）
ＰＬ．25　出土遺物（９）
ＰＬ．26　出土遺物（10）
ＰＬ．27　出土遺物（11）
ＰＬ．28　出土遺物（12）
ＰＬ．29　出土遺物（13）
ＰＬ．30　出土遺物（14）
ＰＬ．31　出土遺物（15）
ＰＬ．32　出土遺物（16）
ＰＬ．33　出土遺物（17）
ＰＬ．34　出土遺物（18）

Ⅰ　調査の経過

昭和60年度に実施した調査地点は59年度調査区の東西，工事用中心杭№4を起点とする４Ｃ４～４Ｊ６グリッド，４Ｂ13～４Ｋ15グリッド部分である（fig. １）。前年度に検出された環溝状溝の延長部分の平面形態の把握，及び住居址群の拡がりについて留意したが，前年度調査部分の堰（野神堰）本体工事に伴って上流側（４Ｂ13～４Ｋ15グリッド部分）では土砂の崩壊によってすでに調査段階では２グリッド分，幅７ｍにわたって流出しており，精査しえなかった。また調査終了後，上流地域の冠水防止対策に伴い，遺跡の拡がりを確認しておくことが今後の事業計画の見通しとも関わるため，標高1.7ｍのレベルまで暫定掘削する計画が提示された。それに伴い，昭和61年２・３月にかけて遺物包含層に支障のない範囲での掘削を前提に立会調査を実施した。さらに次年度に計画されている県道橋，舟橋の付け換え工事部分の試掘調査を各層毎に重機により行った。

試掘調査では現地表面から約６ｍ下層，砂層までの土層の堆積状態を確認することにした（fig. ３）。層序は１　現地表面耕作土，２　黄褐色弱粘質土，３　にぶい黄色弱粘質土，

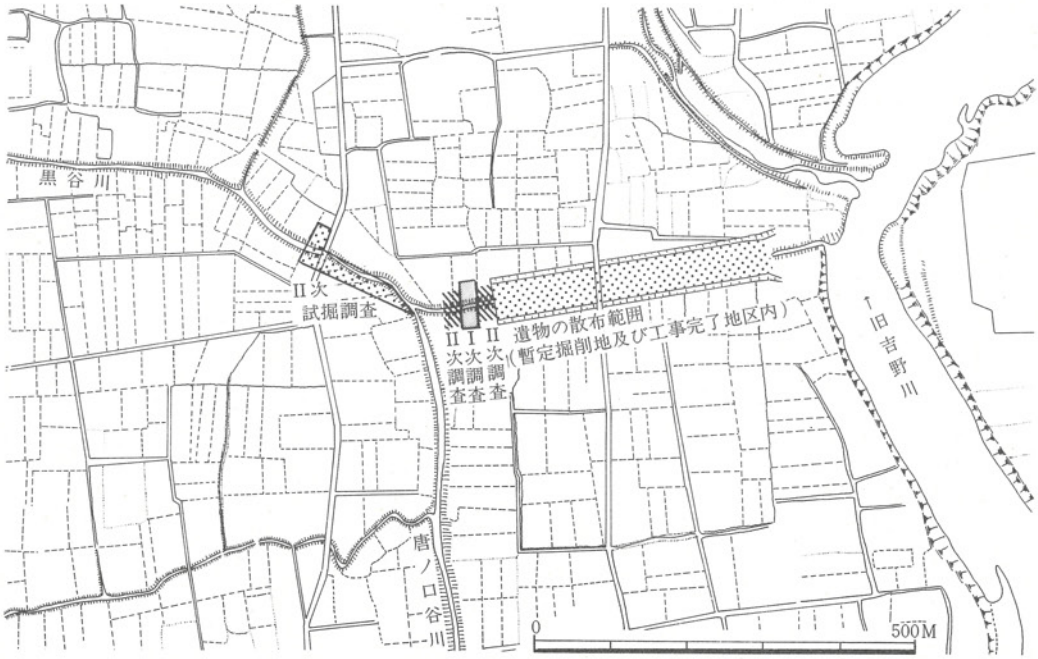


fig. 1　調査区位置図

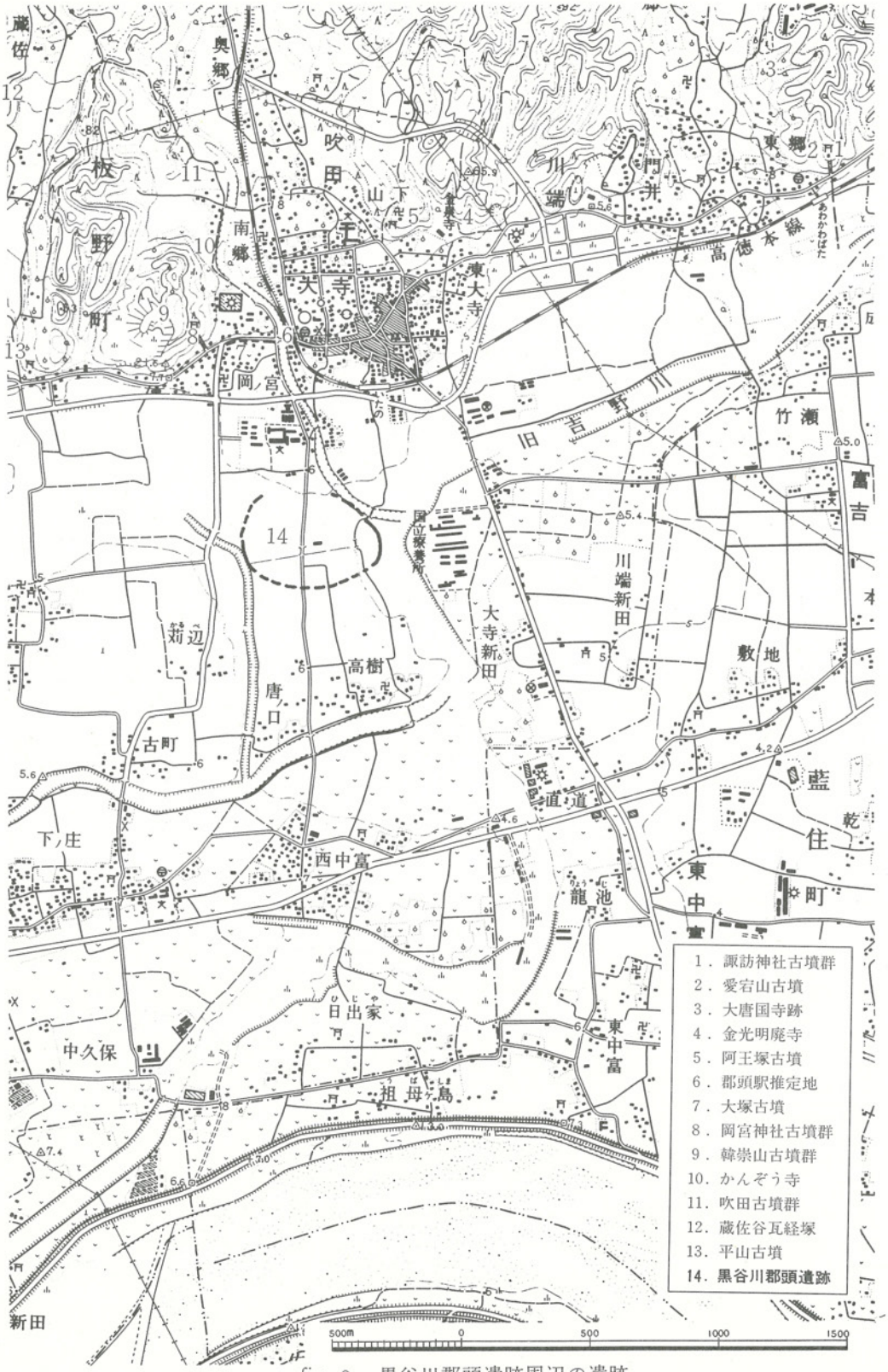
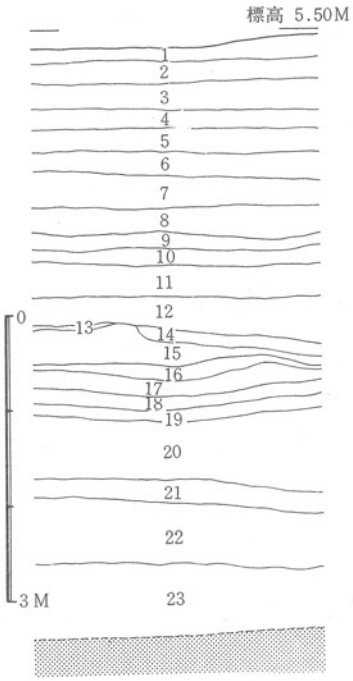


fig. 2　黒谷川郡頭遺跡周辺の遺跡

4　灰オリーブ色弱粘質土，5　黄褐色弱粘質土，6　灰黄色弱粘質土，7　暗灰黄色弱粘質土，8　黄褐色弱粘質土，9　オリーブ褐色弱粘質土，10　にぶい黄褐色弱粘質土，11　黄褐色粘質土，12　黄褐色粘質土，13　暗灰黄色粘質土，14　暗灰黄色粘質土，15　灰オリーブ色粘質土，16　灰オリーブ色粘質土，17　暗緑灰色粘土，18　緑灰色粘土，19　暗緑灰色粘土，20　緑灰色粘土，21　緑灰色粘土，22　灰色粘土，23　砂層である。

このうち地表面から３ｍ，海抜２ｍの第16層までは無遺物堆積層であり，第17層以下に炭化物，流木等が認められた。特に第19層には多くの炭化物に混じって，若干の磨滅した須恵器片，土師器片が認められたが，第20層以下は明らかに湿地状の堆積を示しており，今回の調査面に対応する遺物包含層は検出されなかった。第17層までの堆積状況は暫定掘削面全域に共通しており，黒谷川に合流し，分岐する唐ノ口谷川を境にして遺物包含層が途切れていることから，合流点以西では遺跡の拡がりがえぐられていることが判明した。今回の調査個所は野神堰に付設する上・下流の水タタキ建設部分であり，約1200㎡にわたって昭和60年９月３日から61年１月22日まで発掘調査を行い，３月31日までを暫定掘削立会と並行して出土遺物の整理期間に充てた。第Ｉ次調査と同様に連日の湧水による遺構の損傷は絶えず進行し，多くの時間を排水作業に費やすという状況であった。以下，調査の経過について触れておく。



1．表土耕作土
2．黄褐色2.5Y5/4弱粘質土
3．にぶい黄色2.5Y6/3弱粘質土
4．灰オリーブ色５Y5/2弱粘質土
5．黄褐色2.5Y5/3弱粘質土
6．灰黄色2.5Y6/2弱粘質土
7．暗灰黄色2.5Y5/2弱粘質土
8．黄褐色2.5Y5/4弱粘質土
9．オリーブ褐色2.5Y4/4弱粘質土
10．にぶい黄褐色10Y R5/4弱粘質土
11．黄褐色2.5Y4/4粘質土
12．黄褐色2.5Y5/3粘質土
13．暗灰黄色2.5Y5/2粘質土
14．暗灰黄色2.5Y5/2粘質土
15．灰オリーブ色５Y5/2粘質土
16．灰オリーブ色7.5Y5/2粘質土
17．暗緑灰色10G Y4/1粘土(炭化物を含む)
18．緑灰色10Y G5/1粘土
19．暗緑灰色7.5G Y4/1粘土(炭化物を多量に含む)
20．緑灰色7.5G Y5/1粘土
21．緑灰色５G5/1粘土
22．灰色7.5Y4/1粘土
23．砂層

fig. 3　試掘調査地点柱状断面図

調査日誌抄

1986．9．3　資材搬入，調査に入る。

9．5　５ｍ方眼の設定，掘り下げを始める。

9．6　４Ｄ14グリッド遺物包含層下約20cmで土器列検出。

9.10　土器列の平面プランの追及。

9.12　昨年度の溝１の延長部分検出。９号住居址の一部平面プラン検出。

1986. 9.18　溝16把握，完掘。遣り方設定。

9.19　西側調査区の掘り下げ準備を始める。昨年度調査区部分 −1.50mに設置した排水ポンプの故障により，地下水位の上昇が始まる。湧水に対する応急処置。

9.20　調査終了時まで排水ポンプを掛け放しにする。

9.21　東側調査区遺物包含層除去状態の全景写真撮影。

9.25　溝19検出。

9.30　8・10・12号住居址平面プラン確認。

10. 5　台風接近により冠排水，安全対策。

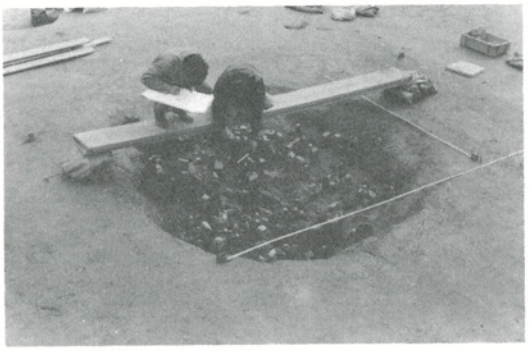


fig. 4　調　査　風　景

10. 7　調査区冠水，排水作業。

10. 9　西側調査区遺物包含層除去状態の全景写真撮影。両調査区全体の遺構掘り下げを開始する。

10.14　8号住居址掘り下げ。

10.15　溝17掘り下げ，甕形土器2個体検出。9・10号住居址掘り下げ開始。9号住居址は極端な湧水となり，掘り下げ，土層観察に苦慮。

10.16　井戸1の掘り下げを始める。9号住居址は相変わらず湧水・砂の吹き上げが激しく，壁の崩壊，遺物の倒壊が著しい。

10.17　連日排水作業。旧吉野川の干満によって地下水位が上下するため，遺構面の冠水は連日である。

10.21　9号住居址ようやく完掘，全景写真撮影。実測開始。溝15の土器列はほぼ掘り上がり，精査・実測の段階に入る。土坑34精査。

10.23　8号住居址完掘。徳島県市町村文化財連絡協議会の現地見学会のための資料作成。

10.29　徳島県市町村文化財連絡協議会の現地見学。あいにくの雨により急拠文化課板野保管棟に場所を移し，出土遺物，遺跡のスライド説明など。

10.31　溝15，井戸1遺物出土状況写真撮影。

11. 7　調査区冠水により，遺構面上に砂泥の堆積，除去作業。9号住居址に残して

いた遺物取り上げ後，下部より讃岐系の二重口縁壺形土器が出土。

11．8　鳴門市撫養小学校児童140名見学。2・3日の雨により湧水が激しい。

11.11　溝15実測終了部分から土器の取り上げを始める。記号文をもつ広口壺形土器確認。

11.12　井戸上面遺物出土状況実測終了。溝19・22掘り下げ。

11.18　井戸上面の土器の取り上げ開始。各遺構の精査。

11.22　井戸より石杵，石臼出土。実測，写真撮影。

11.25　井戸下層の掘り下げ。

12．3　土坑29土器取り上げ。

12．4　溝15はほぼ精査終了，土器の取り上げも大部分が終る。各遺構の精査。

12．5　平板による遺構配置図の作成。

fig. 5　調　査　風　景

12.6　各遺構の部分写真撮影。

急拠空中写真撮影実施日が決まり，空中写真撮影に向けて調査区の最終精査を実測と並行して始める。

12．9　調査区冠水。調査区壁の崩壊による土砂の落込みの除去。

12.20　連日の排水，清掃作業により，ようやく空中写真撮影を終了する。

12.23　9号住居址コーナー部分より縄文土器が出土していたため，東側調査区の地山を十字に断ち割り，土層検討を行う。

12.25　井戸の断ち割り。平断面図の補足など。

12.28　安全対策を行い，年内の調査を終える。

1987．1．6　出土遺物の整理と平断面図の検討を現地説明会まで行う。

1.18　連日の湧水と調査の進捗に追われていたが，遅ればせながら現地説明会を開く。

1.20　現場撤収まで残務作業。

1.22　資材搬出。第II次調査を終了する。

1.23　事前に河川課，鳴門土木事務所と協議のあった調査区周辺の暫定掘削が始ま

る。この日より２月８日まで整理作業と並行して，暫定掘削地内の立会調査。対象区域全体について土層の堆積状況の確認を併せて行う。

II　遺構と遺物

検出された遺構には環溝状溝２，住居址４，井戸状遺構１，掘立柱建物址２，溝，土坑などがある（fig. ６・７）。以下，便宜上４Ｃ４グリッド～４Ｆ４グリッド部分を東側，４Ｇ４グリッド～４Ｊ４グリッド部分を西側とし説明するが，いずれも遺構面の海抜高80cm前後である。

溝15（ＳＤ115）

調査区東側４Ｃ４～Ｊ４グリッドに伸びる溝である。４Ｈ４グリッド部分では弧状にカーブして南東に拡がる。第Ｉ次調査で検出された溝１と同様の平面形をもつ環溝的な性格をもつものと考えられる。溝埋土と遺物包含層の土色が同一のため掘り方上面は土層観察によっても明確に分離できず，平面プランはかろうじて地山のオリーブ黄色粘質土層面で確認された。溝幅約50cm，残存深25cm前後を測り，オリーブ黒色粘質土の堆積が認められる。断面梯形を示す。本溝も溝１と同様に溝幅一杯に土器列を伴っており，時期的にも溝１と一致する黒谷川Ｉ式の所産である。従って本溝は溝１と同時期に形成されており，当該段階では複数の環溝によって区画される集落形態を呈していたことが推定される。この場合隣接する環溝間の最短距離は54cmである。

本遺跡を確認しえた最初の手掛かりは調査区中央部を東西に流れる旧黒谷川の断面部分である（fig. ６網目部分）。本溝の土器の出土状態も全般に良好であり，溝機能の停止と共に一括投棄された様相を呈するものである。但し，溝１の遺物の完形での出土状態に比べ，多くは破損した状態で出土している。（fig. ８・９）。

北側から土器の配置を復元してみると４Ｃ４～Ｆ４グリッドにかけては，広口壺形土器（fig. 10－７），鉢形土器（fig. 15－45），甕形土器（fig. 12－24），広口壺形土器(fig. 10－２），広口壺形土器（fig. 11－14），甕形土器，甕形土器，鉢形土器（fig. 14－42），鉢形土器(fig.14－41)，甕形土器（fig. 12－25），壺形土器（fig. 12－15），記号文をもつ広口壺形土器（fig. 10－９）が纏まりをもって集中し，約1.5ｍ離れて高杯形土器，鉢形土器，甕形土器（fig. 14－33），壺形土器（fig. 12－19），広口壺形土器（fig. 11－11），高杯形土器（fig. 15－46），鉢形土器(fig.14－38），細頸壺形土器（fig. 12－20），高杯形土器，鉢形土器

fig. 6　遺構配置図（４Ｃ４グリッド～４Ｊ６グリッド）

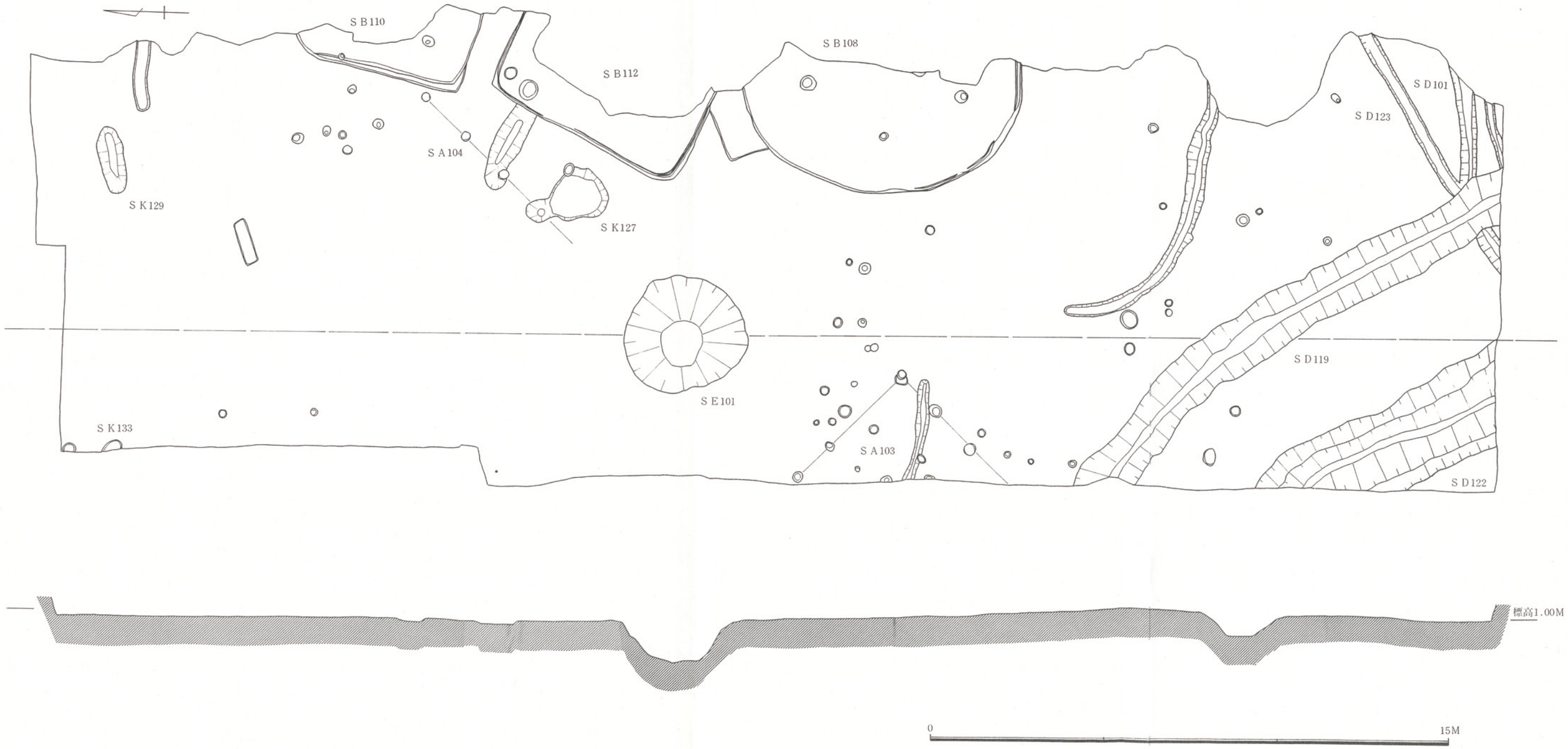


fig. 7　遺構配置図（4 B13グリッド～4 K15グリッド）

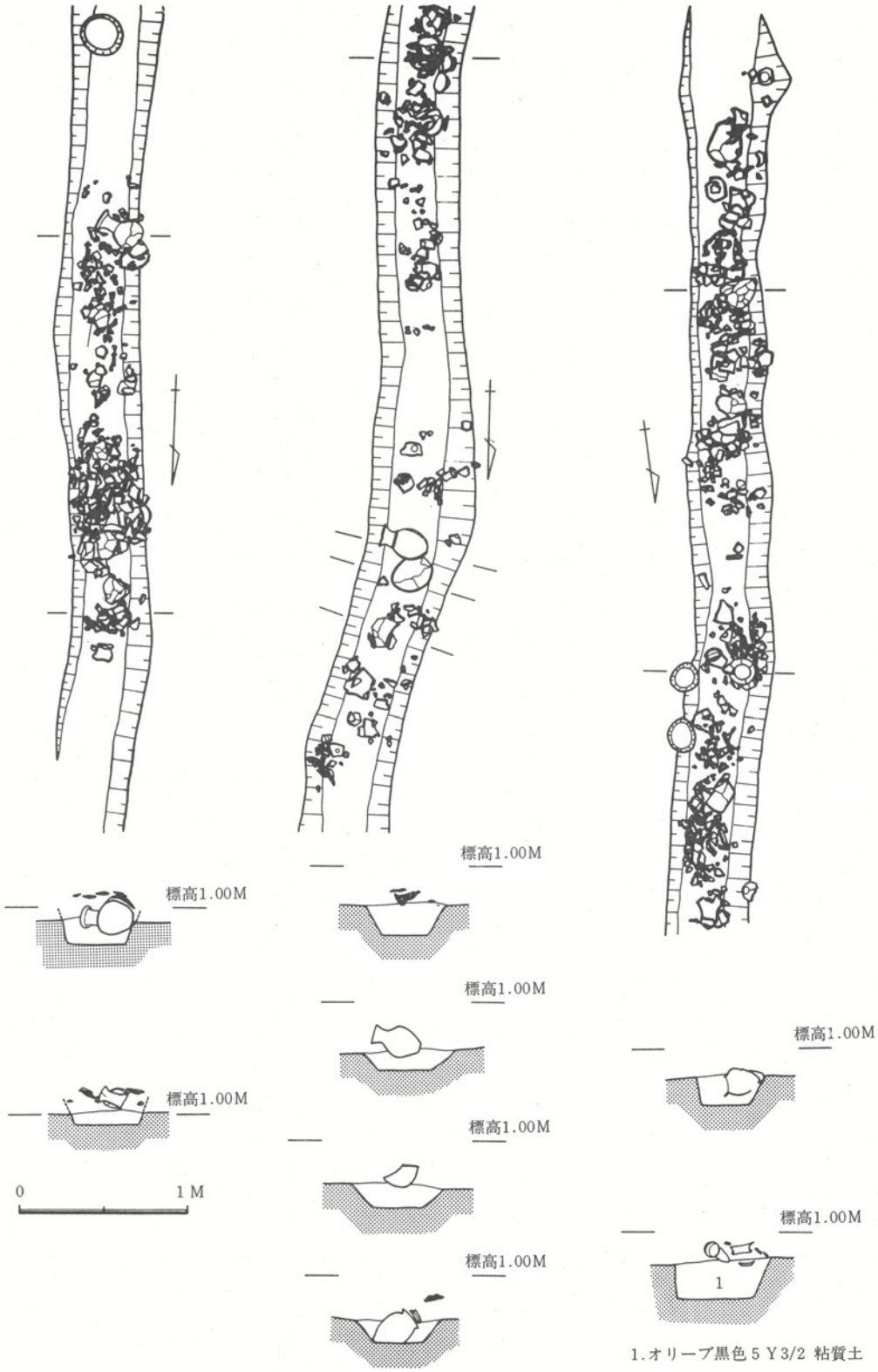


fig. 8　溝15 実測図（４Ｃ４グリッド～４Ｆ４グリッド）

(fig. 15－44)がこれに続く。

ここから約１ｍ隔てて鉢形土器(fig. 14－37)，鉢形土器(fig. 14－39)，甕形土器，甕形土器(fig. 13－29)，甕形土器，広口壺形土器(fig. 11－10)，広口壺形土器(fig. 10－3)，甕形土器(fig. 13－26)，壺形土器(fig. 12－17)，広口壺形土器(fig. 10－４)，鉢形土器(fig. 15－43)，高杯形土器(fig. 15－49)，甕形土器(fig. 13－30)，甕形土器(fig. 13－31)，甕形土器(fig. 14－34)，甕形土器(fig. 14－32)，甕形土器(fig. 14－35)が纏まりをみせる。

４Ｇ４グリッド以南では高杯形土器(fig. 15－48)，高杯形土器，壺形土器(fig. 12－21)，壺形土器，壺形土器(fig. 12－18)，壺形土器(fig. 11－13)，高杯形土器，鉢形土器(fig. 14－40)がブロックになって認められる。さらに50cm離れて広口壺形土器(fig. 10－１)，甕形土器，広口壺形土器(fig. 10－５)，広口壺形土器(fig. 12－16)，広口壺形土器(fig. 10－６)，長頸壺形土器(fig. 11－12)，甕形土器，鉢形土器(fig. 14－36)，無頸壺形土器(fig. 12－22)，甕形土器(fig. 13－27)があり，約 2.5ｍ間には土器の集中は認められない。次に甕形土器(fig. 13－28)，無頸壺形土器(fig. 12－23)，広口壺形土器(fig. 10－８)が位置するが，この地点では地山のレベルが1.40ｍと最も高まりを示しており，溝の深さも15cm程度であり削平を受けた可能性も考えられる。但し，これに続く部分でも土器の投棄は減少してきており，環溝への投棄行為にも様相の違いが指摘される。この部分から４ｍ南側では僅かに土器群がブロックを形成しており，壺形土器，甕形土器，高杯形土器(fig. 15－47)，壺形土器，高杯形土器(fig. 15－50)などが散在するが，いずれも破片となって検出されたものである。

投棄された土器群の方向性，規格性は今ひとつ指摘し難いが，溝１でみられたように完形のまま出土した土器にはいずれも内部にまで埋積土の充塡は及んでいない。溝１と同じく一部が検出されたのみであり，全体の投入行為の把握はなしえないが，精査しえた個所では各器種共２個体程度の配置が意識されているようにも考えられ，何らかの法則性が存在していることは事実であろう。

溝15出土の土器(fig. 10～15)

みてきたように出土した土器は検出部分では８群程度に分離され，壺形土器，甕形土器が多く，鉢形土器，高杯形土器がこれに続く。壺形土器では圧倒的に広口壺形土器の占める比率が高く，長頸壺形土器，細頸壺形土器，無頸壺形土器は微量であり，溝１と同様の器種構成を示している。以下の説明では概要報告書Ｉで行った器形分類に従って進めるこ

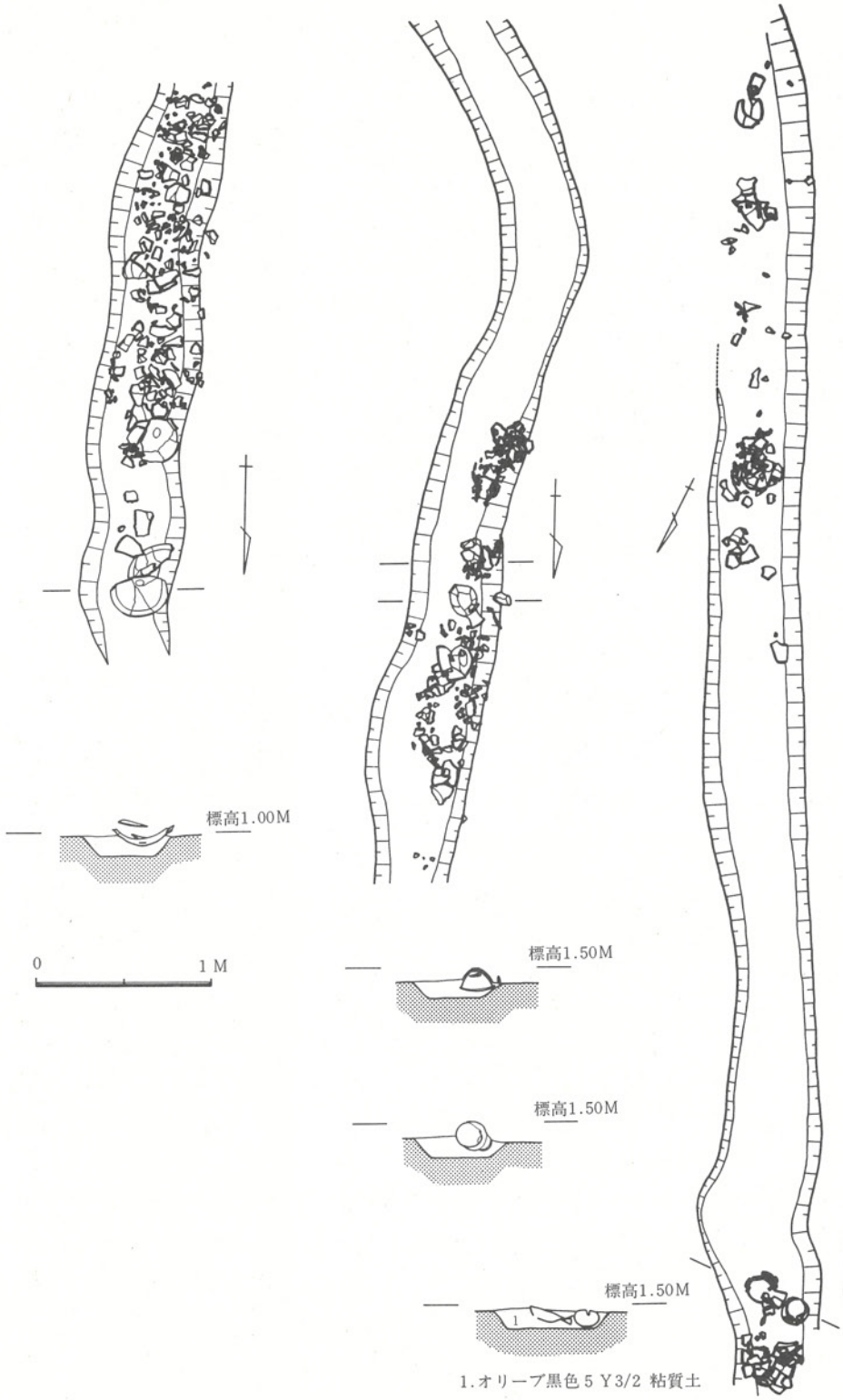


fig. 9　溝15 実測図（４Ｇ４グリッド～４Ｊ４グリッド）

とにする。

広口壺形土器（１～11・13～17）は筒状の頸部をもち，口縁部が緩やかに外反するもの（１～11）と短く直立する頸部から口縁部が外反するもの（13～17）に分かれる。
いずれも体部中位に最大腹径をもち，口縁端部を方形気味におさめるが，（１）のように断面三角形の端部を示すもの，上下に拡張するもの（16）も認められる。外面の調整はタタキのちハケ，もしくはハケのちヘラミガキで仕上げるものが通有であるが，（15）では粗い板状のナデ，（17）には水平のタタキののち肩部にタテハケをとどめる。内面は頸部ユビオサエ，体部は頸部ちかくまでヘラケズリを施すものが多いが，（８・９）ではタテあるいはヨコ方向のハケ調整を行っており，（18・19）も同様の器形を有すものであろう。（13・14）ではヨコ方向のケズリののち，中位下半にハケ調整を施している。
（１・７）には口縁端部にスタンプ状の重弧文あるいは竹管文を配しており，（４）には頸部肩部境にヘラ状工具による列点文をとどめる。（９）にはハート形とＪ字状の組合わせによる記号文が描かれており，器形的には河内地方に共通するプロポーションを示す。（11）は卵形の体部から緩やかに頸部，口縁部が外上方に拡がるプロポーションをもち，体部，頸部境に３条の沈線を施す。器形的には吉備の壺形土器に相通ずるものといえる。

長頸壺形土器（12）は多出する器形ではない。頸部直立，口縁端部は僅かに外反し，中位に最大径をもつ体部からなる。底部はドーナツ底で外面右上がりのタタキののちタテハケ，体部内面は中位上半からタテヘラケズリを行う。

細頸壺形土器は（20）の頸部だけであるが，端部は僅かに外方に拡がる。細かい入念なヘラミガキで仕上げる。（21・22）は体部のみであるが，細頸壺形土器の体部と思われる。この内（22）は中位がやや張った球形をしており，外面下半に入念なヨコヘラケズリ，上半細かなヘラミガキで調整している。

無頸壺形土器（23）は体部中位に最大径をもち，端部は僅かに外反し，尖り気味におさめる。外面はタタキのちタテハケ＋タテヘラミガキ，内面はナデて調整する。

甕形土器（24～35）は溝１で出土している「く」の字状に口縁部が外反し，長い体部をもつ甕Ａであるが若干の形態変化がある。
甕Ａ１（24～27）は口縁部が緩やかに外反し，体部中位に最大径をもつ。体部外面はタタキのちハケ調整を行う（24・26）ほか，板ナデ（25），ケズリを施すもの（27）が認められる。内面は口縁部直下からヘラケズリを施すものが通有であるが，（27）は粗い板ナデである。

fig. 10　溝15 出土土器実測図

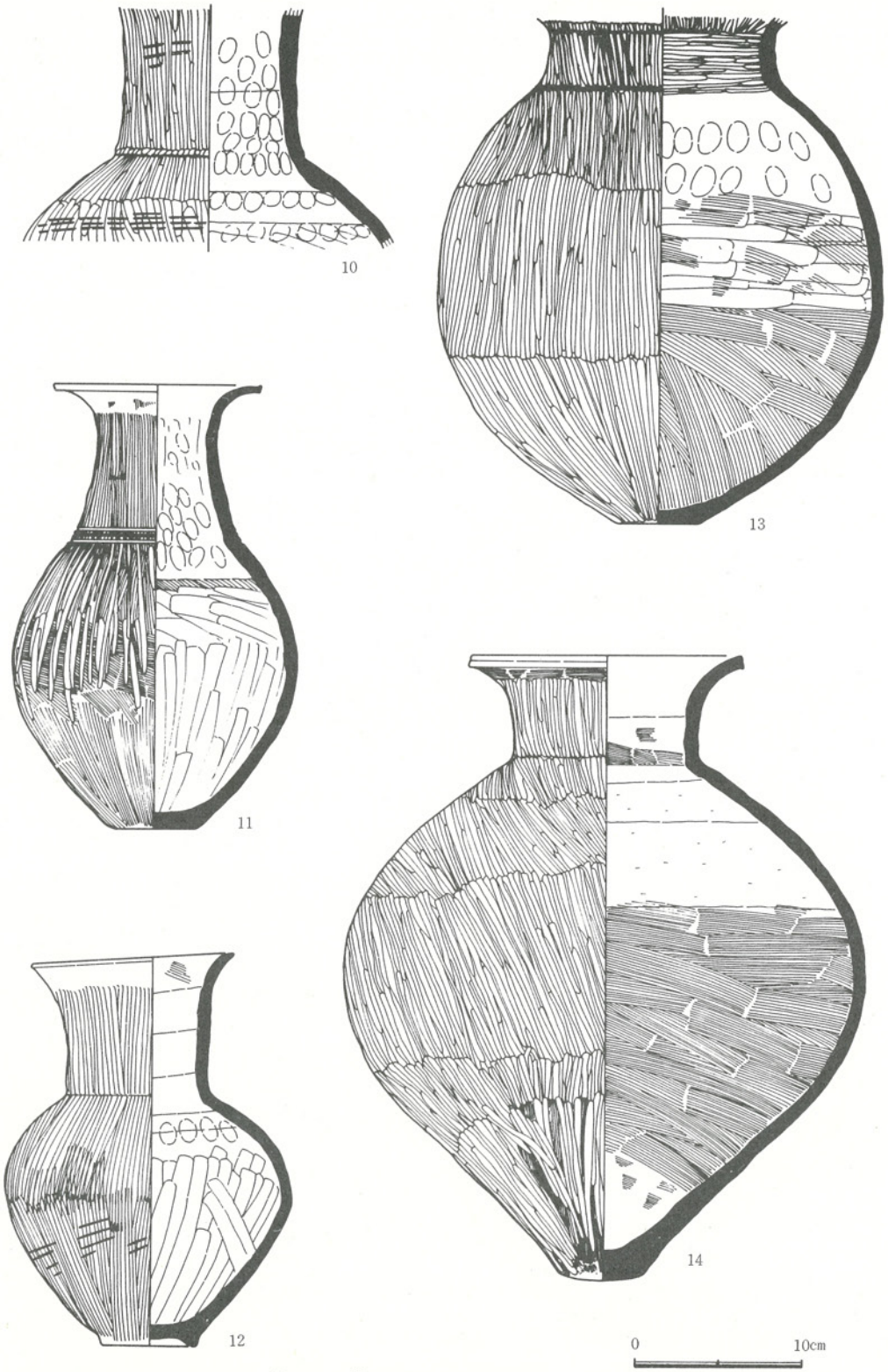


fig. 11　溝15 出土土器実測図

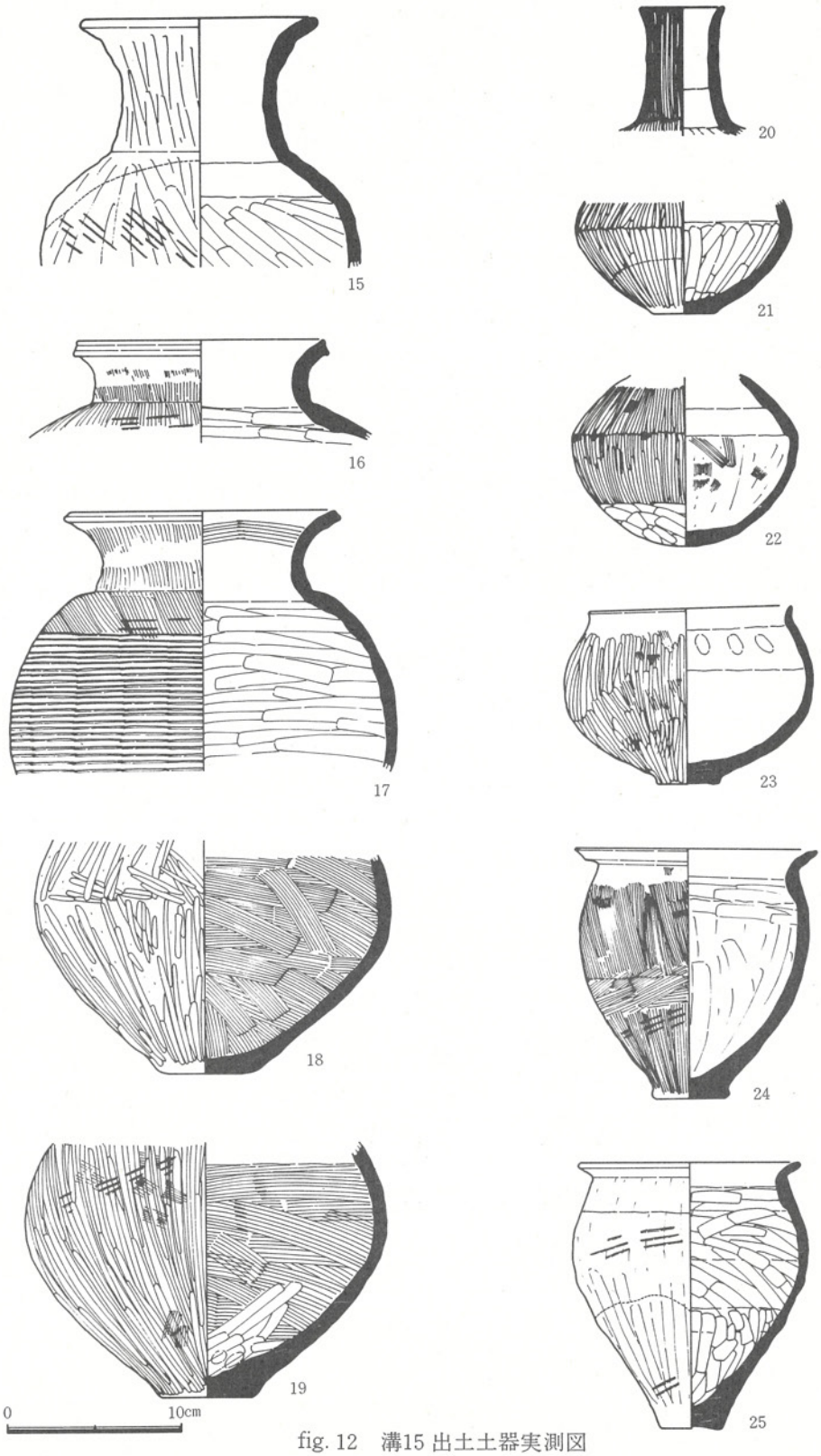


fig. 12　溝15 出土土器実測図

甕Ａ１（28～33）は口縁部が強く外反し，体部中位上半が丸みをおびて膨らんだもので，口縁端部はいずれも下方に僅かに拡張する。幅広のタタキ目を明瞭にとどめ，体部外面は上半と下半で方向が異なり，タテハケで調整する。内面は口縁部ヨコハケ，体部は口縁部直下からヘラケズリを施す。（33）には平底タタキをとどめる。

甕Ａ２（34・35）は口縁部が緩やかに外反し，中位で弱く膨らむ体部をもつもの。（34）は右下りの細かいタタキののち上半ヘラミガキ，下半ハケ。（35）はハケ調整。内面は共に口縁部直下からヘラケズリを施す。胎土は精選されており入念に仕上げている。

鉢形土器（36～45）には溝１で認められた体部が内彎気味あるいは直線状に立ち上がる鉢Ａと口縁部が外反する鉢Ｂがある。

（36）は鉢Ｂに分類しうるもので，外上方に拡がる体部と屈曲して外反する口縁部とからなる。体部外面は細かい右下りのタタキののちタテハケ，内面は細かいタテヘラケズリを施す。口縁端内面は細かなヨコハケをとどめる。

鉢Ａ１（41・42）は内彎気味に立ち上がる体部をもち，口縁端部は丸くおさめる。（41）は体部外面入念なヘラミガキ，内面丁寧なヘラケズリを施し，口縁端部をナデて調整する。内外面破線で示した部分には朱の付着をとどめ，胎土中の砂粒の剥離部分に浸透している。（42）は外面タタキののちナデ，内面は板ナデである。

鉢Ａ２（38・40）は基本的には体部が半球形を呈すものである。（38）は体部内外面ハケ調整。底部は僅かに外方に突出する。（40）は手捏ねで仕上げられており，口縁端部を方形状におさめる。

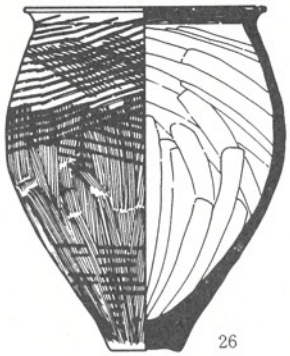
（37）も鉢Ａ２に分類しうるが，無頸壺形土器を小形化したものである。口縁端部は僅かに屈曲して外反する。内外面は入念なヘラミガキを施しており精製されている。

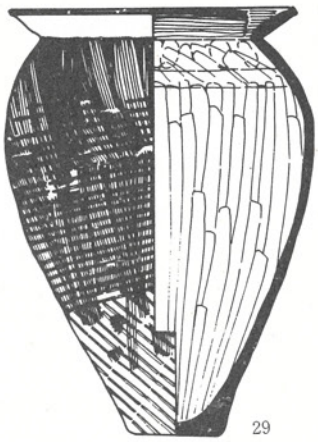
（39）は体部が緩やかに外上方に拡がる，浅い椀形状をなす鉢Ａ４である。内外面粗いヘラミガキを施し，底部は粗いヘラケズリで平底を形成している。

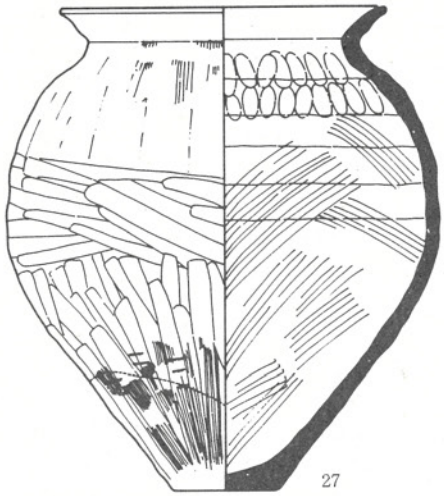
鉢Ａ３（43～45）は体部が直線状に外方に拡がるものである。体部外面は右上がりのタタキののち，（43・45）はハケ調整。内面はいずれもハケ調整であるが，（45）は下半をナデ，（44)はヘラケズリで仕上げる。

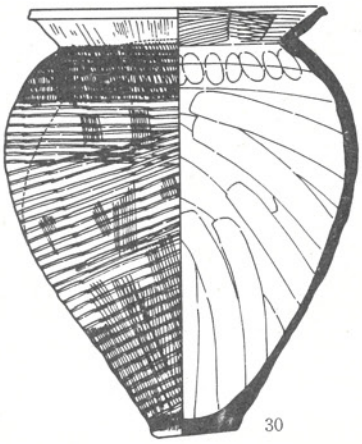
高杯形土器は杯部が椀形状を示す（46）の高杯Ａと杯部上面が屈曲して外反する（47・48）の高杯Ｂの二形態がある。

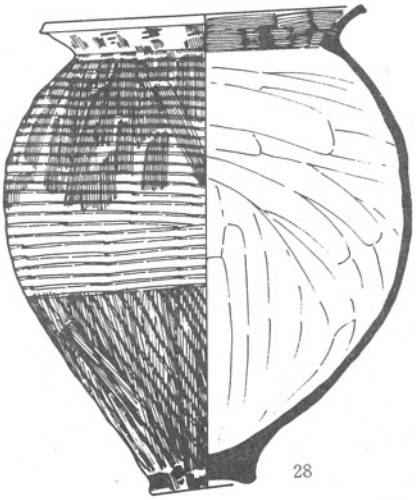
（46）の杯部は浅い椀形状をなすもので，内外面を入念な細かいヘラミガキで調整している。脚部は挿入付加法で接合する。











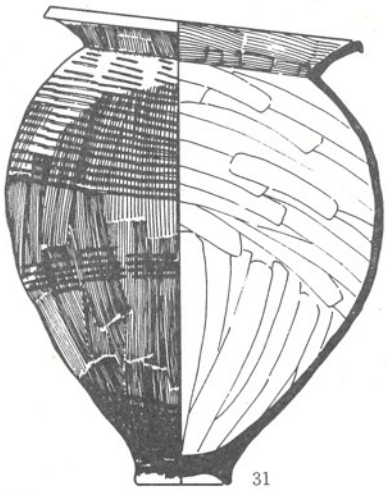


fig. 13　溝15 出土土器実測図

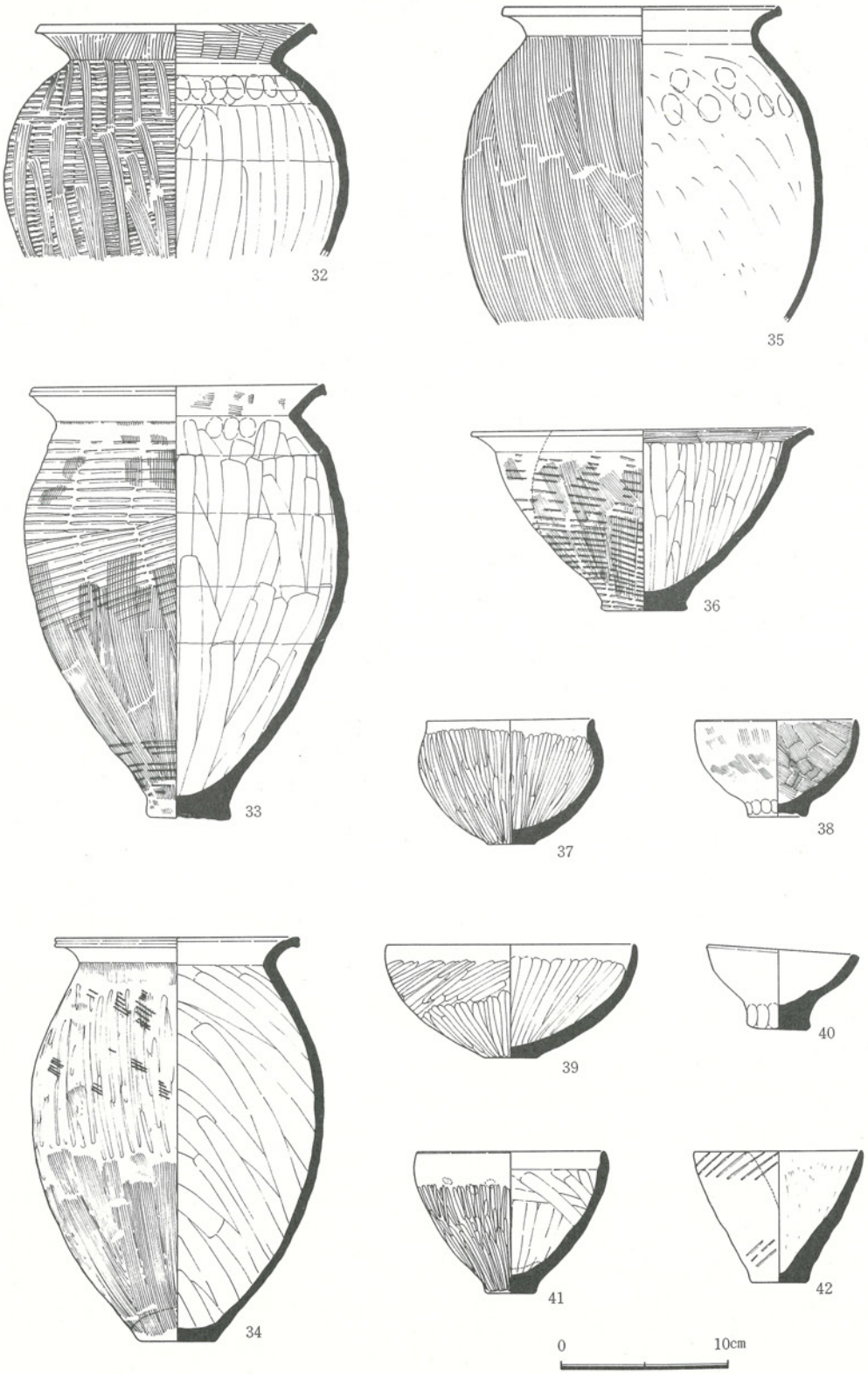


fig. 14　溝15 出土土器実測図

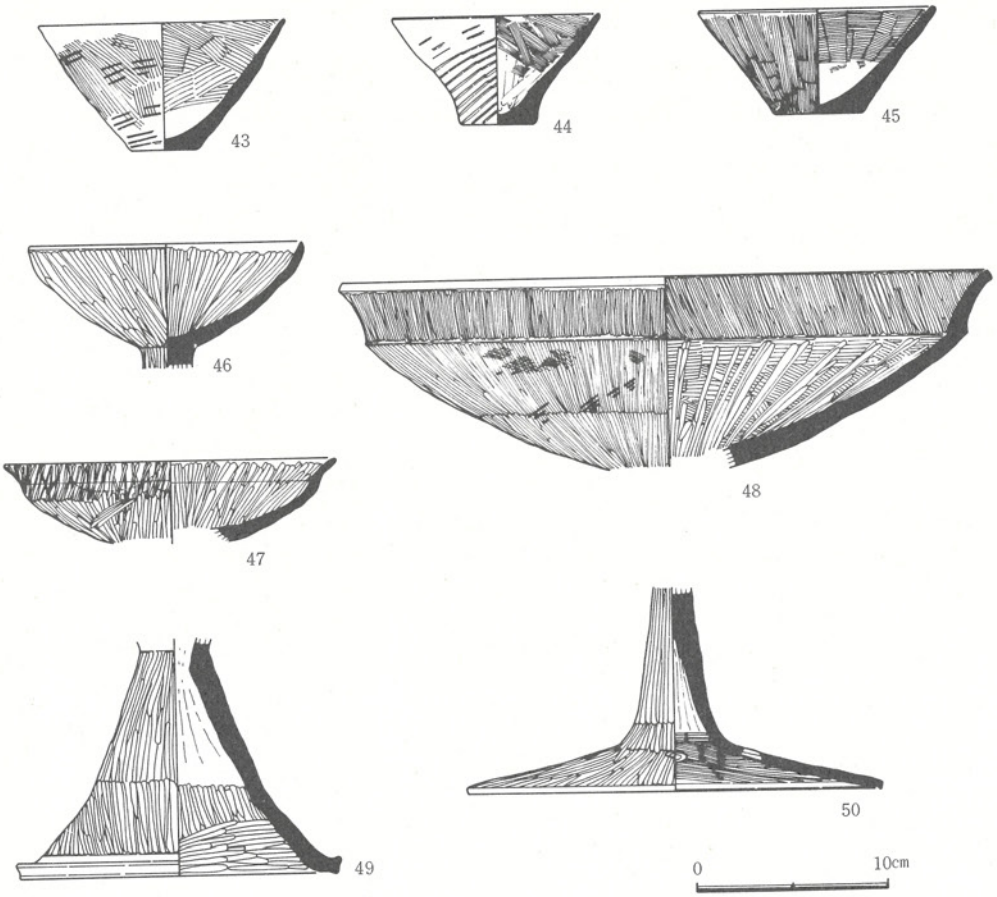


fig. 15　溝15 出土土器実測図

高杯Ｂは小形で杯部上面の屈曲が弱いもの（47）と大形で屈曲が強く，外面に稜を形成するもの（48）がある。いずれも細かなヘラミガキを施すが，（48）は外面右上がりのタタキのちハケ＋ヘラミガキ，内面は下半ヨコハケののちヘラミガキである。いずれも脚部を挿入付加する。

脚部（49・50）は緩やかに外下方に拡がり，端部を上下に肥厚させるもの（49）と屈曲して外方に拡がるもの（50）がある。いずれもヘラミガキあるいはハケ調整を行い，（50）は４孔を施し，挿入付加法の痕跡を示す。

溝16（ＳＤ116）

４Ｄ６グリッドから４Ｇ５グリッドにかけて西北～南東に直線状に伸びる（fig. 6・16）。

第Ⅰ次調査で検出された溝１と繋るようであり，４Ｇ５グリッド部分では地山の高まりによって溝底，及び痕跡が確認されたのみであるが，本来は溝15の弧状にカーブする部分に繋っていたことが推定され，溝１と溝15の環溝を連結する平面形態であったことが考えられる。溝幅約50cmを測り，溝１・溝15と同一の規模を示す。溝深20cmで断面梯形を呈している。これも溝内に土器の投棄がみられ，大形の壺形土器底部，甕形土器などが出土している。埋積土は溝15と同じオリーブ黒色粘質土である。出土遺物は溝１・溝15と同様に黒谷川Ⅰ式の所産である。

溝16出土の土器（fig. 17）

甕形土器（１）は概要報告書Ⅰの溝１で分類した甕Ａ３に属すもので，口径が発達し，体部最大径を凌ぐ。口縁部をタタキ出し，「く」の字状に外反する。体部外面は細かいタタキののちハケ調整，下半にヘラミガキを施す。内面は口縁部ヨコハケ，体部は口縁部直下からのヘラケズリである。非常に薄手である。

鉢形土器（２）は内彎気味に立ち上がる体部と緩やかに屈曲する口縁部を有す。体部内外面及び底部にヘラケズリを施す。口縁端部内面に僅かにヨコハケを認める。

鉢形土器（３）は内彎気味に立ち上がる鉢Ａ１で，外面は右下がりの細かいタタキの

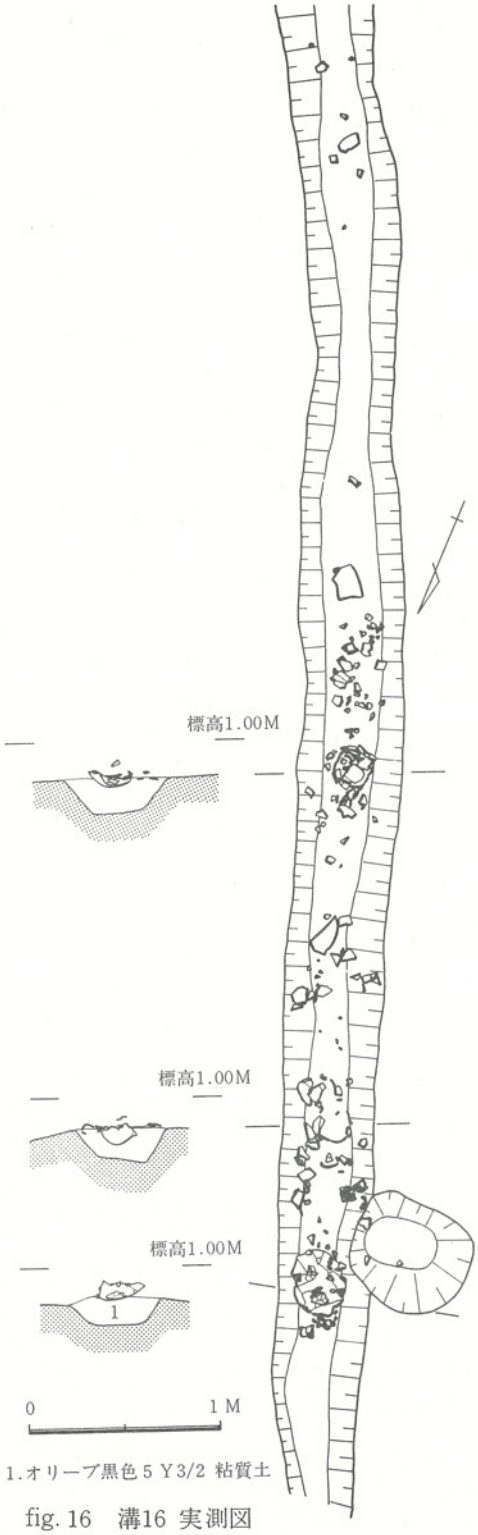


fig. 16　溝16 実測図
（４Ｄ６グリッド～４Ｅ５グリッド）

のちハケ＋ヘラミガキ，内面はヘラミガキで調整する。

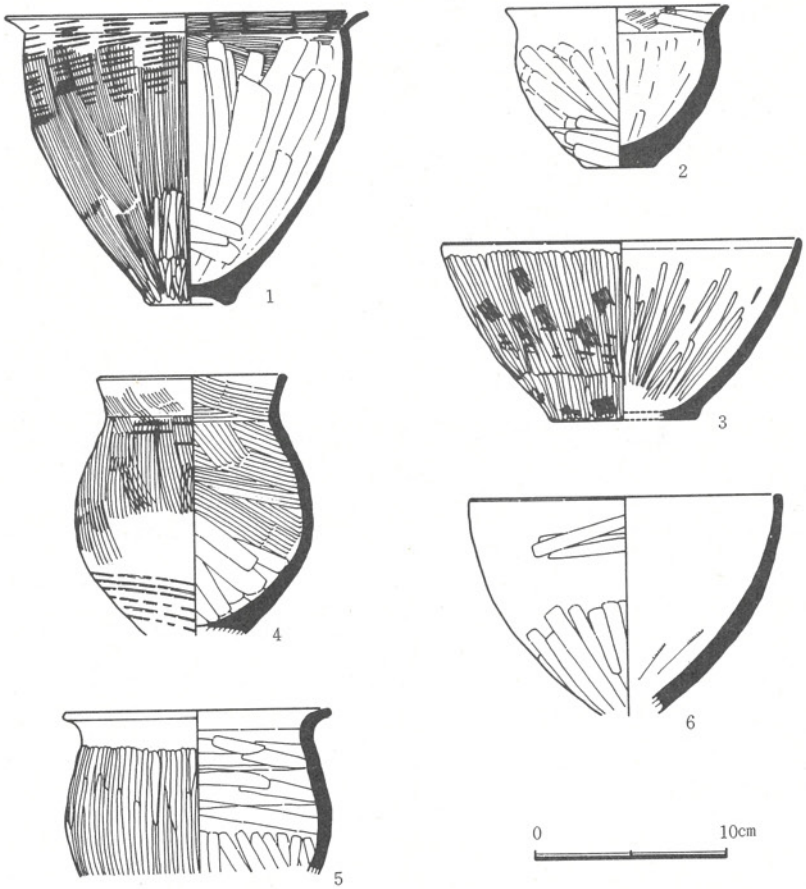


fig. 17　溝16・19　出土土器実測図

溝17（ＳＤ117）

４Ｄ６グリッドで検出された溝であり，９号住居址に切られている。第Ｉ次調査の追加調査で４Ａ・Ｂ・Ｃ６グリッドに検出された溝１の続きの溝であるが，第II次調査では溝17と呼称した。本来は同一のものである（fig. 18）。溝幅約50cm，深さ45cmを測り，梯形の断面を示す。この部分では甕形土器が集中しており，４個体が出土した。溝中位に投棄されており，灰オリーブ色粘質土で充填されている。

溝17出土の土器（fig. 19）

いずれも甕形土器であるが，体部中位あるいは体部上半が張り出した形態を示し，体部

外面に幅広の明瞭なタタキ目をとどめる甕Ａ１（７・８・９）と口縁部が緩やかに外反し，長い体部をもち，タタキ目をハケで消す甕Ａ２（10）の二形態がある。

甕Ａ１は口縁端部が僅かに外反するもの（７）と強く外反するもの（８・９）がある。体部外面は下半水平もしくは右下がりのタタキ，上半右上がりのタタキを施し，（７）では中位に粗いヘラミガキ，（８・９）では下半にヘラケズリを施す。いずれも口縁部をタタキ出しており，（７）には平底タタキ，（８）にはヘラケズリをとどめる。内面は口縁部直下からヘラケズリを行っており，（７・８）の口縁部にはヨコハケを施している。（７）の甕形土器は三分割成形によって作られている。

甕Ａ２の（10）は体部中位上半が弱く膨らむ長胴形のもので，口縁端部を僅かに摘み上げている。概してこのタイプの甕形土器は入念に仕上げられており，精製品が多い。体部外面のタタキは識別しえないまでにハケ調整されており，内面は口縁部境にユビオサエをとどめるが，上半からのヘラケズリは極めて丁寧に行われる。器壁の薄い硬質のものである。

fig. 18　溝17 実測図

９号住居址（ＳＢ119）

東側調査区で検出された唯一の隅円方形住居址であるが，全体の規模については明確にしえない（fig. 20）。一辺３・４ｍ以上を測る。第Ⅰ次調査で検出された土坑13（ＳＫ113）は本住居址のコーナの一辺であることが判明した。地山にほぼ垂直に切り込んで壁を形成しており，壁高約45cmを測る。極度の湧水と砂泥の吹き出しにより，床の確認は行えなかった。従って柱穴，周溝，炉址等は全く不明である。埋積土は大要２層に分離され，１オリーブ褐色粘質土，２　暗灰黄色粘質土である。床面からの遺物は不明であるが，住居址中央部を中心に讃岐系の大形二重口縁壺形土器，高杯形土器，鉢形土器などが出土しており，さらに朱を精製する段階に使用されたと認定できる砂岩製の石臼，石杵が出土している。黒谷川Ⅲ式の年代が与えられる。

９号住居址出土の土器（fig. 21・22）

広口壺形土器（fig. 21－１・２）は外上方に立ち上がる頸部と緩やかに大きく外反する

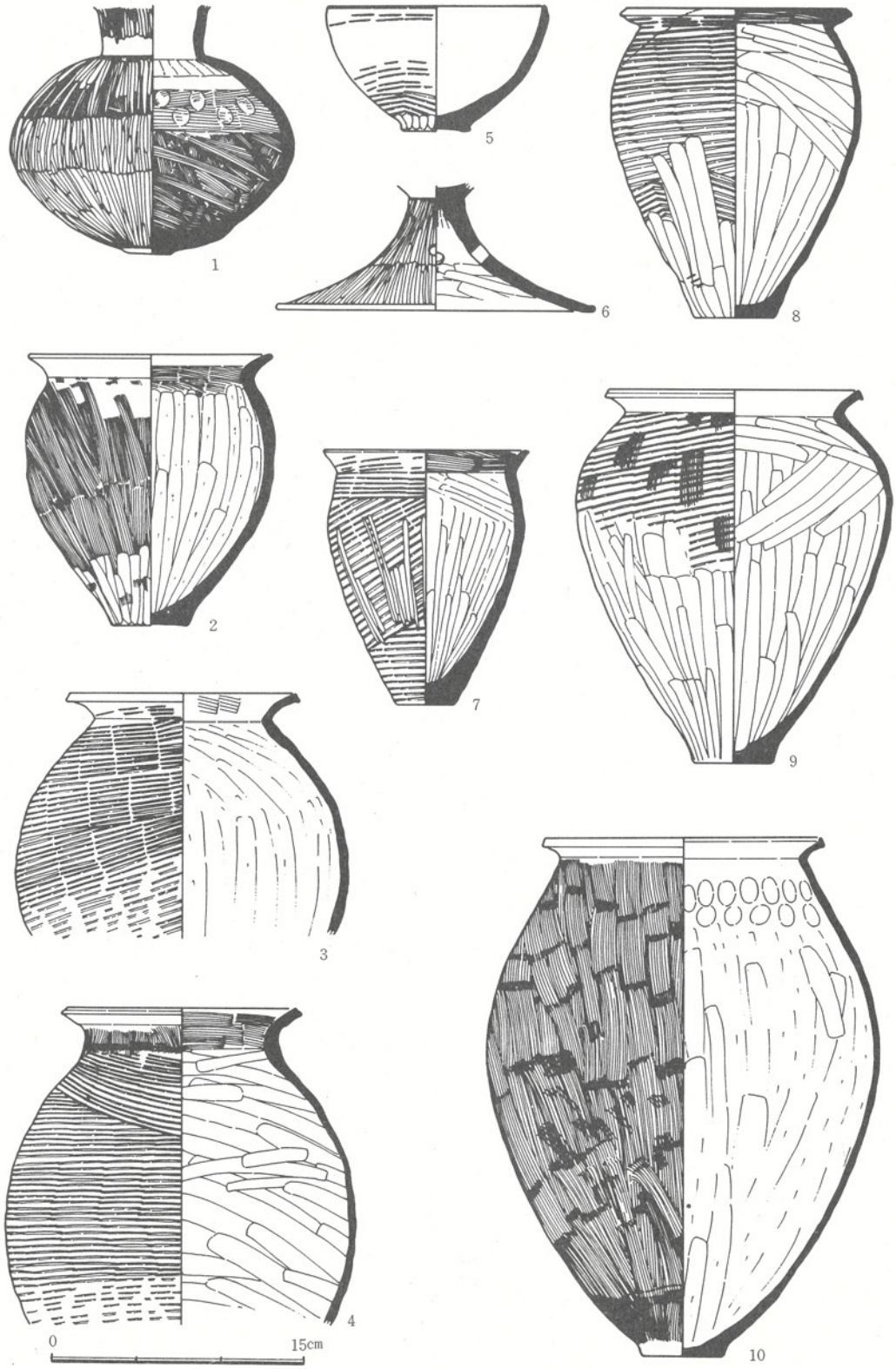
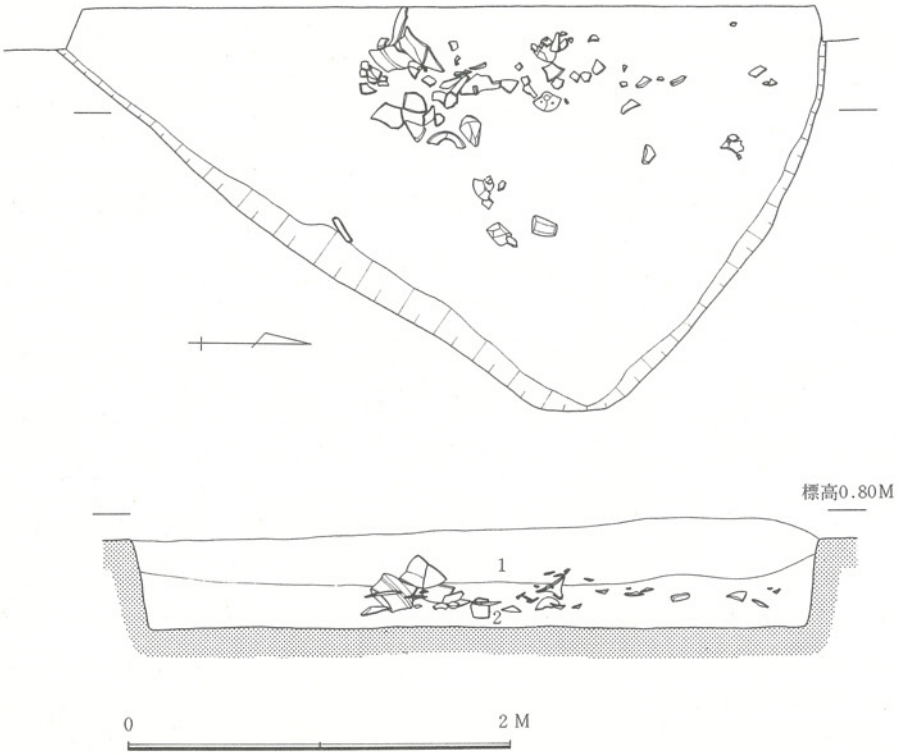


fig. 19　溝1・17　出土土器実測図



1.オリーブ褐色2.5Y4/4粘質土 2.暗灰黄色2.5Y4/2粘質土

fig. 20　9号住居址実測図

口縁部を有し，球形の体部を伴うものである。口縁端部は上方に摘み上げており，断面三角形の口縁端部を示す，庄内式併行期の東阿波型土器を特徴付ける壺形土器の器形のひとつである。いずれも口縁部外面にタタキ目をとどめ，ハケ調整を施す。内面はハケあるいはナデによって仕上げる。

丸底壺形土器（3）は口縁部を欠損するが，体部中位上半が張り出したやや扁平な球形のものであり，体部外面は細かいタテハケののち，上半及び下半から方向の異なる条線状の幅細のヘラミガキを行う。内面はナデにより調整している。

甕形土器（4）は「く」の字状に口縁部が外反し，端部を内側に摘み出すものであり，倒卵形の体部を有す，これも東阿波型土器を構成する甕形土器である。体部外面は幅細の水平のタタキののちタテハケを施し，内面は上半ユビオサエ，下半をヘラケズリするものであろう。胎土は精選されており，良質のものである。

甕形土器（５）は大きく「く」の字状に外反する口縁部をもち，球形の体部を呈するものであるが，多出する形態ではない。口縁端部を丸くおさめ，体部内面は肩部上位からヘラケズリを施す。

鉢形土器は半球形の小形のもの（６・７）と口縁端部が僅かに外反する中形のもの（８）がある。

小形のものはいずれも丸底で，（６）は下半に幅１cm程度の原体によるヨコヘラケズリを連続して行い，その他はナデである。（７）は体部中位でタタキ目の方向が異なり，下半右下がり，上半右上がりの 太目のタタキをとどめる。中位下半に粗いハケ目をとどめてお

fig. 21　９号住居址出土土器実測図

り，内面はヨコ，タテハケで調整する。

（８）は僅かに平底状の平坦面をもつ椀形状の鉢形土器で，口縁端部がやや外反する。ヘラ状工具での押圧による片口を形成している。体部外面は水平タタキののち底部にヘラケズリ，内面は全面にヘラケズリを施す。

高杯形土器（９・10）は大きく外方に伸びる浅い椀形状の杯部と，脚柱が太く緩やかに屈曲して拡がる脚部とからなる。杯部下半は弱く屈曲して立ち上がり，端部が僅かに外反する形状を示し，弱い稜を形成する。

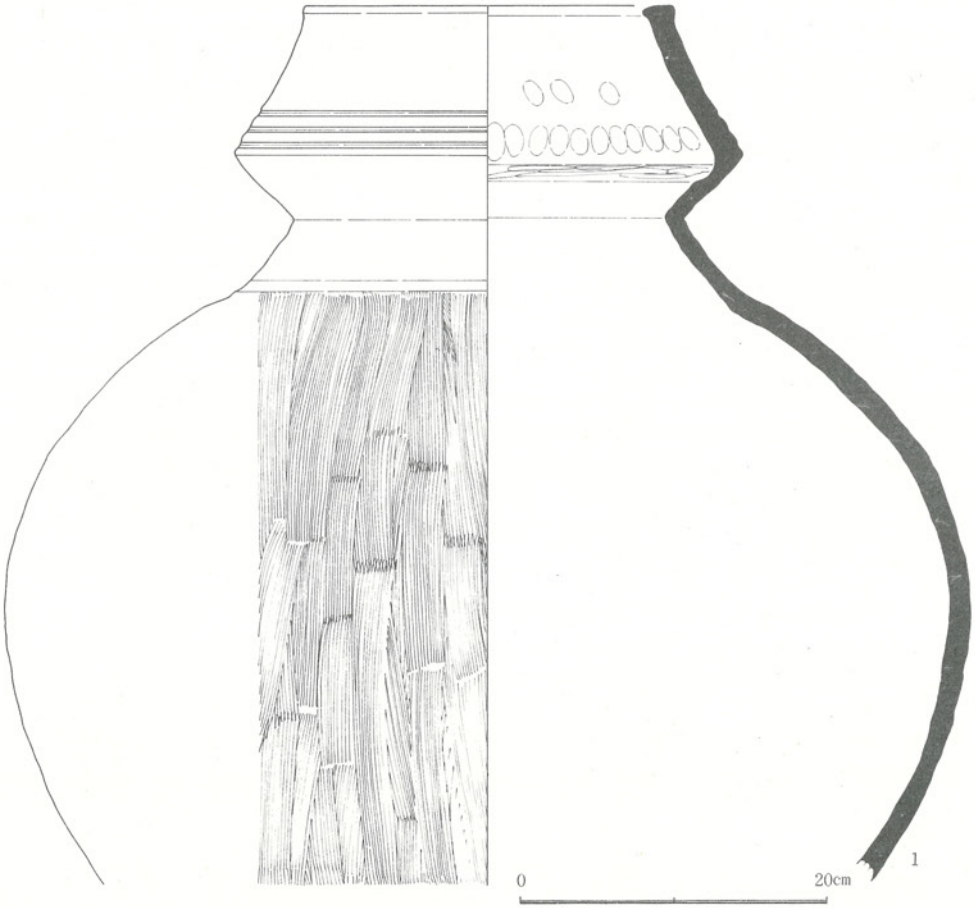


fig. 22　９号住居址出土土器実測図

（９）には杯部屈曲部分にヘラ状圧痕の連続が認められ，（10）も同様の痕跡が確認される。杯部外面は右上がりのタタキののちハケ調整を加えるが，（９）では波状文的な連続したハケ調整を行っている。脚部も細かいタタキののちタテハケであり，（９）は４孔，（10）は３孔を施す。杯部内面はいずれもヘラミガキを多用しており，脚部内面はヘラケズリである。

二重口縁壺形土器（fig. 22－１）は第Ｉ次調査部分での堰建設工事用の矢板によって切断されていたが，本来は底部まで遺存していたものと思われる。兵庫県川島遺跡20溝で出土している壺Ｃのタイプのもので，胎土中に金雲母，角閃石を含み，暗茶褐色を呈する硬質のものである。この胎土をもつ一群の土器の帰属地は，概要報告書Ｉでも触れたように讃岐であろうと考える。体部中位上半に最大径をもち，やや屈曲して内傾する頸部と屈曲して内傾する口縁部とからなる。口縁端部は内外に僅かに拡張した方形状の断面を有し，下半に３条の幅広の凹線を形成する。内面はユビオサエの他，下半，屈曲した部分に幅細のヨコヘラミガキをとどめる。体部外面はタテハケ，内面は原体幅が確認できないまでの丁寧なタテヘラケズリである。

４Ｅ６グリッド出土の縄文土器（fig. 23）

９号住居址コーナー部分に接した地山と同一色のオリーブ黄色粘質土層から出土している。遺構面を形成する本層に縄文土器が含まれていることにも留意し，何個所かで地山を断ち割ったが，この部分以外での出土は認められず，僅かな落込みが形成されていたものと考えられる。第Ｉ次調査を行う手掛かりになった分布調査の段階でも１点縄文土器を採集しており，当該時期の遺物の帰属層位，地点に検討の必要を残している。

全体の３分の１程度遺存している晩期の深鉢形土器である（１）。口縁部が外反し，口縁端部にヘラ状工具による押圧を施し，外面には口縁部，及び体部にそれぞれ１条の半裁竹管状あるいはヘラ状工具による爪形の刻み目突帯を形成する。内面，口縁部体部境にも刻み目をもつ突帯が１条施されている。内外面ともよく研磨されており，胎土中に多量の砂粒を含む。灰黒色を呈す。当該地域周辺では鳴門市大麻町光勝院寺内遺跡に前池式に近似する資料が出土しているのみである。

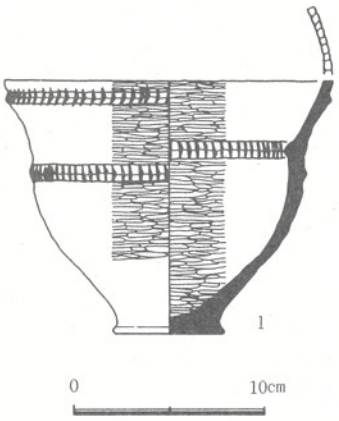


fig. 23　４Ｅ６グリッド出土縄文土器実測図

土坑26（ＳＫ126）

４Ｈ５グリッドで検出された不整円形の土坑である。長軸90cm，短軸80cm，深さ約10cmの浅い皿状の断面を示す。埋積土は暗褐色粘質土で，甕形土器２個体分，鉢形土器１個体

が出土している（fig. 24）。

土坑26出土の土器（fig. 49）

甕形土器（１・２）は倒卵形の中位が膨らんだ体部を有し，「く」の字状に外反する口縁端部が丸みをもって，内側に摘み出す形態のものである。幅細の右下がりのタタキののち，細かいタテハケでタタキ目を消しており，内面は肩部ユビオサエ，上位下半より入念なヘラケズリを行う。

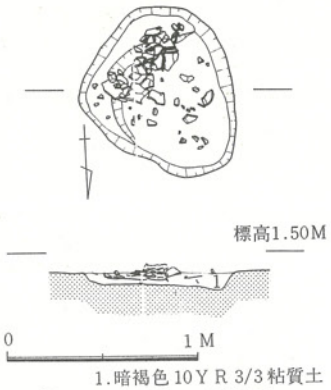


fig. 24　土坑26実測図

鉢形土器（３）は内彎気味の体部をもち，僅かに平底をとどめるが，ヘラケズリによって底部を形成している。体部外面は幅広の右上がりのタタキののち，上半はナデによりタタキ目を擦り消す。内面はナデであるが，底面にヘラ原体の圧痕を多数とどめる。黒谷川Ⅲ式の所産と考えられる。

土坑34（ＳＫ134）

４Ｆ４グリッドで検出された土器溜りである。落込み自体は隅円方形状の平面プランをもち，北東部で不整楕円形の浅い落込みを伴う（fig. 25）。出土土器はそれぞれに接合関係をもち，一つの土坑と捉えうる。

土坑内埋積土は６層に分離され，１　暗灰黄色粘質土，２　黒褐色粘質土，３　赤褐色粘質土，４　暗褐色粘質土，５　オリーブ褐色粘質土，６　暗オリーブ褐色粘質土となる。この内第２層は多くの

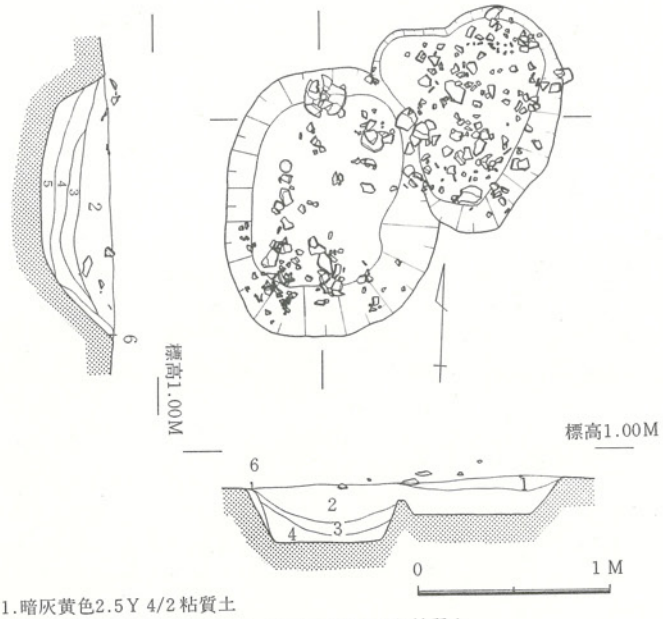


fig. 25　土坑34実測図

炭化物を混入しており，第３層は焼土の堆積層である。出土遺物は第２層に集中しており，坑底に至るものは微量である。隅円方形状の土坑の規模は長軸 1.4m，短軸 1.1mの南北の主軸をもち，深さ約40cmを測る。舟底状の断面形態を呈する。多くの土器片が出土しているが，復元しうる個体は少ない。黒谷川Ⅲ式の年代である。

土坑34出土の土器（fig. 26）

広口壺形土器（１）は球形の体部をもち，短く直立する頸部と，大きく外反して端部を内傾気味に摘み上げる口縁部とからなる。口縁端部に２条の擬凹線を形成する。体部外面は細かなタタキののち，体部上位で方向が異なるタテハケにより，タタキ目を完全に消している。内面上位は入念なナデ，ユビオサエ痕をとどめるが，頸部との境にはヘラミガキ状の調整を施している。中位以下，非常に丁寧なタテヘラケズリである。

鉢形土器は中形の椀形状のもの（２・３）と丸底と考えられるもの（４）がある。（２）は外方に立ち上がる体部を有し，体部上位が僅かに屈曲し，弱い稜を形成する。外面はナ

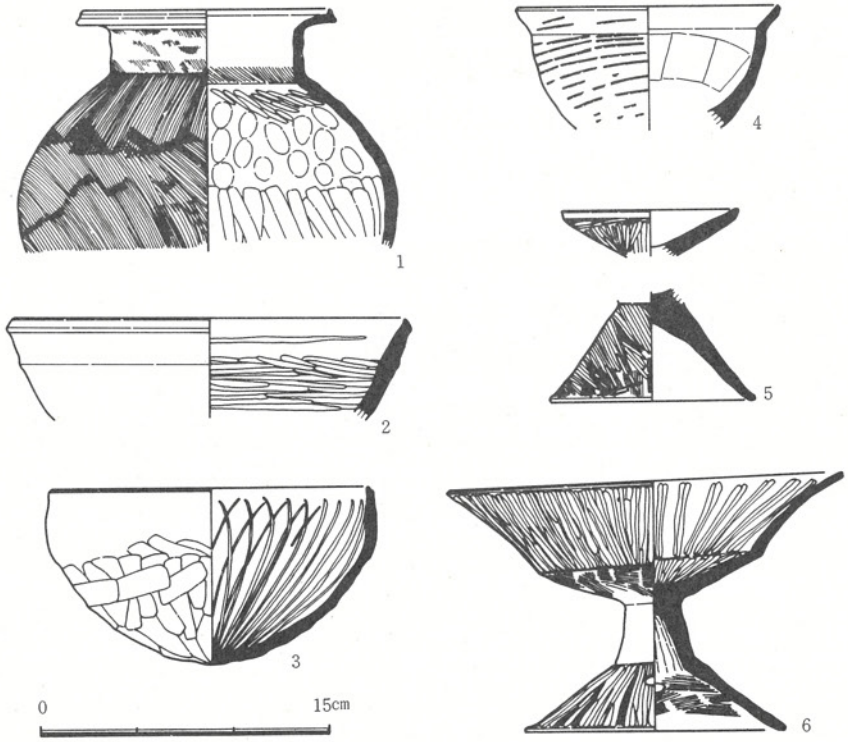


fig. 26　土坑34出土土器実測図

デ，内面はヨコヘラミガキである。（３）は深い椀形状を示し，体部は内彎気味に立ち上がる。口縁端部を方形状におさめ，１条の擬凹線を配する。体部外面中位下半ヘラケズリ，上半ナデて調整している。内面は放射線状の幅細のヘラミガキが左右から交叉する。（４）は内彎気味に立ち上がる体部と屈曲してやや内傾する口縁部とからなる。右上がりのタタキ目をとどめ，口縁部をタタキ出す。外面ナデ，内面横位への板ナデである。

器台形土器（５）は今回の調査でも出土量は極めて少ない。接合しないが同一個体と考えられる。外下方に伸びる脚部と短く上方に伸びる受部とからなる。口縁端部は上方に摘み上げられており，内外面を細かい入念なヘラミガキで仕上げる。

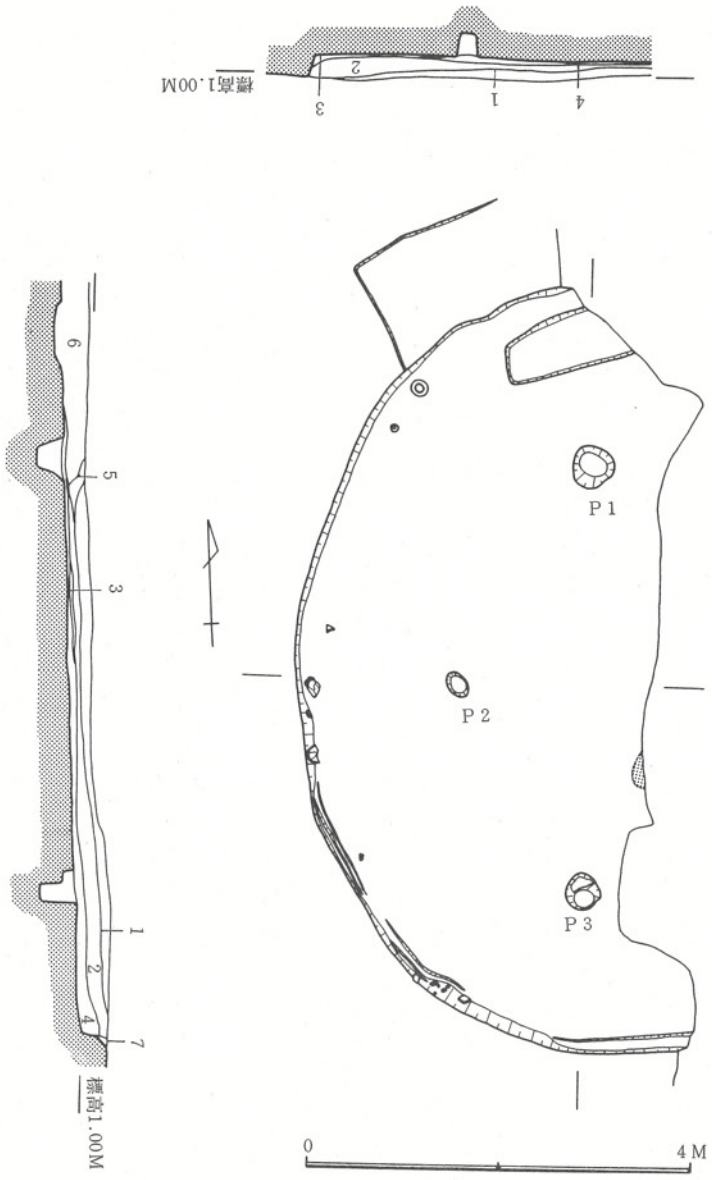
高杯形土器（６）は屈曲して僅かに外反する杯部を有し，脚部は段を形成し，丸みをおびて外下方に拡がるものである。杯部外面下半，断続したハケ，上半及び内面幅細のヘラミガキ，脚部外面は脚柱ナデ，脚部ハケののちヘラミガキ，内面ハケ調整を行う。３孔を施す。

端部に１条の擬凹線をとどめる。

８号住居址（ＳＢ108）

４Ｇ・Ｈ13グリッドで検出された円形住居址であるが，第Ｉ章で触れたように西側調査区では大きく削平を受けており，僅かに一部が検出されたにとどまる。本住居址は約2/5程度が遺存していたのみである。復元径約８ｍを測り，床までの深さ36㎝である。住居址内の埋積土は基本的には，１　にぶい黄褐色粘質土，２　オリーブ褐色粘質土，３　オリーブ黒色粘質土，４　灰オリーブ色粘質土の４層であるが，中央部以北では５　灰オリーブ色粘質土，６　灰オリーブ色粘質土が入り込んでいる（fig. 27）。

確認された主柱穴は３個所であり，各柱心間距離はＰ１－Ｐ２：２・７ｍ，Ｐ２－Ｐ３：２・６ｍを測る。６本主柱の構造と推定される。各柱穴の深度はそれぞれ30㎝，26㎝，38㎝である。柱穴間に囲まれた部分には，中央部からやや南に偏在して焼土の拡がる痕跡が確認された（網目部分）。炉址周辺と想定される。周溝は幅10㎝程度の浅いものであり，住居址床面南西部に一部検出されたのみである。Ｐ１の北側には40㎝×1.3ｍ以上の長方形状の10㎝程度の浅い落込みがある。類似した落込みは，第Ｉ次調査で検出された３号住居址にも認められるが，今ひとつその性格を明らかにできない。北側の壁に接する部分には，1.2ｍ×1.7ｍ以上の長方形の土坑状の落込みが形成されている。概要報告書Ｉでは土層の相違から住居址に付設しないことを考えたが，円形の平面プランをもつものにいず



1.にぶい黄褐色10ＹＲ4/3粘質土　2.オリーブ褐色2.5Ｙ4/3粘質土　3.オリーブ黒色５Ｙ3/2粘質土
4.灰オリーブ色５Ｙ5/3粘質土　5.灰オリーブ色５Ｙ4/2粘質土　6.灰オリーブ色7.5Ｙ4/2粘質土
7.オリーブ褐色2.5Ｙ4/3粘質土　（網目は焼土の範囲）

fig. 27　８号住居址実測図

れもこの土坑が認められるため，従来の見解を訂正し，張り出し部と理解したい。

床面からの遺物には壺形土器，鉢形土器などがあるが，いずれも完形に復元できるものではない。黒谷川Ⅰ式の年代を想定できるが，より厳密にはⅠ式よりは新らしくⅡ式よりは古い時期を考える。一括資料に乏しく，この段階の実態把握は次年度以降の課題である。

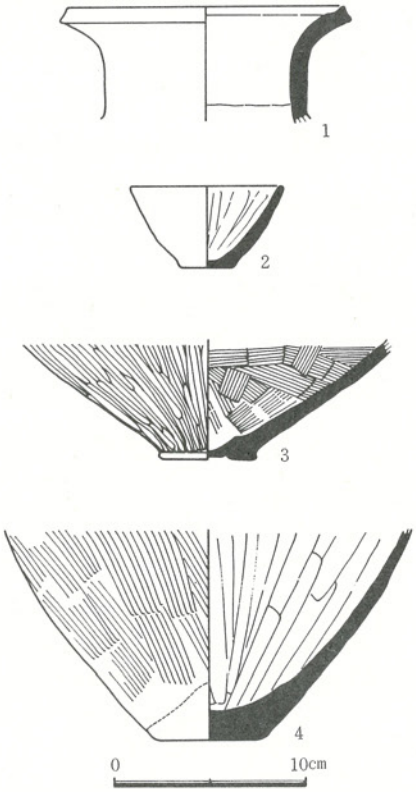


fig. 28　8号住居址出土土器実測図

8号住居址出土の土器（fig. 28）

広口壺形土器（1）は短く立ち上がる頸部と，緩やかに外反する口縁部をもつ。口縁端部は僅かにナデにより摘み出されており，方形状を呈する。

鉢形土器（2）は小形のもので，上方に伸びる体部を有す。口縁端部はユビオサエによって整形しており，ナデによって調整するが，内面は下から上へのナデアゲ痕が明瞭に残る。胎土中砂粒を多量に含んでいる。

底部（3・4）はいずれも壺形土器に伴うものであるが，（3）は体部扁平球形の広口壺形土器に伴うものと考えられ，いわゆるドーナツ底を有している。（3）の外面はヘラミガキ，内面ヨコハケである。（4）は外面幅の広いタテハケ，内面ヘラケズリで調整する。

10号住居址（ＳＢ110）

4Ｄ12グリッドで検出された。これも北西の一部が確認されたのみである。方形の平面プランを有し，北西部に拡張痕跡をとどめる（fig. 29）。一辺約4.5mの方形住居址である。住居内埋積土は2層であり，1　暗オリーブ褐色粘質土，2　灰オリーブ色粘質土に分離される。床までの壁高は14cmを測るのみであり，周溝は認められない。主柱穴は北西コーナー部分から約1.5m北東に1個所検出されたのみであるが，4本主柱の構造と考えられる。

柱穴（Ｐ１）は掘り方上面の直径30cm，底径12cm，深度50cmを測り，埋積土は３　暗オリーブ褐色粘質土，４　オリーブ褐色粘質土の２層に分かれるが，下層からは地鎮の意味と理解することのできる状態で，甕形土器１個体分が柱穴幅一杯に据え置かれていた（fig. 30)。この他に床面からの遺物は皆無である。黒谷川Ⅱ式の所産と考える。

10号住居址出土の土器（fig. 31）

肩部が張り出す倒卵形の体部の長い甕形土器である。口縁部は折り返して強く外反し，端部を内傾気味に摘み出す。僅かに２条の擬凹線をとどめる。しっかりとした平底を残す。体部外面は右下がりの幅細の細かいタタキののち，タテハケを施すが，肩部上半と下半でハケの方向が異なる。内面は上半ユビオサエ，下半非常に入念なヘラケズリである。庄内式併行期の古い段階の東阿波型土器群の典型的な甕形土器といえる。内底面に焦げ付きをとどめる。

12号住居址（ＳＢ112）

４Ｅ12・４Ｆ13グリッドで検出された隅円方形住居址で，８号住居址の張り出し部の一部を切っている。これも北西部の一辺がかろうじて検出されたのみである（fig. 32)。一辺6.2mを測り，第Ⅰ次調査以降検出された方形住居址の中では比較的規模の大きな住居址である。住居址内埋積土は２層であり，１　暗オリーブ褐色粘質土，２　暗灰黄色粘質土が認められる。床面までの壁高は約25cmである。床面には幅８cmの周溝が検出されたが，コーナー部では壁基底部とは平行せず，僅かに内側に巡っている。精

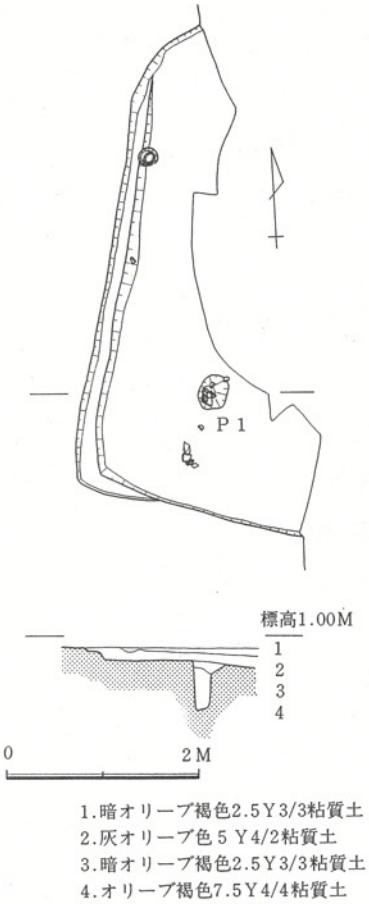


fig. 29　10号住居址実測図

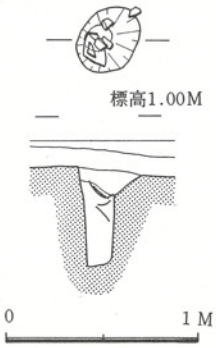


fig. 30　10号住居址柱穴実測図

査しえた部分では柱穴は確認できず，上屋構造については不明である。床面からの一括資料は皆無であるが，覆土中から壺形土器，鉄器片などが若干出土している。

12号住居址出土の土器(fig. 33)

鉢形土器（１）は丸底の小形のもので，椀形状の体部と僅かに屈曲して外反する口縁部をもつ。体部外面ヘラケズリ，口縁部内外面，及び体部内面ナデを施す。

二重口縁壺形土器（２）は球形の体部と僅かに外方に拡がる短く直立した頸部，及び屈曲して大きく外反する朝顔形の口縁部とからなる。体部は中位に最大径があり，僅かに平底に近い丸底を呈している。外面下半は右上がりの細かいタタキを施すが，細いタテハケによって消されており，殆ど識別しえない。内面は上半ユビオサエ，下半にヘラケズリを施すが，入念に行われており，器壁の薄いものである。頸部，口縁部はナデで調整するが，口縁部は屈曲して外反する部分で鋭く拡張し，しっかりとした稜を形成する。端部は丸みをもっておさめる。後述する井戸１出土の広口壺形土器と同様の技法，プロポーションを示してお

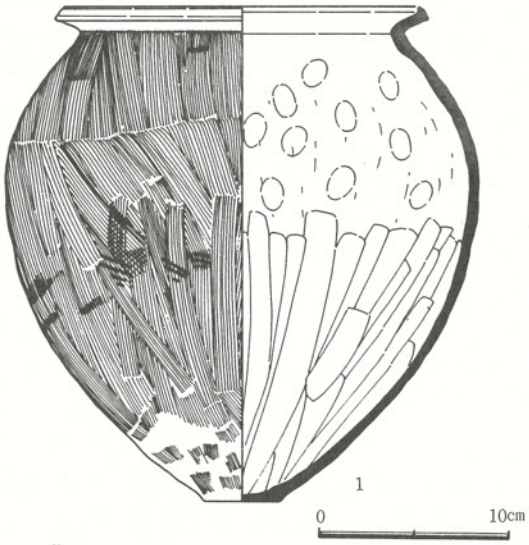
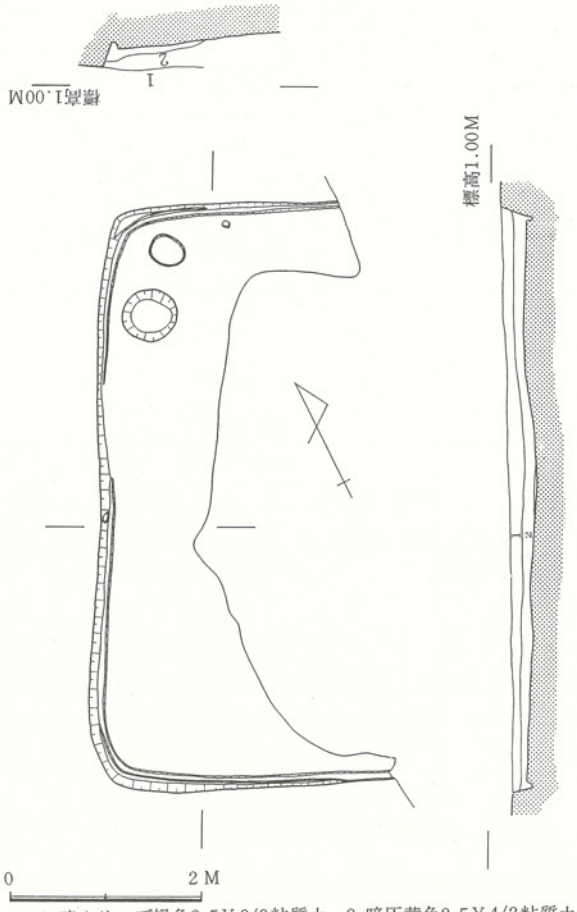


fig. 31　10号住居址柱穴出土土器実測図



1.暗オリーブ褐色2.5Y 3/3粘質土　2.暗灰黄色2.5Y 4/2粘質土

fig. 32　12号住居址実測図

り，黒谷川Ⅲ式段階で供伴関係を示すものであろう。但し，出土率はさほど高くはない。

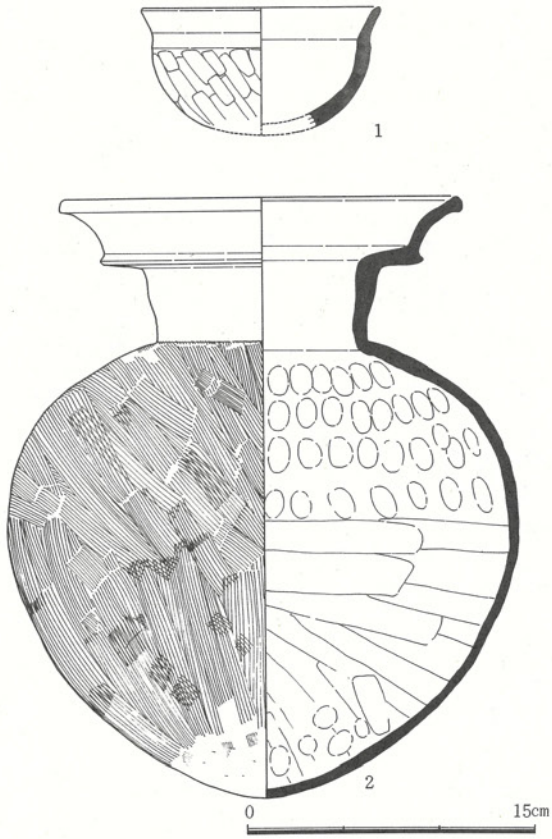


fig. 33　12号住居址出土土器実測図

井戸１（ＳＥ101）

４Ｆ14グリッドで検出された。不整円形の平面プランを示し，東西径3.4ｍ，南北径3.6ｍを測る素掘り井戸である。井戸底は湧水が激しく，壁の倒壊という繰り返しのため，充分な精査はできていないが，東西径1.4ｍ，南北径1.5ｍのほぼ円形の底部を示す（fig. 34）。

本井戸は地山のオリーブ黄色粘質土層下層の砂層を掘り込んで構築されている。遺構内埋積土は８層に分離され，１　暗灰黄色粘質土，２　灰色粘質土，３　灰色粘質土，４　灰色粘質土，５　オリーブ黒色粘質土，６　オリーブ黒色粘質土，７　オリーブ灰色粘質土，８　暗緑灰色粘質土である。断面形態はなだらかに落ち込む梯形であるが，所々に段状の傾斜面を呈する。深度 1.2ｍを測り，井戸底の海抜はマイナス35㎝である。本井戸中には多量の遺物が廃棄されており，特に２・３層に集中している。また最下層の第８層からは完形の広口壺形土器(fig. 35－4)が出土しているが，上層の土器との年代的な隔たりは指摘されず，短時間のうちに堆積，廃棄されたことを示している。またこの井戸からは第３層から砂岩製の朱精製用具である石臼，第７層から石杵が出土しており，本遺跡で朱の精製が行われていたことを示す資料として重視される。黒谷川Ⅲ式の所産である。

井戸１出土の土器（fig. 35～38）

井戸出土遺物の説明にあたってⅢ式の器形分類を行うが，その基準は適時本文中で触れ

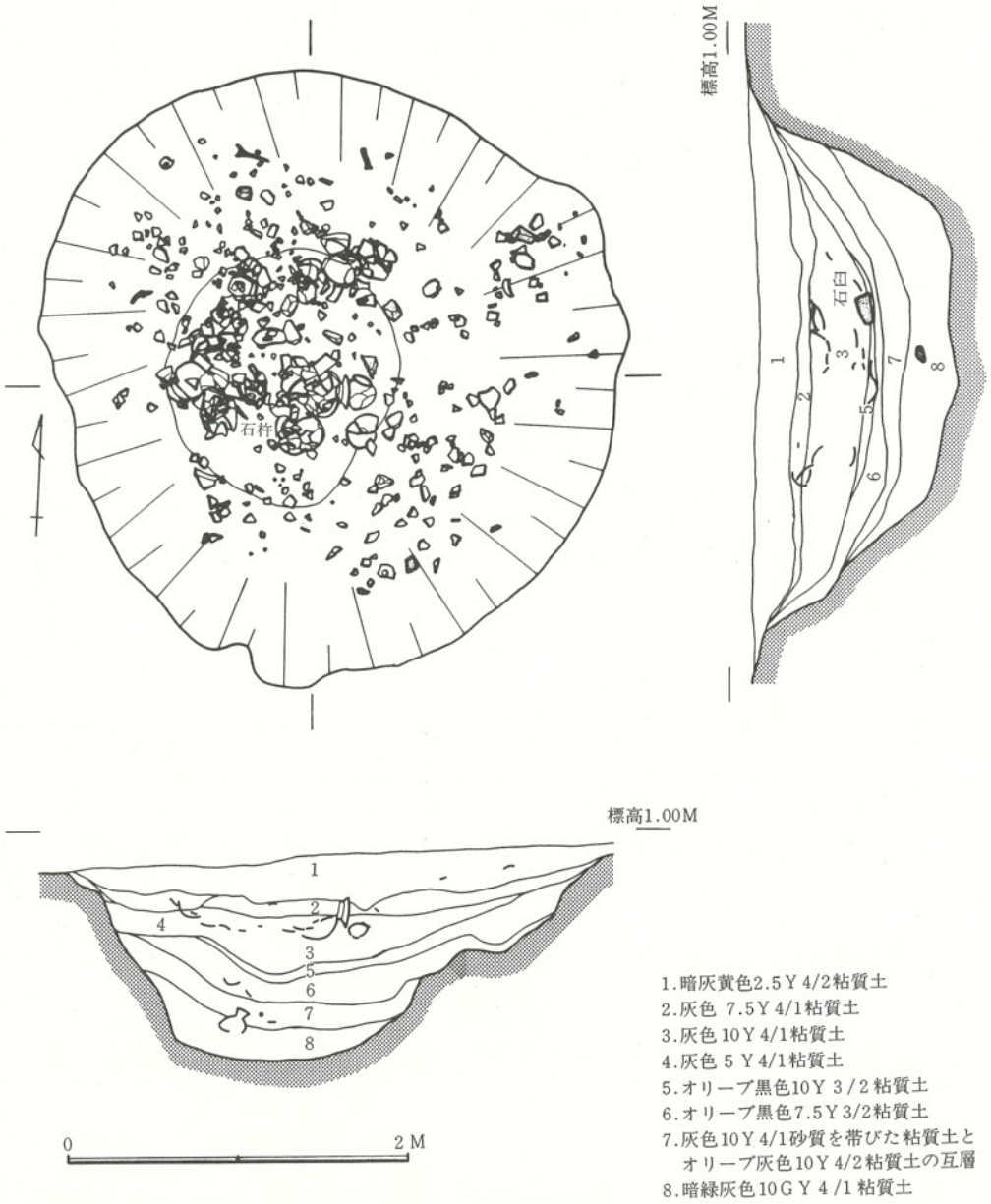


fig. 34　井戸１実測図

ることにする。

二重口縁壺形土器　壺A(１)は大きく外反する頸部と屈曲して外上方に立ち上がる口縁部とからなる。端部を方形状におさめ，口縁部頸部境には鋭い稜を形成する。外面は入念

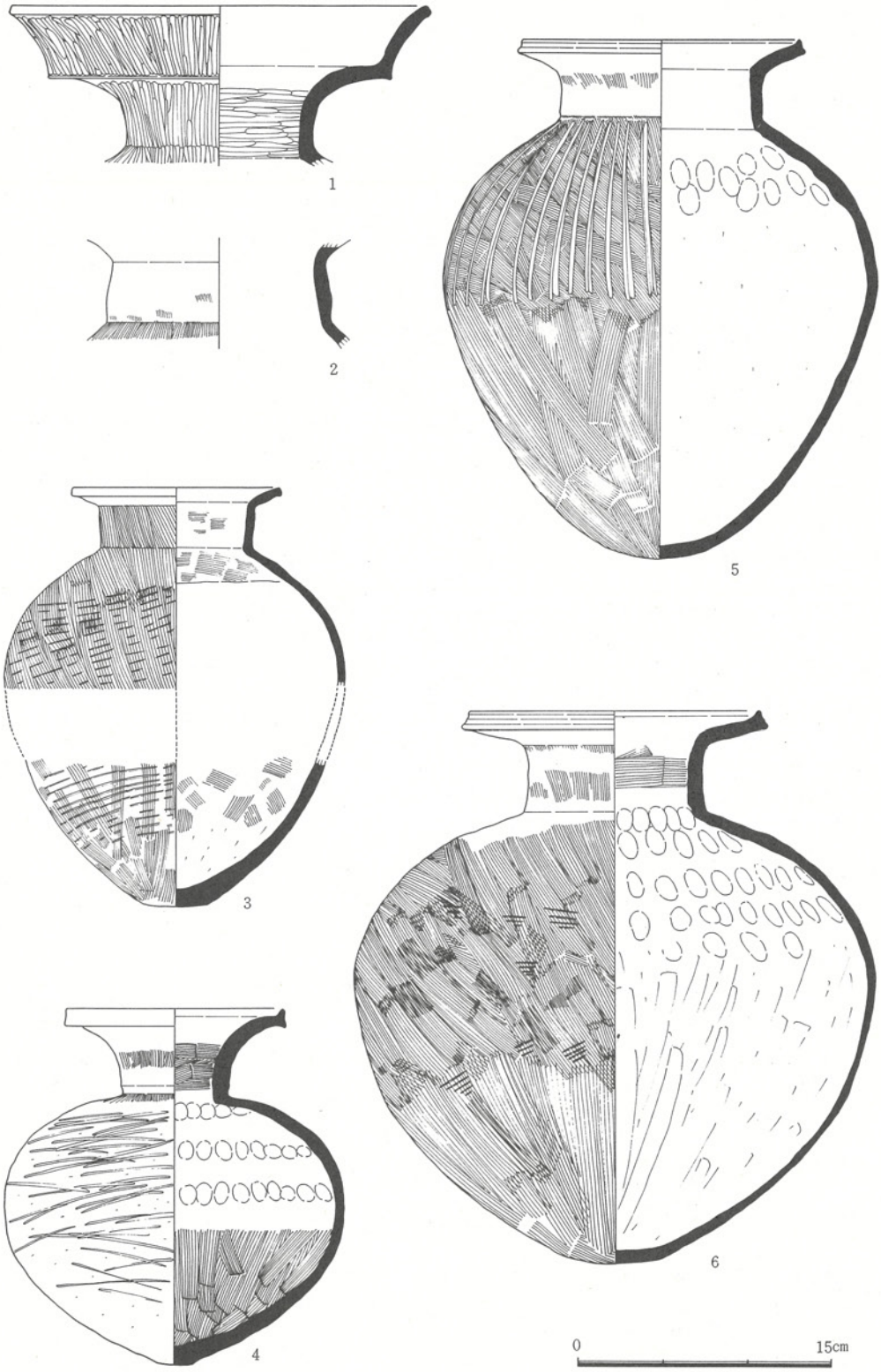


fig. 35　井戸 1 出土土器実測図

なヘラミガキ，内面は頸部にヨコヘラミガキを施す。明赤褐色を呈し，砂粒の多い軟質のものである。

広口壺形土器（２）は頸部のみであるが，内傾する頸部から口縁部が外反するもので，川島遺跡で分類された広口壺Ｂに該当する。体部外面はハケであり，讃岐系の壺形土器と考える。

広口壺形土器　壺Ｂ1　（３）は直立する頸部と短く外反する口縁部をもつ。端部は方形状におさめる。体部は中位が膨らんだ長胴形のもので，平底をとどめる。体部外面は下半水平もしくは右上がりのタタキ，上半は右上がりのやや粗なタタキを施し，タテハケで調整する。平底タタキ技法を認める。内面は下半ケズリ＋ハケ，上半はナデて仕上げるが，部分的にハケ目をとどめる。これも淡褐灰色を示し，砂粒を多く含む。

広口壺形土器　壺Ｂ2　（４)は井戸底近くから出土したものである。やや扁平球形の体部と緩やかに外反する口頸部をもつ。体部は中位で最大径を示し，僅かに小さな平底を残す。外面はタタキのち全面をヨコヘラケズリしたのち，幅細の原体を用いての粗雑なヨコヘラミガキである。肩部にハケ調整を行う。内面は下半ハケ調整，上半ユビオサエである。口縁端部は上方に摘み上げられて拡張しており，頸部内面にヨコハケをとどめる。

広口壺形土器　壺Ｂ3（５）は倒卵形の体部と摘み上げられた口縁部をもつ，東阿波型土器群の壺形土器を特長付ける器形のひとつである。体部中位上部に最大径を示し，僅かに平底を意識した丸底を有す。頸部は短く直立し，口縁部は緩やかに外反，端部を上方に摘み上げ，断面三角形におさめる。２条の擬凹線をとどめる。体部外面は水平もしくは右上がりの細かなタタキののち，細かなハケでタタキ目を完全に消しており，さらに肩部から中位にかけて放射線状のヘラミガキを行う。内面は上位ユビオサエののち，中位下半原体が識別できないまでの丁寧なヘラケズリを行っており，器壁を極めて薄いものにしている。口頸部はハケのちナデ調整である。外面に煤の付着をとどめる。

広口壺形土器　壺Ｂ3（６）は体部中位より上半が大きく膨らみ，丸底にちかい平底を僅かに残す。頸部はやや外上方に立ち上がり，口縁部は大きく外反する。端部を強く摘み上げており，断面三角形を呈する。２条の擬凹線を施す。体部外面は下半右上がりの幅細のタタキ，上半は右下がりのタタキののち，細かなハケ調整。内面は上半ユビオサエ，下半入念なヘラケズリである。頸部外面はタテハケ，内面はヨコハケを施す。これも器壁の薄い精緻なつくりである。

広口壺形土器　壺Ｂ2.（７）は倒卵形の体部と大きく外反する口縁部を有し，口径の発達

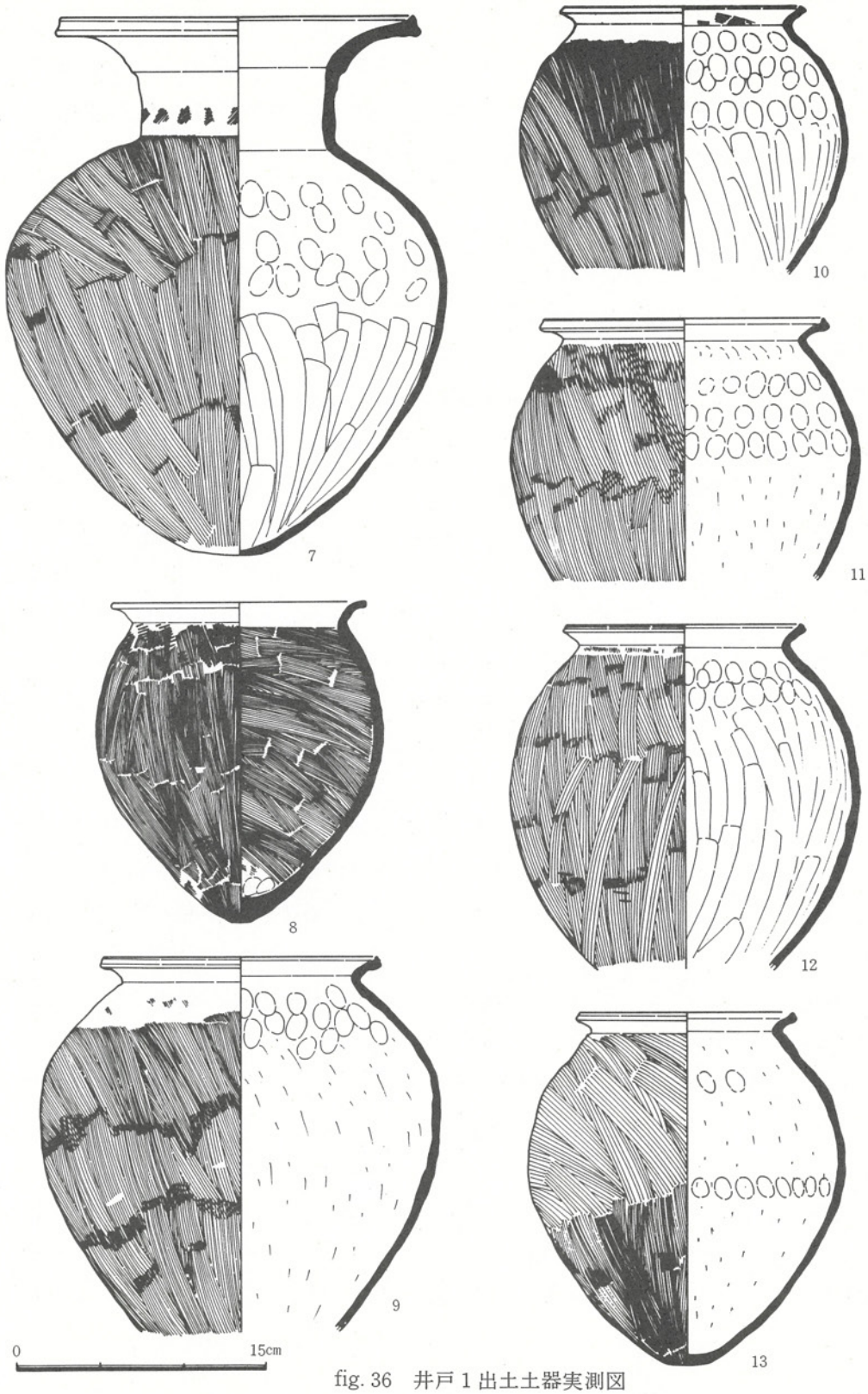


fig. 36　井戸１出土土器実測図

したものである。体部中位上半に最大径があり，平底をとどめる。頸部から口縁部にかけては緩やかに大きく外反し，端部を上方に摘み出し，断面三角形状を呈す。頸部口縁部接合部分では弱い段を形成している。体部外面細かい右下がりのタタキののち，タテハケでタタキ目を消している。内面は上半ユビオサエ，下半ヘラケズリである。頸部外面はハケを断続的に左右交互に施しており，みかけ上の鋸歯文状のハケ目をとどめる。

甕形土器（８～20）は若干のバリエーションがあり，中形のものと小形のものに分かれる。甕Ｂ（８）は第Ⅴ様式系のプロポーションを引き継ぐもので，緩やかに外反する口縁部と中位が弱く膨らみ，尖り気味の小さな平底をもつ体部とからなる。体部外面は右上がりの幅細の密なタタキののち，細いハケを施す。内面は底面に僅かにヘラケズリをとどめるが，口縁部境までヨコハケで調整する。内面をハケ調整する甕形土器は出土量としては極めて少ない。明赤褐色の精選された胎土である。

甕Ａ$_1$（９～18）は倒卵形の体部をもち，口縁部は「く」の字状に外反し，端部を上方に摘み出す東阿波型土器を代表する甕形土器の器形である。

いずれも体部中位に最大径があり，殆ど丸底にちかい平底を有す。外面は右下がりの幅細のタタキののち，細かなハケでタタキ目を消すものであるが，（13）のように上位と下半でハケ原体を異ならせるものも認められる。底部もハケ目をとどめるものが多い。内面は上位にユビオサエ，ナデを施すが，下半は極めて入念なヘラケズリであり，原体幅が識別しえないまでに高められたヘラケズリ技法を示している（９・11・13・14・17）。

口縁部は外端面が丸みをおび，やや肥厚して摘み上げられるものが大部分であるが，(10)のように角張って稜を形成するものも認められる。いずれも１・２条程度の擬凹線をとどめる。（12・13・16・17）には内面に焦げ付きを認める。器壁が薄く，胎土中に結晶片岩粗粒を含む。

甕Ｃ（19）は口縁部が「く」の字状に外反し，長胴形の体部をもつ小形の甕形土器である。体部下半に最大径をもち，水平のタタキによって口縁部をタタキ出している。体部は細かなハケで調整するが，タタキ目は明瞭に残る。下半はハケのち細かな連続したヘラケズリで成形しており，丸底になるものと思われる。内面は口縁部境までヘラケズリを行っており，口縁部内面にはヨコハケをとどめる。胎土は精選されており，（８）と同一のものであるが，やや厚手である。

甕Ａ$_2$（20）は体部上半のみの出土であるが，非常に小形のものである。短く外反する口縁部を摘み上げており，これも倒卵形の体部を有すものと推定される。体部外面は細か

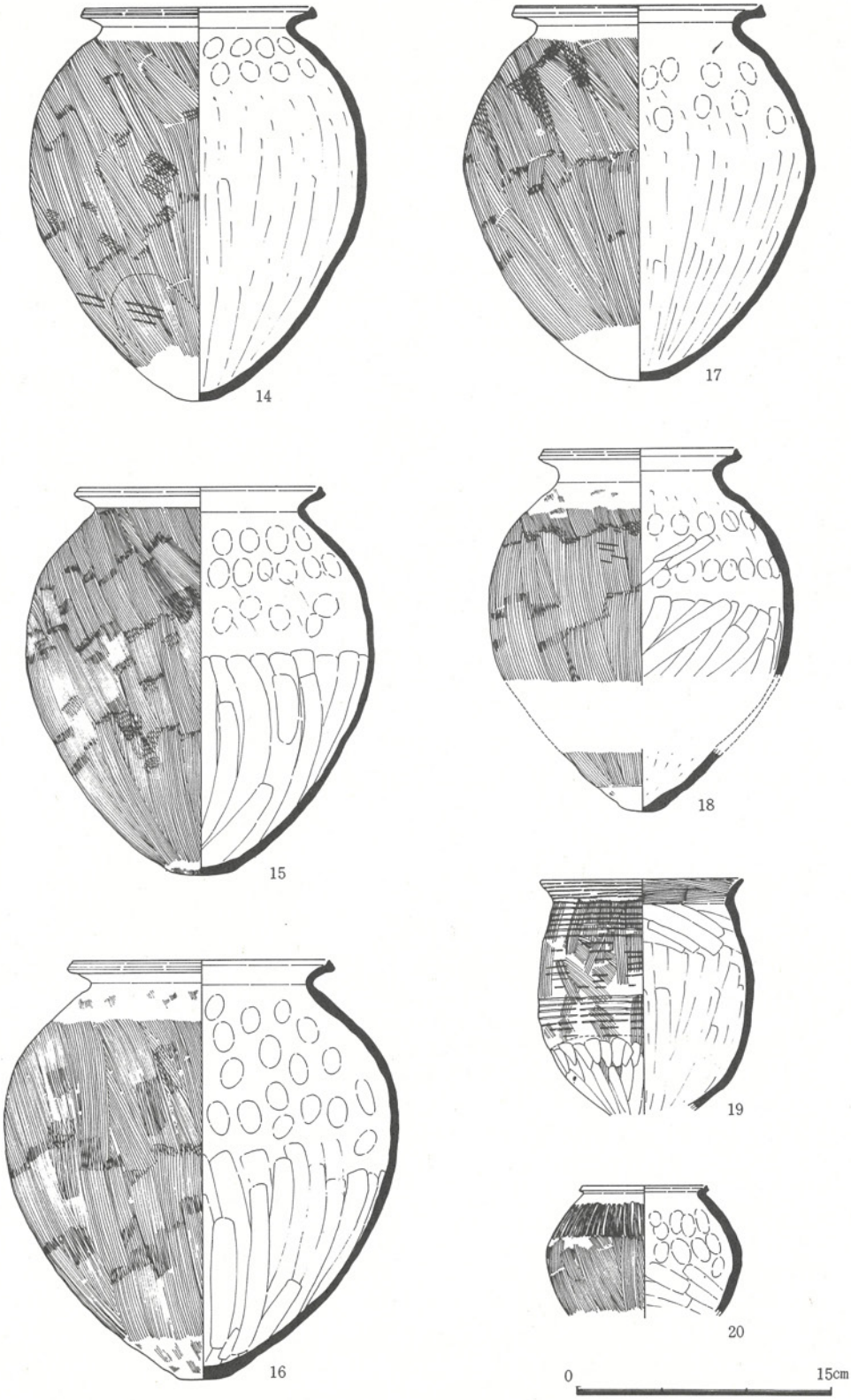


fig. 37　井戸 1 出土土器実測図

なタテハケののち，肩部に条線状のヘラミガキを施し，口縁部との境はナデで調整する。内面は上半ユビオサエ，下半にヘラケズリをとどめる。胎土は精選されており，小形の精製土器である。

鉢形土器（21～29）には小形の長胴形のものから大形の浅い椀形状のものまで認められる。

鉢A$_4$（21）は体部中位上半がやや膨らんだ長胴形のもので，口縁部を僅かに外反させる。平底をとどめており，水平のタタキののち，細かなハケと板ナデでタタキ目を消している。内面は丁寧なヘラケズリであるが，底面にクモの巣状のハケ目をとどめている。胎土中に多量の微砂粒を含む。

鉢A$_2$（22）は内彎気味に立ち上がる体部を呈し，突出した平底をもつ。右上がりの幅

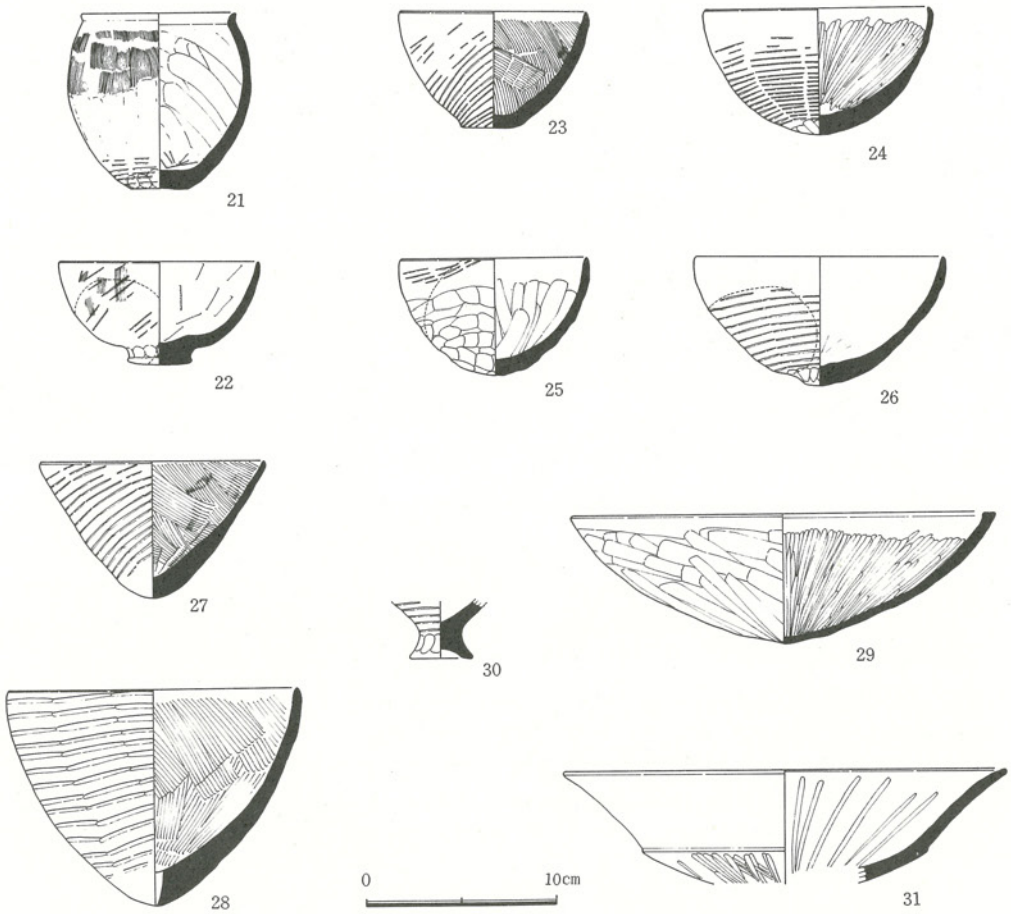


fig. 38　井戸１出土土器実測図

細のタタキののち，ナデ及びタテハケで調整する。内面はヘラ状圧痕を多くとどめる。

鉢A$_1$（23～26）は半球形の体部をもつものであるが，（23）は平底をとどめる。いずれも右上がりもしくは水平のタタキを施し，口縁部をナデて調整するが，（23）には器表面の亀裂を認める。（24～26）は外底面を細かなヘラケズリによって丸底に成形するものであるが，（25）では体部中位に及ぶ。内面は（23）連続ハケ，（24）ヘラミガキ，（25）細かなヘラケズリ，（26）ナデであり，底面にヘラ状圧痕をとどめる。（26）の胎土は精選されており，甕形土器（８・19）と同一の胎土，色調を呈している。

鉢A$_3$（27）は体部が直線状に外方に拡がり，尖り気味の丸底を有す。外面は右上がりのタタキで底部を僅かにヘラケズリし，内面にはクモの巣状のハケをとどめる。胎土中微砂粒を多量に含む。

鉢A$_3$（28）はやや内彎気味に立ち上がる有孔鉢形土器である。幅広の右上がりのタタキ目をもち，内面は連続したハケ調整である。外底面から１孔を施す。

鉢B（29）は浅い皿状のもので口縁端部を僅かに肥厚させ，平坦面を形成する。外面は右上がりの細かいタタキののち，粗いヘラケズリ，内面は入念なヘラミガキである。

製塩土器（30）は脚部のみである。遺物包含層からも若干出土しているが，出土量は極めて少ない。

高杯形土器（31）は杯部のみである。屈曲して外反気味に拡がる。内外面にヘラミガキをとどめる。

溝１（ＳＤ101）

第Ｉ次調査で検出された環溝状溝（溝１）の続き部分であり，４Ｊ12・13グリッドに拡がる。溝19に切られており，溝23を切って調査区外南西方向に伸びる。

溝16と繋るものであり，溝幅約50～60cm，深さ30cmを測る。断面梯形であるが，高杯の出土部分ではＶ字形を示し，１　黒褐色粘質土，２　灰オリーブ色粘質土の堆積が認められる。出土土器は溝理土上面に集中し，この個所では溝底に至るものはない（fig. 39）。

出土土器の配置は東から壺形土器，壺形土器（fig. 19－１），甕形土器（fig. 19－３），甕形土器（fig. 19－４），甕形土器（fig. 19－２），鉢形土器（fig. 19－５），壺形土器(fig. 40－１）であり，溝19を越えて高杯形土器（fig. 19－６）と続く。

この内 fig. 40の広口壺形土器は溝19の南側で溝幅一杯，及び周辺に散乱していた。口縁部は時期の異なる溝22に落ち込んでいたが，本来は溝１の埋土上面に据え置かれていたもの

であり，後時期の削平によって飛び散ったものと考える。

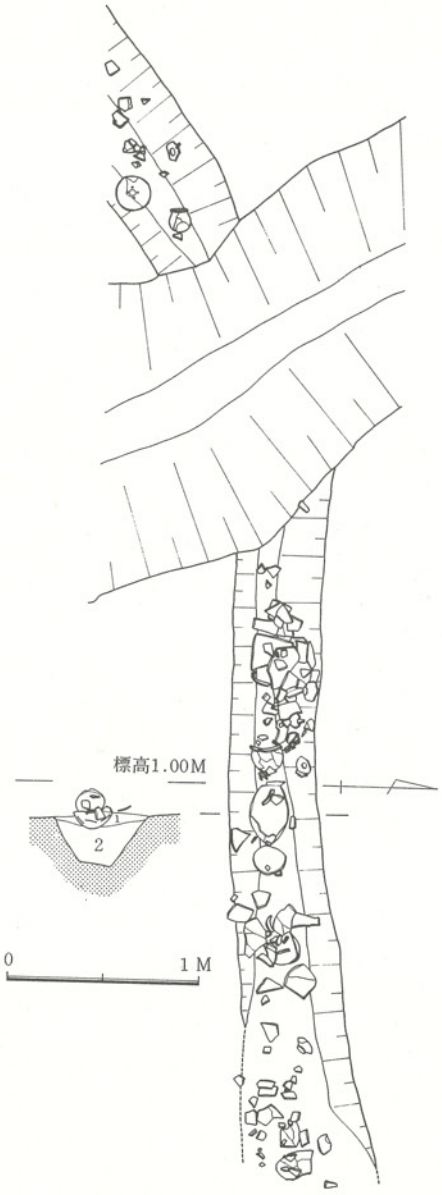
溝１出土の土器（fig. 19－１～６・fig. 40）

広口壺形土器（１）は扁平な算盤玉形の体部を呈し，中位が大きく張り出す。小さな平底をとどめる。頸部は短く直立し，口縁部は欠損するが大きく外反するものと思われる。体部外面は細かなタテハケののち，入念なヘラミガキを施している。内面は上半ユビオサエののち粗いハケ，下半幅細のハケで調整している。頸部外面にもヘラミガキが行われており，精製されている。肩部に朱塗りの痕跡をとどめる。

甕形土器にはハケ調整を行うもの（２）とタタキ目をとどめるもの（３・４）が認められる。

（２）は体部中位より上半が弱く膨らむ小形のもので，口縁部は緩やかに外反する。体部外面はタテハケを施したのち，下半にヘラケズリを行う。内面はヘラケズリであるが，口縁部との境にはヨコハケを認める。

（３・４）は体部中位に最大径をもち，口縁部は「く」の字状に外反し，端部を方形状におさめるもの。幅広の明瞭なタタキ目をとどめる。口縁部をタタキ出し，（３）は右上がり，（４）は水平，上位右下がりのタタキ，内面ヘラケズリ，口縁部にヨコハケをとどめる。



1.黒褐色2.5Y 3/2粘質土
2.灰オリーブ色7.5Y 4/2粘質土

fig. 39　溝１実測図

鉢形土器（５）は内彎気味に立ち上がる体部を有するもので，右上がり，左上がりのタ

タキ目が交叉する。体部底部境はユビオサエ，内面はナデで調整する。

高杯形土器（６）は脚部のみである。緩やかに外下方に拡がる脚部であり，外面は細かなヘラミガキ，内面はヘラケズリで調整する。脚部挿入付加法の痕跡を示し，外面から４孔を施す。

広口壺形土器（fig. 40－1）は体部中位に最大径をもつ大形の壺形土器である。外反気味の頸部と外反し，上下に拡張する口縁端部を有す。しっかりとした平底を形成し，体部外面右下がりのタタキののち，下半ヘラミガキ，上半タテハケを施す。頸部から肩部にかけ

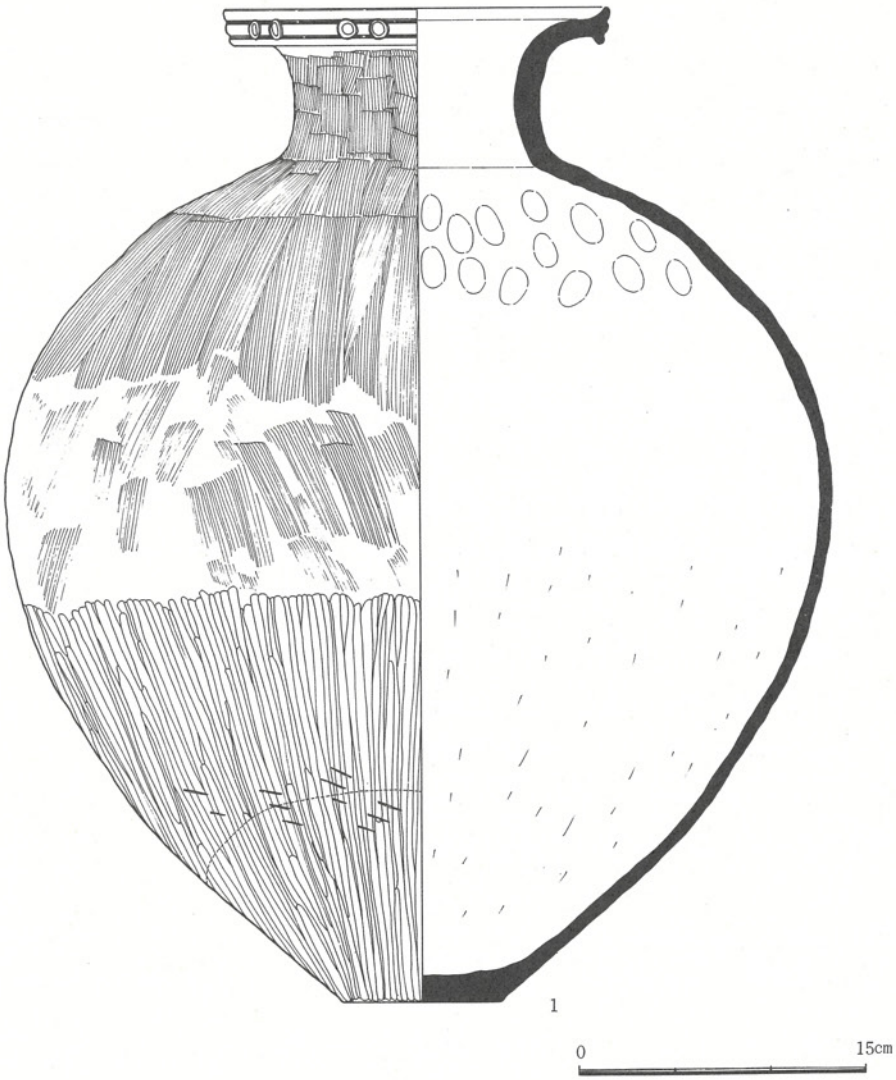


fig. 40　溝１出土土器実測図

ては断続したハケ調整を行う。内面は肩部ユビオサエ，中位下半丁寧なヘラケズリである。口縁部には２個一対の竹管文を10個所に配する。幅細の凹線を２条施している。

溝23（ＳＤ123）

溝１・19に切られた溝であるが，南西方向への拡がりは確認できない。幅40cm，深さ14cmを測り，梯形の断面を示す。黒褐色粘質土の堆積が認められる（fig. 41）。溝19に切られた部分で溝１の広口壺形土器の一部が散乱していた以外は，出土遺物は皆無である。北東から南西に走っているが，第Ｉ次調査個所ではこの方向に繋る溝は検出されてはいない。従って，第Ｉ次調査で検出されている溝の方向と対応させれば，溝２に繋るものと考えるのが自然である。

溝19（ＳＤ119）

４Ｋ13グリッドから４Ｈ15グリッドにかけて南東－北西に流れる溝である。溝上辺幅約1.3m，深さ70cmのＶ字形を示し，溝22と約３ｍの間隔をあけて並行して走る。溝内埋積土は部分的に異なるが，基本的には４層に分離され，１　黄褐色粘質土，２　暗灰黄色粘質土，３　黄灰色粘質土，４　灰オリーブ色砂質粘質土が認められ，中層に５　黄褐色シルトを挟む個所がある（fig. 42）。

出土遺物はいずれも破片であり，極めて少量であるが，溝底には細片となった土器片が地山に多数くい込んでおり，浚渫痕跡が指摘される。溝自体の機能については明らかにできないが，溝22と並行して流れており，溝１，15などの黒谷川Ｉ式の

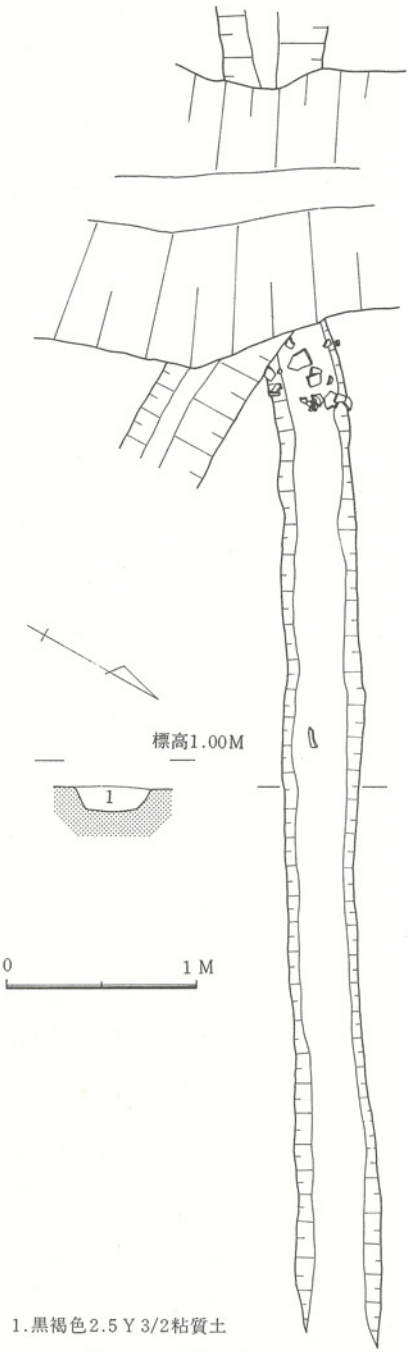


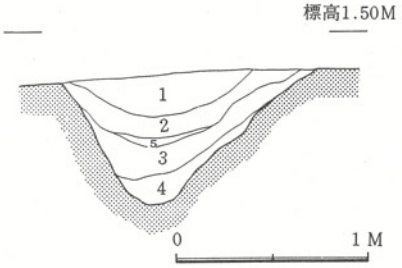
fig. 41　溝23 実 測 図

環溝状溝廃絶後の環濠的なものである可能性も残されている。次年度の調査にまちたい。出土遺物による限り，黒谷川Ⅱ式の年代が想定される。

溝19出土の土器（fig. 17・4～6）

図示したもの以外に10号住居址でみられた讃岐系の甕形土器片，広口壺形土器片，高杯形土器脚柱，鉢形土器片などが出土している。

甕形土器（4）は井戸1で出土している（19）に比べ，より体部が膨らみをもち，口縁部が上方に立ち上がる小形のものである。同一の胎土を有している。体部中位下半に最大径を示し，尖り気味の底部になるものかと思われる。体部外面は右下がりのタタキののち，粗いハケ，中位をナデてタタキ目を消す。内面も粗いハケであり，厚手の仕上がりである。



1.黄褐色2.5Y 5/3粘質土
2.暗灰黄色2.5Y 4/2粘質土
3.黄灰色2.5Y 4/1粘質土
4.灰オリーブ色5Y 4/2砂質粘質土
5.黄褐色2.5Y 5/3シルト

fig. 42　溝19土層堆積断面実測図

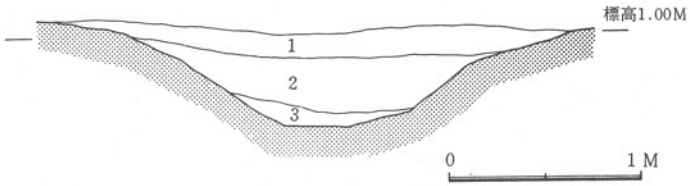
甕形土器（5）は中位が僅かに膨らむもので，口縁部は緩やかに外反する。体部外面ヘラミガキ，内面肩部ヨコ，上位下半タテヘラケズリを施している。

鉢形土器（6）　内彎気味に大きく立ち上がるもので，口縁端部を方形状におさめる。内外面ヘラケズリであるが，内面にはヘラ状圧痕をとどめる。

溝22（ＳＤ122）

調査区南西隅で一部検出された。前述のように溝19と並行して走る。溝上辺幅約2.6m，深さ50cmの浅い梯形断面を示す。

溝内埋積土は1　灰オリーブ色粘質土，2　オリーブ黒色粘質土，3　灰色粘質土の3層であり，1・2層に多量の土器片が混入している（fig. 43）。出土遺物は黒谷川Ⅱ式の新しい様相を示すものが大部分であるが，一部Ⅲ式のものを含んでいる。



1.灰オリーブ色7.5Y 4/2粘質土
2.オリーブ黒色7.5Y 3/2粘質土
3.灰色 7.5Y 4/1粘質土

fig. 43　溝22土層堆積断面実測図

層位的な年代差は指摘できない。

溝22出土の土器（fig. 44・45）

広口壺形土器（１）は頸部から口縁部にかけて大きく外反するもので，口縁端部を外下方に摘み出す小形のものである。２条の擬凹線をとどめ，外面ハケのちヘラミガキ，内面ハケで調整する。

（２）の広口壺形土器は内傾する頸部から大きく外反する口縁部をもつが，端部の摘み上げは認められない。僅かに上下に拡張し，１条の擬凹線をとどめる。内外面共ハケ調整であり，頸部体部外面境にヘラ状列点文を配する。体部外面はヘラミガキであり，内面にはユビオサエを施す。

壺形土器（３）は短く直立し，外反する口頸部とやや長胴の体部をもち，井戸１出土の壺Ｂ$_1$のタイプの系統に属すものであるが，体部中位に最大径を示し，倒卵形の器形である。やや丸みをおびた平底をもつ。体部外面は右下がりのタタキののち，細かいハケによって調整するが，肩部を境にハケ原体幅が異なる。内面は頸部直下までヘラケズリであり，口縁端部を僅かに摘み上げている。

長頸壺形土器（４）は扁平な算盤玉形の体部をもつもので，鳴門市萩原墳墓で出土している長頸壺形土器と同器形のものである。胎土中に金雲母,角閃石を含み暗茶褐色を呈する。讃岐系土器群のひとつと捉える。外面は細かなハケののち中位最大径部分ヨコヘラミガキ，上半及び下半はタテヘラミガキである。口縁部との境をナデて調整する。内面はユビオサエであり，中位下半にヨコヘラケズリを加える。本遺跡では比較的目につく器形である。

無頸壺形土器（５・６）は口縁端部を僅かにユビオサエによって摘み出すものである。外面はタタキのちヘラケズリ＋ハケで調整し，（６）は内面ヘラケズリを施す。（５）は歪んだドーナツ状の平底をとどめる。

（７・８）は讃岐系の甕形土器であるが，（７）は口縁部が強く外反し，端部内面に稜を形成する肩の張るものである。（８）はより古い形態を示し，体部は丸みをもち，中位が膨らむ。口縁端部は丸みをもち，やや肥厚する。外面上半ハケ，下半粗いヘラミガキであり，内面下半にヘラケズリを施す。

甕形土器（９）は体部中位が膨らむ倒卵形のもので，口縁部は外反し，方形状におさめる。端部を僅かに摘み上げる。井戸１出土の甕形土器Ａ$_1$よりも古い形態である。外面粗いタテハケ，内面下半ヘラケズリである。

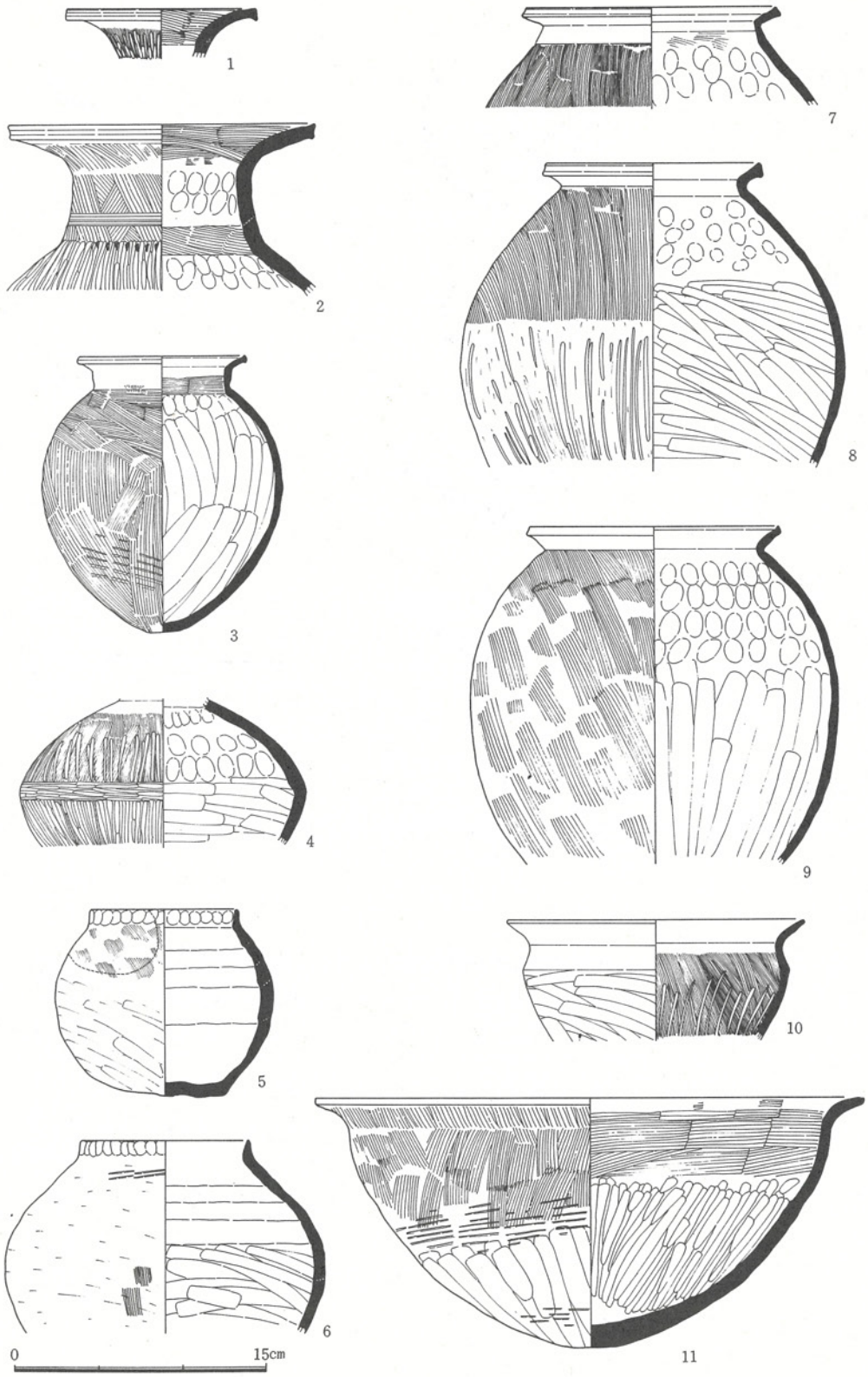


fig. 44　溝22出土土器実測図

口縁部が外反する鉢形土器は小形のもの(10)と大形のもの(11)が認められる。(10)は口縁部が強く外反し，体部上位に弱い稜を形成する。体部外面ヘラケズリ，内面幅細のケズリ状のハケを施したのち，条線状のヘラミガキを行う。(11)は緩やかに口縁部が外反し，僅かに平底をとどめる。外面は右上がりのタタキののち，下半ヘラケズリ，上半ハケ，内面下半ヘラミガキ，上位幅広のヨコハケで調整する。

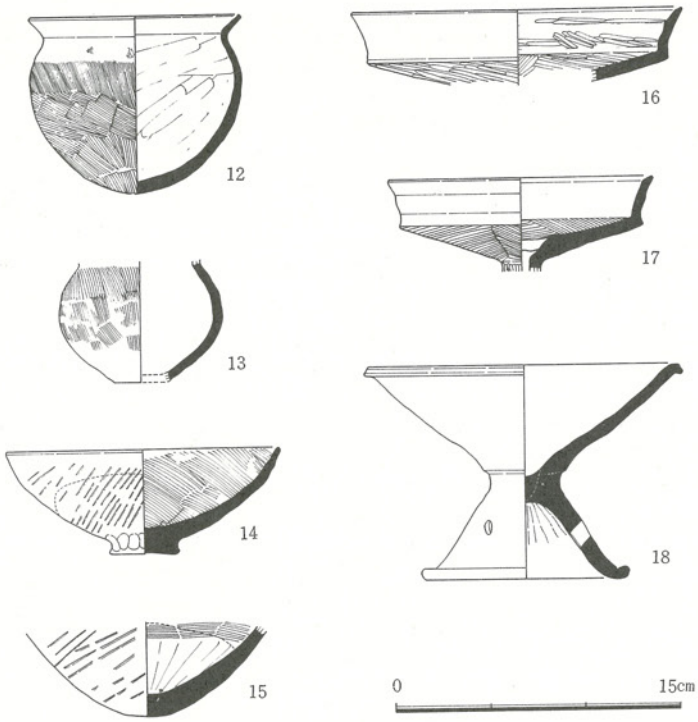


fig. 45　溝22出土土器実測図

鉢形土器（12・13）は体部球形で口縁部が外反する小形のもの。（12）は丸底，（13）は平底を有す。外面はいずれも細かなハケ，（12）は内面ヘラケズリを施し，口縁端部を摘み上げる。

（14）の鉢形土器は内彎気味の浅い皿状の体部を有し，やや突出する底部を示す。体部との境にはユビオサエを施す。外面右上がりのタタキ，内面はハケで調整する。

甕形土器底部（15）は外面右上がりの粗いタタキをナデで調整し，内面は幅細のヨコハケ＋ヘラケズリ，外面には煤の付着をとどめる。本資料は内面全体に朱の付着を認める。朱は器壁だけではなく，胎土中の砂粒剥離部分に深く浸透しており，底部では濃く，上部に向うに従って薄く付着しており，朱の沈殿と捉えうる状態を呈している。明らかに甕形土器の二次使用による朱の精製工程，例えば水簸等による沈殿を示す好例といえる。なお図示していないが，本溝からは他に浅い椀形状を呈する鉢形土器片にも朱の付着を認めるものが出土している。

高杯形土器（16・17）は杯部中位が鋭く屈曲し，口縁部が直立気味に外反する讃岐系のものである。杯部中位に明瞭な稜を形成する。内外面は細かな格子目状のヘラミガキを施しており，円板充塡法をとどめる。

（18）の高杯形土器は杯部，脚部が直線状に外上方，外下方に拡がる形態を示し，脚端部は丸みをおびてやや上方に摘み上げる。胎土中に多量の砂粒を含み，脚部には外方から３孔を施す。脚部挿入付加法をとる。

土坑27（ＳＫ127）

４Ｅ13グリッドで検出された不整円形の浅い落込みであり，北側は４号建物址柱穴に切られている（fig. 46）。長軸1.9m，短軸1.5m，深さ23cmを測り，暗灰黄色粘質土の堆積が認められる。鉢形土器１点が出土している。

土坑27出土の土器（fig. 49－４）

内彎気味に立ち上がる浅い椀形状の鉢形土器で，口縁端部を平坦におさめ１条の擬凹線をとどめる。尖り気味の丸底になるものと思われる。外面中位下半ヘラケズリ，内面ハケののち条線状のヘラミガキを施している。

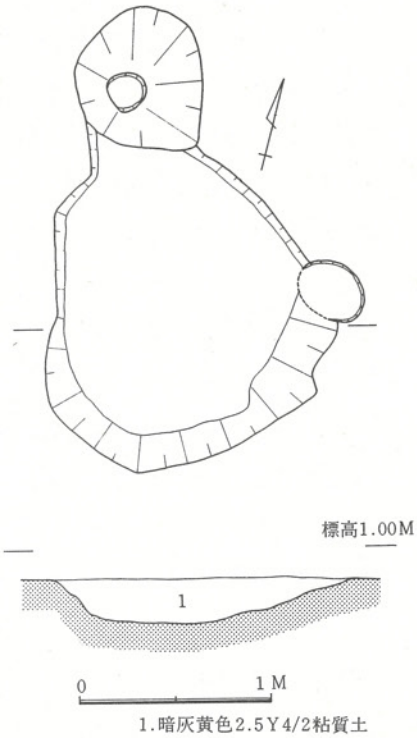


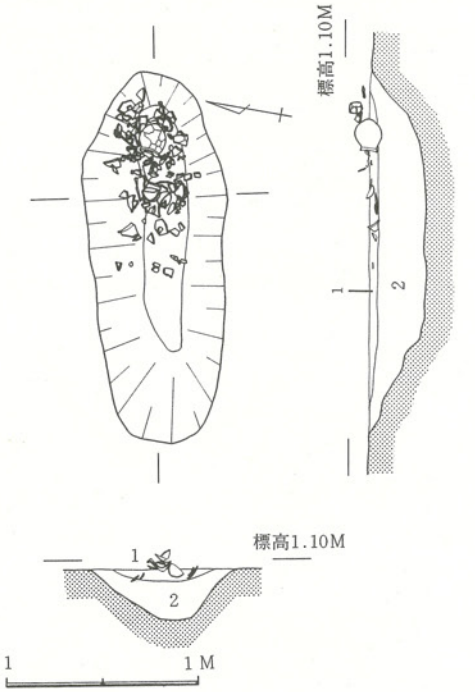
fig. 46　土坑27実測図

土坑29（ＳＫ129）

４Ｃ13グリッドで検出された長楕円形の平面プランを示す土坑である。掘り方上面の長軸1.95m，短軸75cmで東西方向の主軸をもち，深さ約30cmを測る。土坑内埋積土は１　暗オリーブ褐色粘質土，２　オリーブ褐色粘質土の２層に分離され，丸みをおびた梯形状の断面を呈すが，東西断面では西部分が僅かに段状の傾斜をもつ(fig. 47)。

土坑上面東側には第１層中に土器群の集中が認められた。このうち完形で検出された個体は甕形土器，鉢形土器であり，甕形土器は横倒しになっており，鉢形土器は小形のものが２個体併置され，正位を保っていた。明らかに意識的な安置の仕方をしており，断面形

状はややいびつであるが，土坑墓に供献された土器群と捉えることが可能である。黒谷川Ⅲ式の年代が想定される。



1.暗オリーブ褐色2.5Y 3/3粘質土
2.オリーブ褐色2.5Y4/3粘質土

fig. 47　土坑29実測図

土坑29（ＳＫ129）出土の土器

(fig. 49・5～8)

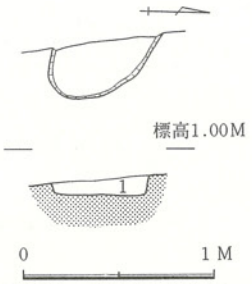
甕形土器Ａ1（５）は倒卵形の体部中位上半に最大径をもつ小形のもので，僅かに丸底化した平底をとどめる。口縁部は緩やかに外反し，端部を内側に摘み出す。外面はハケ，内面は入念な細かいヘラケズリである。

鉢形土器は小形の深い椀形状のもの（６・７）と浅い大形の椀形状のもの（８）がある。（６・７）はいずれも内彎気味に立ち上がる体部と小さな平底を有す。右上がりのタタキののちナデを施し，（７）には下半にヘラケズリをとどめる。内面は細かいヨコハケであり，（６）にはクモの巣状のハケを認める。

（８）は内彎気味に大きく立ち上がるもので，なだらかな丸底を示す。口縁端部は内側に摘み出されており，１条の擬凹線を配す。外面は口縁端部際までヘラケズリされている。

土坑33（ＳＫ133）

調査区北西隅４Ｃ14グリッドで検出された浅い土坑であるが，平面プランは不明である。深さ約10cmを測り，灰オリーブ色粘質土の堆積が認められる（fig. 48)。讃岐系の甕形土器が１個体出土している。



1.灰オリーブ色５Y4/2粘質土

fig. 48　土坑33実測図

土坑33出土の土器（fig. 49－９）

体部中位より上半に最大径をもつ肩の張った甕形土器である。しっかりとした平底を示し，体部外面上半ハケ，下半ヘラミガキ，内面下半にヘラケズリを施す。外底面は平行タタ

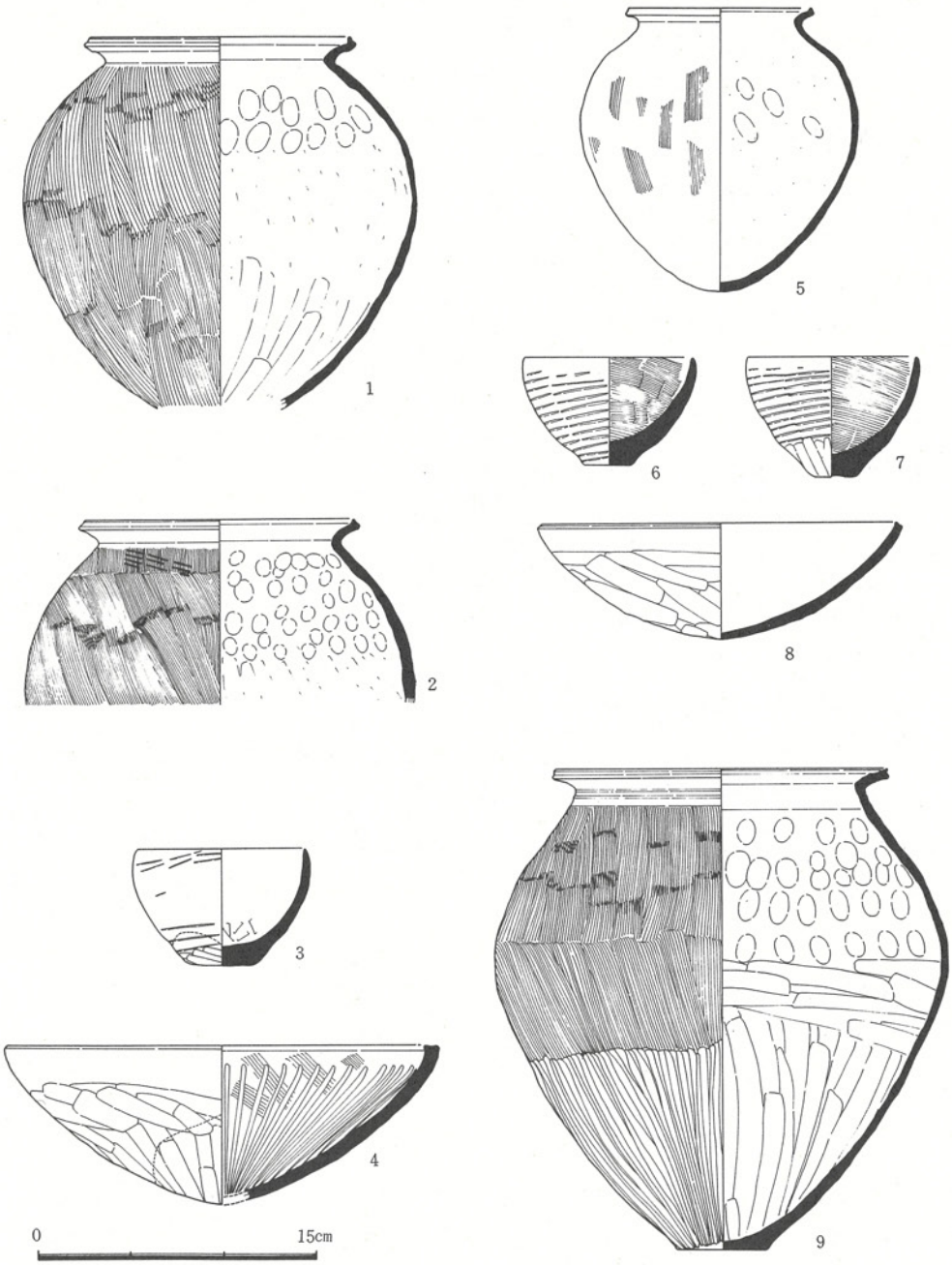


fig. 49　土坑26・27・29・33出土土器実測図

キに見誤まる条線状のミガキである。口縁部は強く外反し，内面にナデによる稜を形成する。やや体部の短い器形である。

3号建物址（ＳＡ103）

４Ｇ14・15・４Ｈ14グリッドで検出されたが，全体の規模については次年度の調査で明らかにしたい。本調査区で確認された規模はＰ１：Ｐ２：Ｐ３の柱心間距離1.5m，Ｐ３：Ｐ４間距離4.2mを測るが，Ｐ３：Ｐ４間に柱穴は検出されなかった(fig. 50)。柱穴深度はそれぞれ52cm，70cm，60cm，70cmであり，各柱穴径約20cm前後である。

出土遺物はすべて細片であるが，２条の擬凹線をもち，上下に拡張する広口壺形土器口縁部が出土している。明確な時期決定を行いうる資料に乏しいが，黒谷川Ⅱ式の年代を想定しておきたい。

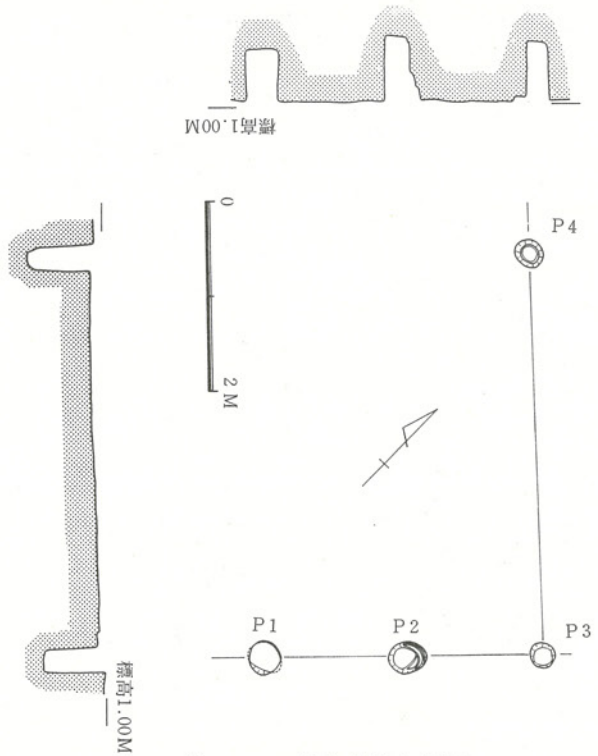


fig. 50　３号建物址実測図

4号建物址（ＳＡ104）

４Ｄ12・４Ｅ13グリッドにかけて検出された。柱穴が４箇所認められたのみで方向，規模については不明であるが，一定の間隔で形成されているため，建物址の痕跡と捉えられる（fig. 51）。検出された部分では３間を示す。各柱心間

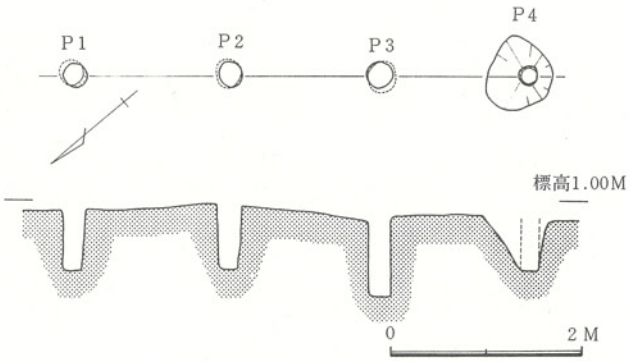


fig. 51　４号建物址実測図

の距離，Ｐ１：Ｐ２・Ｐ３：Ｐ４間 1.6ｍを測り，深度はそれぞれ60cm，65cm，80cm，50cmである。柱穴底の径約20cmを測り，３号建物址の一辺と一致する方向を有している。これも出土土器は細片であるが，讃岐系の甕形土器を含んでおり，黒谷川Ⅲ式の年代を想定しておきたい。

石製品（fig. 52・53）

今回の調査では朱精製用具と認定できる石臼，石杵が出土した。第Ⅰ次調査では確認していなかったが，朱貯蔵容器が共に出土していることから，第Ⅰ次調査出土資料も併せて再検討した結果，何点かの関連石製品を確認することができた。従ってここでは概要報告書Ⅰでは触れなかった資料についても説明しておきたい。

石臼（fig. 52－１）　長軸19.4cm，短軸14.2cm，厚さ 4.3cmの砂岩自然石を利用したものである。Ａ面には10×４cmの不整の長楕円形の範囲に敲打痕をとどめ，特に中央より右の部分には敲打の連続によって形成されたと思われる５×３cm，深さ６mmの楕円形の窪みが認められる。また，敲打痕をとどめない部分では石目が擦り潰れた痕跡をとどめている。Ｂ面中央部にも敲打痕をとどめ，僅かな窪みが形成されている。Ａ面左下半縁辺に擦痕をとどめる。９号住居址出土。

石杵（52－２）　長さ11.5cm，厚さ 7.4cmの楕円形の石杵である。入念に磨きあげて製品にしたもので両端に敲打痕をとどめるが，下端面は擦痕による径3.3×2.2cmの平坦面が形成されており，平坦面全体に朱の付着を認める。849gを量り，良質の砂岩を使用している。井戸１出土。

石杵（52－３）　楕円形の小形のものである。全体を極めて入念に磨き上げており，Ａ面の一部に僅かに敲打痕をとどめるが，使用された痕跡は殆ど指摘できない。長さ８cm，厚さ3.5cm，重量187gを量る。砂岩製。９号住居址出土。

石杵（52－４）　不整形の砂岩自然石を利用したもので，Ａ面下端には擦痕，中央に集中した敲打痕，及び上端の一部に敲打痕をとどめる。Ｂ面下端部には打撃の際に形成された大きな剥離面がある。長さ10.5cm，厚さ4.2cm，幅6.5cm，重量457.6gを量る。４Ｃ12グリッド出土。

石杵（52－５）　棒状乳状砂岩を利用した石杵である。Ａ面の下端を欠損する。下端部には平坦面が形成されており，平坦面中央に敲打痕をとどめる。長さ8.5cm，平坦面径4.1cmの小形のものであり，175gを量る。第Ⅰ次調査２号住居址出土。

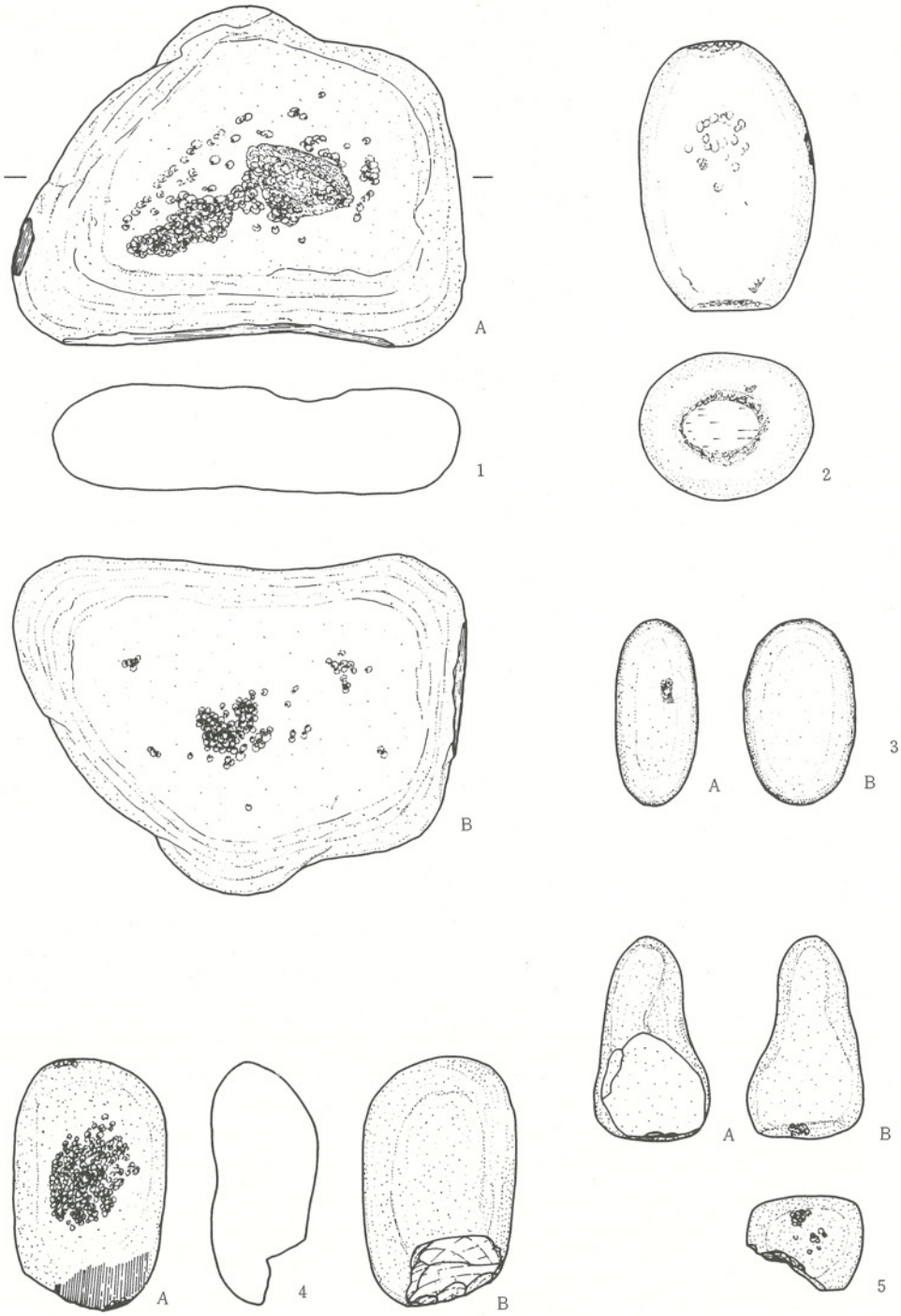
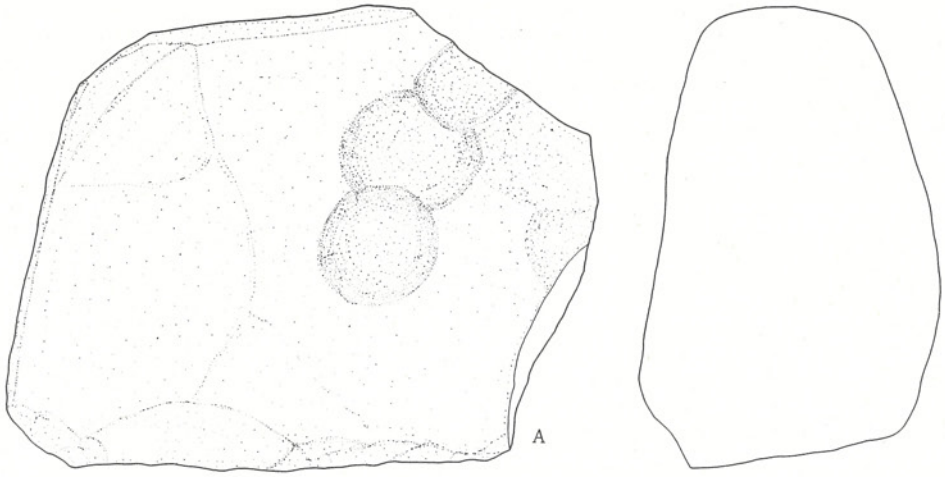
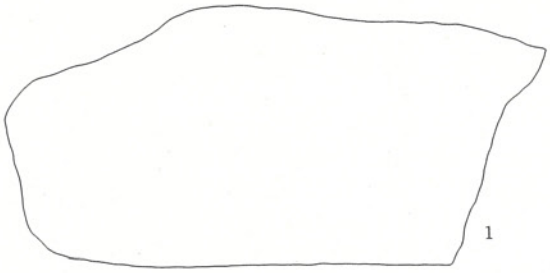
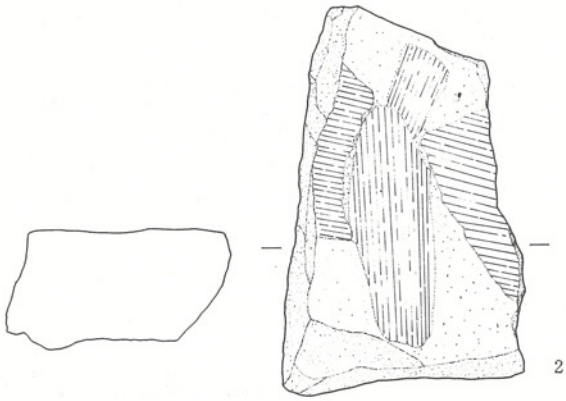


fig. 52　石臼・石杵実測図

0　15cm







0 15cm

fig. 53　石臼実測図

石臼（fig. 53－１）　砂岩製のもので，Ａ面の右上，右下を欠損するため，本来の大きさについては不明である。厚さ約14cmの自然石を使用している。Ａ面には２個所の正円形の擦痕をとどめ，僅かな窪みを形成している。擦痕はこの２個所の窪み周辺にも及んでおり，石目は完全に潰れている。裏面は自然面をとどめている。井戸１出土。

石臼（53－２）　破片のみであるが中央及び両側に擦痕をとどめる。中央の擦痕部分はＵ字状の浅い窪みを形成しており，全体に石目が潰れている。第Ⅰ次調査４号住居址出土。砂岩製である。他にも４号住居址からは多くの剝片になった砂岩が接合関係をもって出土している。石目が潰れたものも認められ，石臼であった可能性が高いものも散見するが，本来の形態は明らかにし難い。

以上の他にも円形状の砂岩礫あるいは破片などが出土しているが，これについては朱関連遺物としての確証を欠くため，本報告では示していない。以後の調査での類例の蓄積をまって検討したい。

鉄製品（fig. 54）

鉄鏃（１）　全長 4.7cm，茎長 1.1cm，幅 1.1cm，厚さ２mm，茎径４mmを測る方頭斧箭式鉄鏃である。４Ｆ４グリッド出土。

タガネ状鉄器（２）　全長5.3cm，幅５mm，厚さ３mmの断面方形状を呈し，上端を尖らせる。下端に小さな段をとどめる。12号住居址出土。

刀子（３）　刃幅 1.5cm，厚さ２mmの刃部のみ遺存するものである。４Ｇ４グリッド出土。

鉋（４）　全長 9.5cm，幅７mm，刃部厚２mmを測る。先端が僅かに反る。４Ｊ14グリッド出土。

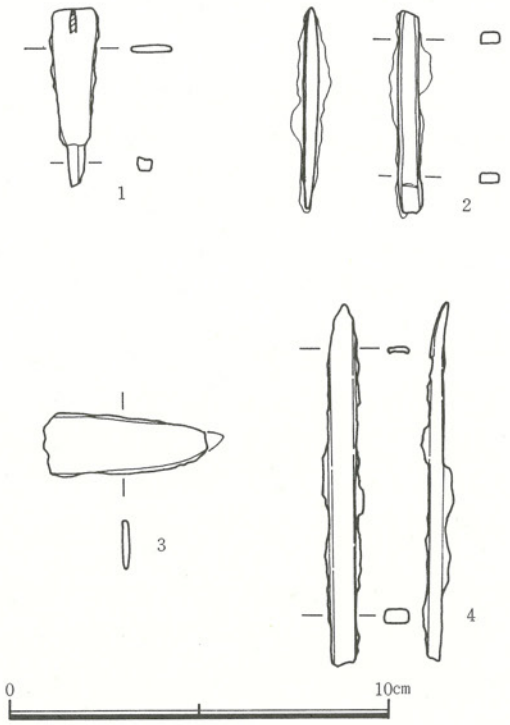


fig. 54　鉄製品実測図

Ⅲ　ま　と　め

黒谷川郡頭遺跡は今回が第Ⅱ次調査に当たる。第Ⅰ次調査でえられた資料を基に遺跡の低位立地とも相まって，今回は集落の性格・環溝状溝の形態の把握，住居址群の構成等に留意して調査を行った。確認された遺構は環溝状溝，竪穴式住居址，井戸，土坑，掘立柱建物址などであり，河川改修工事によって住居址が大きく損失したことが惜しまれるが，環溝状溝・井戸出土資料などを中心として良好な一括資料がえられた。

概要報告書Ⅰで胎土中に結晶片岩を含む土器群を基準として設定した黒谷川Ⅰ～Ⅲ式の土器形式は特にⅠ・Ⅱ式をうめうる資料,さらにⅢ式の細分の可能性を充分に残しているが，まだ結晶片岩を含有する本来の地域である鮎喰川流域の土器群の具体相が明示されていないため，より真の組成関係にまで立ち至ることは出来ない。本稿では細かな分類は先送りすることとし，当面前報告での分類を進めておきたい。

遺跡の変遷

今回検出された遺構の年代は以下のとおりである。

黒谷川Ⅰ式

第Ⅴ様式後半の時期であり，溝１・15・16・17が該当する。

黒谷川Ⅱ式

庄内式併行期前半に対応し，８号住居址・10号住居址・溝19・土坑33・３号建物址がこれに当たる。

黒谷川Ⅲ式

庄内式併行期後半の段階であり，９号住居址・12号住居址・土坑26・29・34・井戸１・４号建物址などがある。

黒谷川Ⅰ式段階での本遺跡を特徴付ける遺構の一つとしては溝１･15に認められる環溝状溝がある。第Ⅰ次調査で確認された溝１は調査区内の延長距離54ｍで南北に横断し，西方向にややいびつに隅円方形状に拡がる形態を呈し，溝内部に完形土器投入行為が指摘された。溝１からは弧帯文を描いた広口壺形土器が出土しており，今回の調査で溝１・17と把握した溝はこの延長部分であり，更に調査区外西南の方向に拡がっていくようである。

これに対し溝15は溝１の東に位置し，溝１と同様な平面形を有して東側に拡がるものと

思われる。前述のように，規模・時期等に一致し，内部に土器列を形成している。本溝からは広口長頸壺形土器に記号文を描くものが認められたが，環溝状溝出土資料の特筆すべきこととして広口壺形土器に限って弧帯文・記号文を施していることが指摘できる。

これらの環溝状溝は直線状に延びる溝16で互いに繋れていたようであり，両溝が有機的な関係を保っていたことが推定される。他方，溝内部の土器投入行為については溝１が溝底ちかくに整然と配置されていたのに対し，溝15では掘り方上面を確認できなかったこともあるものの，溝中位あるいは上面に散乱するという相違がある。土器の配置については前述のように器種のある程度の復元が可能であるが，溝全体の配置あるいは各土器群から予想されるブロック単位については明確にしえない。

Ⅰ式段階での集落形態は，その内部において推定隅円方形状の環溝による居住単位の区画が行われ，個々の環溝単位の複合によって構成されていたものと捉えることが出来る。各環溝によって形成された区画単位内での住居址群の単位は明らかにしえないが，円形住居を中心とする群が形成されていたことが理解できる。

Ⅱ式段階では環溝が消滅し，居住区画形態に変化が現れ，新たな集落内編成が進行したことを予想できるが,この段階での遺構の検出率は調査区内ではさほど良好ではない。概要報告書Ⅰで述べたようにⅡ式を設定した基準の一つに阿讃地域に特徴的な小形丸底鉢の出現が認められることを指摘したが，本器種を出土する住居址は多くが隅円方形住居址に変化している。円形住居址には出土土器からはⅠ～Ⅱ式への過渡期的様相を示すものも存在し，この時期にも多少は継続して構築されたと考えられるが，全体的には平面方形プランの住居形態が主流となってきている。これはかつて光勝院寺内遺跡で述べた，阿波における住居プランの変遷が後期段階まで円形住居の卓越，庄内式併行期段階での方形住居の出現[(1)]という予測とも矛盾するものではないことを示している。

溝19あるいはⅢ式の遺物を混じえている溝22はこの段階では開削されているものと考えるが，今回の調査区内では並列して南東から北西に延びており，Ⅰ式の環溝状溝消滅後に取って変わる区画機能を持つものである可能性も残されており，以後の調査での検討課題の一つである。

Ⅲ式段階は本遺跡が最も盛行する時期である。住居址は全て方形住居址に変化し，井戸・土坑・方形周溝墓等が形成され，遺構の検出密度が高い。この段階では後述するようにすでに東阿波型土器群が確立されており，独自の器形構成が認められる。

土器の組成と胎土

第Ⅰ次調査の結果，白亜系和泉層群地帯に位置する本遺跡で出土する土器のうち，胎土中に結晶片岩を含有する吉野川南岸鮎喰川流域のものが目立つことを指摘したが，今回の調査でも結晶片岩粗粒を含む土器が目立っており，むしろ鮎喰川流域の集落そのものの移動とも考えうる出方を示している。第Ⅰ・Ⅱ次調査で検出された主な遺構について全体の結晶片岩の含有率と器種構成比率，各器種毎の結晶片岩を含む比率を比較するとfig. 55・56のようになる。なお胎土中に金雲母・角閃石を含み暗茶褐色を呈す硬質の土器の一群は讃岐系の土器と考えたが，本遺跡では遺物包含層出土例を含め比較的多く認められるため，時期的な搬入の状況を併せて検討したい。

取り上げた遺構はⅠ式　溝1・溝15，Ⅱ式　1号住居址・2号住居址，Ⅲ式　4号住居址・9号住居址・土坑34，井戸1，方形周溝墓であり，溝22はⅢ式のものを混じえているがⅡ～Ⅲ式にかかる時期として理解しておきたい。なお各遺構からの出土土器は一応半分程度の器形が復元しうるものを抽出している。より厳密な検討には及ばないが，ある程度の傾向性の把握は可能であろう。挿図の円グラフの内，左列は器種構成，中列斜線部分は各器種構成内部の結晶片岩の含有率，右列斜線及び網目部分は全体の結晶片岩の含有率と讃岐系土器の出土率を示している。

器種構成

溝1では第Ⅰ・Ⅱ次調査出土数 184個体の内，壺形土器37個体（20.1%），甕形土器86個体（46.8%），鉢形土器36個体（19.6%），高杯形土器24個体（13.0%），器台形土器1個体(0.5%）を示している。溝15でも138個体の内，壺形土器52個体（37.7%），甕形土器59個体（42.8%），鉢形土器17個体（12.3%），高杯形土器10個体(7.2%）でⅠ式段階での甕形土器・壺形土器の占める割合が7・8割の高比率であることが確認される。

Ⅱ式段階では2号住居址（91個体）が壺形土器29個体（31.9%），甕形土器21個体(23.1%）と壺形土器が甕形土器を凌いでいるが，1号住居址・溝22ではいずれも甕形土器が，32.4%，52.4%と壺形土器を凌駕している。Ⅱ式段階での器種構成の変化は鉢形土器の出土比率に顕著であり，2号住居址37個体（40.6%），1号住居址12個体（35.3%）と増加している。壺形土器・甕形土器はなお全体の半数強を維持している。

Ⅲ式段階では全体に鉢形土器の激増と壺形土器・甕形土器の相対的減少が指摘される。4号住居址では29個体中，壺形土器5個体（17.3%），甕形土器8個体（27.6%），鉢形

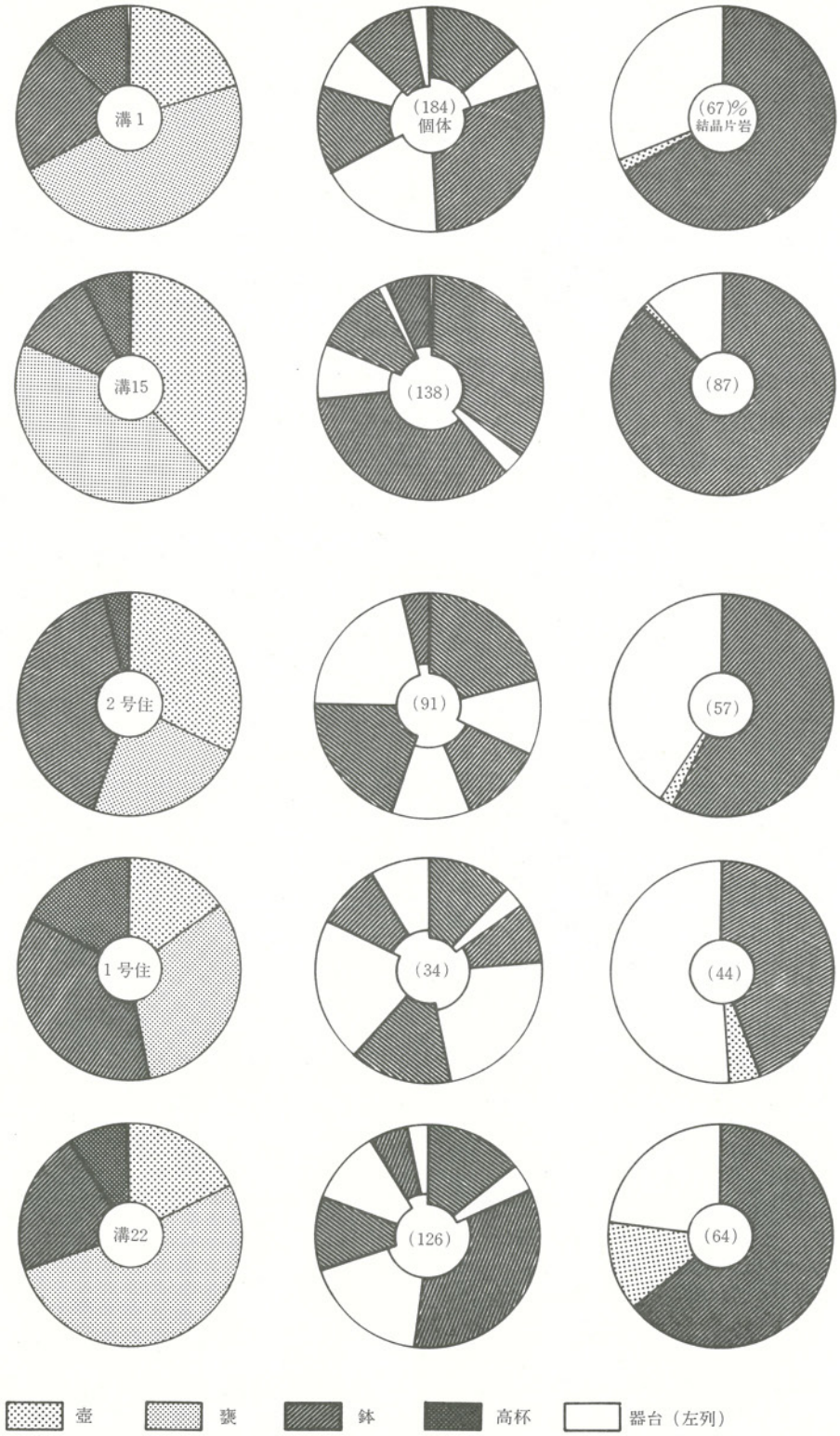


fig. 55　黒谷川郡頭遺跡出土土器における器種構成と結晶片岩含有率（Ⅰ・Ⅱ式）

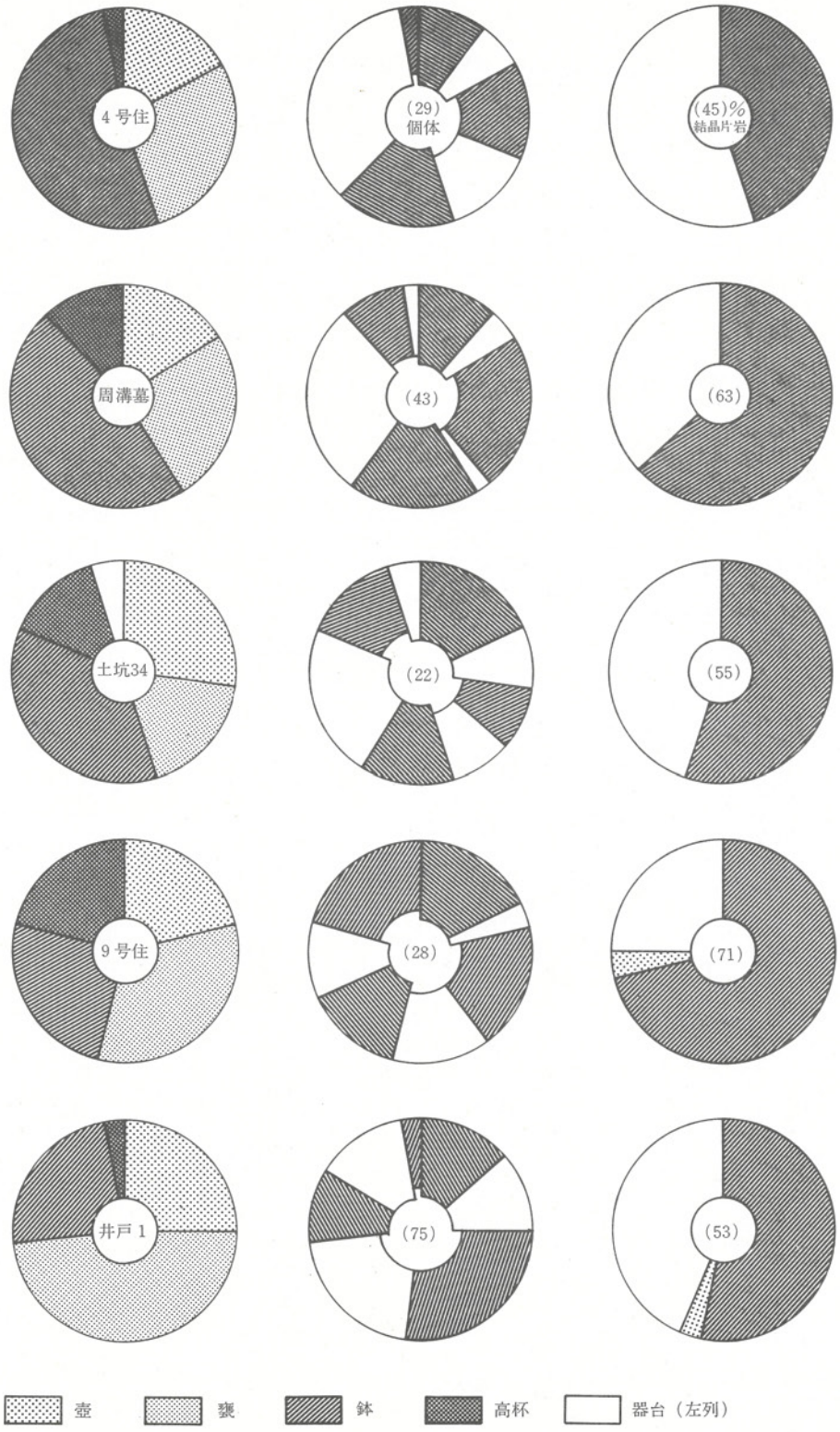


fig. 56　黒谷川郡頭遺跡出土土器における器種構成と結晶片岩含有率（Ⅲ式）

土器15個体（51.7%），高杯形土器１個体（3.4%）で半数が鉢形土器という出土の仕方であり，土坑34では22個体の内，壺形土器６個体（27.3%），甕形土器４個体（18.2%），鉢形土器８個体（36.4%），高杯形土器３個体（13.6%），器台形土器１個体(4.5%）と鉢形土器が最も多い出土である。９号住居址，井戸１では壺形土器，甕形土器が半数以上を占めてはいるが，９号住居址では甕形土器の32.2%についで25.0%，井戸１では甕形土器 48.0%，壺形土器 25.3%，鉢形土器 24.0%という，最も小量の出土でも２割は鉢形土器から構成されていることが指摘される。方形周溝墓は供献土器を中心とする点で他の遺構出土比率結果とは馴染まないが，鉢形土器20個体（46.5%），甕形土器11個体（25.6%），壺形土器（16.3%），高杯形土器５個体（11.6%）で，鉢形土器，高杯形土器の合計が約７割を占めると言う傾向が認められる。当然，遺構による性格の違い，廃絶パターンの相違が予想され，一律に論じることは慎重にすべきであり，鉢形土器の中には阿讃地域に特徴的な小型丸底鉢，中形の皿形状の鉢形土器を含んでいるため，より細かな器形分類による構成比率の検討が必要と思われるが，全体的な流れとしては小形の鉢形土器を中心とする器種構成の再編がII式以降進行していることを物語っているといえよう。

当該段階の器種構成の分析は丸山竜平氏の論考[(2)]以降，兵庫県会下山遺跡での中後期資料の検討[(2)]を始め，庄内式併行期以降の大和地域での精致な分析結果[(4)]，あるいは第Ｖ様式段階での生活様式の変貌を指摘する都出比呂志氏の見解[(5)]等にみられる。これらの分析であげられたデーターの一部を援用し，述べてきた本遺跡での結果をしめすとtab. 1 のようになる[(6)]。都出氏は第Ｖ様式の段階で鉢形土器，高杯形土器が20%の出土率を示し，小形丸底壺を第Ｖ様式の供膳形態の土器の機能を受け継ぐものと捉え，布留式期までに小形の個人別飲食器が定着することを指摘している。本遺跡ではII式以降特に鉢形土器の増加が著しい反面，器台形土器が極めて希少であることが判明する。さらに甕形土器の比率がＩ式以降常に壺形土器の比率を大きく越えていることが認められる。これは鮎喰川流域の遺跡群のうち庄内式から布留式段階の鮎喰遺跡溝ＳＤ105出土資料[(7)]によっても，図示された資料以外の器種構成についてはいまひとつ明らかではないが，壺形土器15.7%，甕形土器29.2%，鉢形土器31.5%，高杯形土器20.2%，器台形土器 3.4%という結果が得られ，同様に鉢形土器の多出現象が指摘できる。

胎土組成

結晶片岩の含有率（円グラフ右列斜線部分）は平均して60.6%であり高比率を示すが，

イセキメイ	ツボ゛	カメ	ハチ	タカツキ	キタ゛イ	
マキムクオオミソ゛シタ	32.3	29.0	19.4	18.3	1.0	
マキムクオオミソ゛チュウ	32.2	33.9	15.0	11.9	5.7	
マキムクオオミソ゛ウエ	28.8	31.8	18.2	10.6	9.1	
ヤ ヘ゛	24.2	23.5	21.3	23.1	5.8	
ロクシ゛ョウヤマNミソ゛	24.9	27.2	12.5	21.3	8.4	(-6.7)
カワシマミソ゛20	11.0	67.0	10.0	9.0		
ナカ゛コシオオミソ゛	24.4	27.3	27.1	13.4	6.6	(-1.2)
コ゛ケンヤシキST1	20.2	18.1	19.1	3.2	-	(-39.4)
コ゛ケンヤシキST2	8.4	28.2	28.2	5.6	-	(-29.6)
クロタ゛ニカ゛ワ ケイ	23.0	34.9	31.2	10.4	0.5	
クロタ゛ニミソ゛1	20.1	46.8	12.3	7.2	-	
クロタ゛ニミソ゛15	37.7	42.8	12.3	7.2	-	
クロタ゛ニ2シ゛ュウ	31.9	23.1	40.6	4.4	-	
クロタ゛ニ1シ゛ュウ	14.7	32.4	35.3	17.6	-	
クロタ゛ニミソ゛22	18.3	52.4	20.6	8.7	-	
クロタ゛ニ4シ゛ュウ	17.3	27.6	51.7	3.4	-	
クロタ゛ニシュウコウ	16.3	25.6	46.5	11.6	-	
クロタ゛ニト゛コウ34	27.3	18.2	36.4	13.6	4.5	
クロタ゛ニ9シ゛ュウ	21.4	32.2	25.0	21.4	-	
クロタ゛ニイト゛1	25.3	48.0	24.0	2.7	-	

tab. 1 器種構成一覧表

他方結晶片岩を識別できない個体も4割程度確認される。この中には当然産地を同定できないが,搬入土器を含んでいるものと考えられる。結晶片岩の含有率は全体的には古い段階ほど高く，溝15では87%，溝1では67%である。II式段階では40～60%台の出土の仕方で,住居址によってバラツキがある。III式では全体として減少しており，9号住居址で71%を示す以外は40～60%の間に収まる。今回は検討資料とはしていないが，遺物包含層出土資料には吉備系土器，庄内甕,山陰系土器などが若干量含まれており，抽出した遺構出土資料中には明らかに地場のものとは異なる胎土の組成を示すものが散見する。従って，相対的には他地域の土器が増加していることを予想できる。産地の同定については以後の検証課題とする。鮎喰川流域において結晶片岩を含む土器の絶対的な出土率が不明であるため,時期毎の含有率が結晶片岩産出地以外での現象を示すものであるか，あるいは鮎喰川流域遺跡群でも同様のデーターが得られるかは現状では明らかにしがたいが，マクロ的には本

遺跡が結晶片岩を含む土器を中心とする鮎喰川流域遺跡群と極めて緊密な関係にあることが指摘されるため，類似する傾向を示すことを予測しておきたい。

次に各器種毎の結晶片岩含有率をみてみると，円グラフ中列斜線部分及びtab. 2のようになる。Ⅰ～Ⅲ式全体での結晶片岩含有率は壺形土器71.8%，甕形土器59.3%，鉢形土器50.5%，高杯形土器85.9%であり，壺形土器，高杯形土器に結晶片岩粗粒を含む個体が卓

イコウメイ	ツボ゛	カメ	ハチ	タカツキ	キタ゛イ
ミソ゛1	67.6	65.1	63.9	75.0	100
ミソ゛15	92.3	81.3	88.2	90.0	0
ヘイキン	80.0	73.2	76.1	82.5	-
2シ゛ュウ	65.5	52.4	48.6	100	-
1シ゛ュウ	80.0	27.3	41.7	50.0	-
ミソ゛22	78.3	65.2	50.0	63.6	-
ヘイキン	74.6	48.3	46.8	71.2	-
4シ゛ュウ	60.0	50.0	33.3	100	-
シュウコウ	71.4	90.9	40.0	80.0	-
ト゛コウ34	66.7	50.0	37.5	100	-
9シ゛ュウ	83.3	55.6	57.1	100	-
イト゛1	52.6	55.6	44.1	100	-
ヘイキン	66.8	60.4	42.5	96.0	-

tab. 2　結晶片岩含有比率一覧表

越している。半面甕形土器では59.3%，鉢形土器では50.5%に結晶片岩が認められるに過ぎず，約半数は搬入品を含む個体であることを示している。各時期毎の平均含有率をみておくとⅠ式では壺形土器80.0%，甕形土器73.2%，鉢形土器76.1%，高杯形土器82.5%である。このうち溝15は各器種に結晶片岩を大量普遍的に含んでおり，Ⅰ式段階の本来の結晶片岩地域のあり方に近いものと捉えることが出来る。

Ⅱ式では1号住居址出土資料の甕形土器に27.3%と極端な低比率を示しているが，全体的には壺形土器では70～80%程度，甕形土器では50～60%台，鉢形土器40～50%，高杯形土器の平均比率71.2%となる。この段階ではすでに甕形土器，鉢形土器の結晶片岩含有率が絶対量はむしろ増加しているが全体の出土土器量からの比率という意味において低下しており，器種構成でも確認されたようにⅡ式段階では胎土組成においてもⅠ式，Ⅴ様式後半の様相とは大きく異なっていることが看取される。Ⅲ式でも遺構の性格差により多少の

バラツキがあるが，壺形土器の平均含有率66.8%，甕形土器では方形周溝墓の90.9%を除いてはいずれも50%台，鉢形土器では平均42.5%であり，高杯形土器96.0%の高い比率を示している。以上のことから壺形土器，高杯形土器では結晶片岩を含む個体が多く，甕形土器では50～60%程度，鉢形土器は30～50%の間，高杯形土器では結晶片岩を含有するものが卓越するという傾向が認められる。特にII式以降飛躍的に増加する鉢形土器に結晶片岩を含む個体が少ない現象については個人別飲食器であることをも考慮して検討を加える必要が残される。

讃岐系土器の動向

讃岐系土器の搬入の様相に触れておくと，本遺跡では特に甕形土器を中心として出土しており，他に二重口縁壺形土器・小形丸底鉢，長頸壺形土器に同一胎土を示すものがある。これらを讃岐系とみる見解と阿波への流入の様相については別に述べた。[14] その後，阿波への流入を確認しえた例では板野郡北原遺跡土坑3出土の甕形土器・高杯形土器[8]（中期末），三好郡大柿遺跡4号住居址出土の甕形土器（後期），三好郡稲持遺跡1号住居址出土の甕形土器[9]（後期末～庄内併行期），徳島市庄遺跡徳島大学構内地点溝出土の長頸壺形土器（庄内式併行期），同鮎喰遺跡1号住居址出土甕形土器[10]（庄内式新）などがあるが，本遺跡周辺と比較すると極めて微量である。讃岐地方において比較的良好な資料を出土している坂出市下川津遺跡例[11]では全体的に実見した限り胎土中に石英粒を多量に含んでおり，本遺跡周辺に散見する類例に比べて砂粒の多い軟質の仕上がりとなっている。色調も若干灰味を帯びた暗茶褐色を呈するという相違がある。一方，西讃地域で胎土中に金雲母を含む資料の類例は善通寺市彼ノ宗遺跡出土資料[12]に認められるが，金雲母の含有が著しく，阿波出土の類例とは全く異なっている。現状では阿波で出土する精製された土器群の真の帰属地を確定しえないが，甕形土器，高杯形土器などの器形・技法に下川津遺跡出土例に一致を認めることができる。従って東讃地域での土器の具体相は未だ明らかにはされていないが，この一群の土器の産地及び分布の中心を当該地域の一定地点と考えておきたい。

本遺跡では既にI式段階で溝1・15に出土が認められるが，全土器出土量の1.2%程度の出方に留まる（円グラフ右列網目部分）。II式段階では2号住居址2%，1号住居址5%，溝22に13%の出土を示している。溝22では破片を含めるとさらに増加が見込まれ，特に目につく出土状況である。III式段階の比較的まとまった土器を出土する遺構からの類例には恵まれていないが，例えば9号住居址では4%，井戸1では3%認められ，僅かで

はあるがII式を境にして増加していることが指摘できる。その他，遺構単独出土例を含めると統計的なデーターとはならないが，５号住居址，方形周溝墓，土坑３・９・13・29・30・32・33・35，４号建物址などに甕形土器を中心として類例が認められる。

東阿波型土器の成立

概要報告書Iで触れたように,いわゆる矢野式土器[13]は吉野川流域の当該時期の土器相を瞥見する時，他地域への搬出を比較的識別しうる阿波を代表する土器群であるが,上流地域の土器相とは大きく様相を異にしており，鮎喰川流域・気延山周辺に展開する遺跡群に限定される点で東阿波型土器と把握した[14]。溝１・15出土土器にみられるようにＩ式段階では全般的に各器種が畿内的様相を呈しているのに対し，II式段階ではＶ様式系の甕形土器を払拭し，独自の器形の発達が指摘できる。最も発達した器種構成はIII式の井戸１出土資料に顕著であり,広口壺形土器,甕形土器を中心として典型的に示されている。広口壺形土器(fig. 35－４～７)，甕形土器（fig. 36・37－9～18)はその好例であり，広口壺形土器(壺Ｂ)は倒卵形，もしくはやや偏平球形の体部をもち，口縁部が大きく拡がり端部を摘み出すものであり,擬凹線をとどめる。東阿波型土器のもう一つの器形を構成する二重口縁壺形土器[15](壺Ａ）はII式に盛行するものであり，この段階での広口壺形土器は本形態に比べ端部をなだらかに摘み上げ,擬凹線が明瞭なものになる形態変化がある。甕形土器(甕Ａ１)は倒卵形の体部をもち，口縁部を「く」の字形に外反させ，やはり端部を摘み上げる形態である。これも擬凹線をとどめるものが多い。細かいタタキ目をハケで消しており，Ｉ式でみられた甕の内面ヘラケズリは中位下半に変化している。極めて器壁の薄いものであり，鮎喰川流域遺跡群に通有な精製された器形である。この一群の土器には讃岐系土器群に共通する小形丸底鉢,長頸壺形土器を伴っており，さらにＩ式段階で甕形土器に讃岐系甕形土器と祖形を同じくするものの存在が指摘できることを述べたが，一定の類縁関係を保ちながら独自の器種構成が進行していることが伺える。阿波ではこの器種構成を示す遺跡は鮎喰川流域に集中しており，庄遺跡・鮎喰遺跡・南庄遺跡・名東遺跡・清成遺跡・矢野遺跡，さらに周辺の園瀬川流域に位置する樋口遺跡に及んでいる。これらはすべて三波川帯に属する結晶片岩産出地に形成された遺跡であり，この地域の土器が吉野川を越えて本遺跡に認められる背後には朱の生産が深く関わるように思われる。

朱の精製

今回の調査では９号住居址，井戸１を中心に朱精製関連用具である石杵・石臼が出土している。前述したように朱に関する精製用具の出土は今回の調査で確認しえたものであるが，第Ⅰ次調査出土資料の再検討の結果，遺構からの出土例として４号住居址に石臼，２号住居址覆土中に石杵の類例が確認された。また，４号住居址からは本来の形態は確認できないものの，表面が擦痕により磨滅した砂岩礫が火を受けたことにより破砕しているが，接合関係をもち，石臼になる可能性の高い個体が出土している。第Ⅱ次調査までで確認された石杵は遺物包含層資料を含め４個体，石臼３個体＋α を数える。更に溝22からは二次使用として用いられたと推定される朱貯蔵容器の出土，あるいは第Ⅰ次調査での方形周溝墓周溝内から出土した朱の付着する土器片は20点程度を数え，加えて朱の原石である辰砂細片が出土しているため，ある程度の朱の精製を行っていたことが考えられる。本遺跡ではⅡ式の段階で既に精製が行われており，Ⅲ式段階では更にその痕跡が明瞭となっている。

阿波における庄内式併行期の朱関連遺跡としては，阿南市若杉山遺跡が挙げられる。本遺跡は明治時代には水銀の生産量が全国シェアーの６割を占めた阿波水銀鉱床群水井水銀鉱地点に位置し，地質的には石灰岩を産出する続秩父帯に属する。急峻な斜面に位置する土器の散布地でのこれまでの３回の調査によっても，明確な工房等の遺構には恵まれていないが，石臼37点，石杵149点の他，細片となった庄内式併行期の土器を出土している。[16] 若杉山遺跡出土の石杵は大形の物から小形の物までバリエーションがあり，その多くは敲打痕と磨滅痕，更には剝離面をとどめるものが比較的多く認められ，機能的には石灰岩・チャート層中の亀裂に包含される辰砂（硫化水銀・Hg_2S）を叩き割り，粉砕し，一定程度擦り潰す，主に朱の原材料である辰砂を採掘・砕石した遺跡と認定されている。

朱の基本的生産工程が原石である辰砂を小片に砕き，石杵・石臼で擦り潰し，微粉化されたのち，比重選鉱により容器等に入れ水で攪拌したのち沈殿したものを取り出すのであれば，[17] 石臼に対する各種石杵の出土比率の高さとも相まって，若杉山遺跡での工程の多くは辰砂の荒粉砕作業に主体をおいているものと捉えることが出来る一方，本遺跡例では辰砂を微粉化し，朱を取り出す最終の精製工程に主体がおかれていることが推察される。[18] 両遺跡出土例とも砂岩を素材とする点で共通性を見いだすことが出来るが，具体的な使用法については若杉山遺跡では石臼が円形の深い窪みをとどめるのに対して，本遺跡例では僅かな円形状の窪みもしくは擦面のみの遺存，石杵では本遺跡例には打撃による剝離面をとどめるものが極めて少なく，大半は擦り潰しによる杵先端の平坦面の形成及び石目の潰れた部分

への朱の付着が認められるという相違が指摘できる。特に本遺跡の石杵には後時代における大阪府野中古墳[19]，兵庫県森尾古墳[20]，会津大塚山古墳出土例[21]などの葬送儀礼過程における朱の微粒子化工程に用された石杵と形態的近似性を示しており，集落内部での朱の生産工程の実態を示唆するものと考えられる。さらに直接的な証左とはなりえないが，第Ⅰ次調査で検出された溝3とそれに付設する落込みは概要報告書Ⅰで述べたように溝2と20cmの落差をもち，何らかのものを水簸する機能を想定したが，一連の関連遺物から集落の性格を更に立ち入って検討する場合，十分に朱関連遺構，いわゆる「辰砂流し遺構」と理解することも不可能ではない。より具体的な把握は次年度の調査に委ねるが，遺物の散布から推定される集落の規模に対する調査面積の割合からは朱関連遺物の出土は決して少ないとはいえず，かなりの規模で朱の精製を行っていたものと理解しておきたい。

fig. 57　東阿波型土器分布圏と朱関連遺跡位置図

本遺跡で使用された朱の原石である辰砂は直線距離にして約30キロ南に位置する若杉山遺跡から搬入されたものと推定するが，続秩父帯に位置する若杉山遺跡においても結晶片岩を含む東阿波型土器が認められる[22]（fig. 57）。若杉山遺跡の厳密な年代は示されていないが庄内式併行期と理解されている。一部に布留式期の遺物を含んでいるようであるが，黒谷川Ⅱ・Ⅲ式に対応する資料中には壺形土器等に結晶片岩が認められ，東阿波型土器群の属性のひとつである小形丸底鉢の存在が指摘できる。結晶片岩を含有する土器の出土比率の絶対量は本遺跡には及ぶべくもないが，当該時期の鮎喰川流域遺跡群の南北に形成された共に朱に関わる遺跡に東阿波型土器が及んでいる事実は，点的な掌握であると仮定しても東阿波型土器分布圏の拡大とその背後にある集団の吉野川流域での卓越性を物語るもの

であり，同時に第Ⅰ次調査での二・三線帯入り組み文による弧帯文土器の出土は旧吉野川に面した極度の低湿性，集落営為の時間的限定性とも相まって，背後に多分に朱の精製・搬出を意図した，畿内及びその周辺に向けての鮎喰川流域遺跡群による機能集落の進出という状況が指摘されよう。当該時代大和水銀鉱床群地帯内での戸石・辰巳前遺跡[23]，矢部遺跡[24]などの朱関連遺跡の動きとは別に，阿波においても相前後する時代に類似した状況が展開していたことを指摘しておきたい。

（註）

(1) 菅原康夫・高橋正則『光勝院寺内遺跡』徳島県教育委員会　1984。

(2) 丸山竜平「弥生式土器の終焉」『古代研究』10　1976。

(3) 森岡秀人「会下山遺跡出土土器特論」『新修芦屋市史』1976。

(4) 寺沢　薫編『矢部遺跡』　奈良県立橿原考古学研究所　1986。

(5) 都出比呂志「畿内第五様式における土器の変革」『考古学論考』1982。

(6) その他引用した文献は寺沢　薫『六条山遺跡』奈良県立橿原考古学研究所 1981，松下　勝編『播磨・長越遺跡』兵庫県教育委員会　1978，角谷和夫『五軒屋敷遺跡調査報告書』高知県教育委員会　1984。

(7) 松永住美・河野雄次・吉成克則『庄・鮎喰遺跡』徳島県教育委員会　1985。

(8) 林　慎二「北原遺跡現地説明会資料」1986，徳島県教育委員会『第１回理蔵文化財資料展掘ったでよ阿波』1987　掲載資料。

(9) 林　慎二「稲持遺跡現地説明会資料」1987　実見。

(10) 滝山雄一氏のご教示。

(11) 藤好史郎・松野一博編『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報（Ⅶ）』香川県文化財保護協会　1986。資料の実見に際しては，大山真充・藤好史郎氏にご配慮頂いた。

(12) 笹川龍一『彼ノ宗遺跡』善通寺市教育委員会　1985。資料の実見に際しては，笹川龍一氏にご配慮頂いた。

(13) 岩崎直也「四国系土器群の搬出」『大阪文化誌』17　1984。

(14) 菅原康夫「吉野川流域における弥生時代終末期の文化相」『考古学と地域文化』同志社大学考古学シリーズⅢ　1987。

(15) 註13文献による壺Ｂ・Ｃなどであるが，これもバリエーションがあり擬凹線の発達したもの，擬凹線を伴わないものが散見する。但し広口壺形土器，本報告でいう壺Ｂに比べると出土の絶対量は少ない。

(16) 岡山真知子「若杉山遺跡の発掘調査」『徳島県博物館報』49　1984，徳島県博物館「若杉山遺跡第３次調査現地説明会資料」1986。

(17) 市毛　勲『朱の考古学』1974。

(18) 本遺跡の朱の分析に当たっては奈良国立文化財研究所にご配慮を頂いた。

(19) 北野耕平『河内野中古墳の研究』大阪大学文学部　1976。

(20) 瀬戸谷　皓「豊岡市森尾古墳出土の石杵」『兵庫考古』4　1976。

(21) 伊東信雄ほか『会津大塚山古墳』会津若松史出版委員会　1964。

(22) 註16　1986資料　筆者実見。

(23) 井上義光「戸石・辰巳前」『大和を掘る　1985年度発掘調査速報展Ⅵ』奈良県立橿原考古学研究所付属博物館　1986。

(24) 註4文献。

出　土　土　器　観　察　表

tab. 3　出土土器観察表

器　種	番号/挿図	法　量（cm）	口　頸　部	体　底　部	色　調	胎　土	出土遺構	備　考
広口壺	1／10	口　径　20.0	・頸部内傾気味に立ち上がり，口縁部大きく外反。 ・口縁下端部に断面三角形の粘土紐を巻きつける。 ・２条の弱い擬凹線を施したのち直径1.4cmのスタンプによる4重の孤を施す。		淡赤褐色	石英 クサリ礫	溝15 ４Ｇ４グリッド	
広口長頸壺	2／10	口　径　14.6	・頸部は内上方に立ち上がる。 ・口縁部緩やかに外反。 ・端部は僅かに上下に拡張しナデ。 ・頸部外面６条／cmのタテハケを施す。 ・内面８条／cmのヨコハケ。 ・口縁部内外面ナデ。 ・粘土紐痕。		明褐色	結晶片岩 石英 長石	溝15 ４Ｄ４グリッド	
広口長頸壺	3／10	口　径　12.8	・頸部直立。 ・口縁部緩やかに外反。 ・端部は僅かに上下に拡張しナデ。 ・口縁部内外面ナデ。 ・頸部外面10条／cmのタテハケ。 ・頸部体部境に１条のヘラ描沈線。 ・粘土紐痕。	・球形に近い体部か？（倒卵形）。 ・外面10条／cmのタテハケ。	明褐色	結晶片岩 石英 長石	溝15 ４Ｅ４グリッド	
広口長頸壺	4／10	口　径　16.2	・頸部僅かに外方に立ち上がる。 ・口縁部大きく外反。 ・頸部外面から口縁部にかけて，10条／cmの右下がりのハケ。 ・口縁部内面，口縁部下端から外面ハケのちナデ。 ・頸部体部の境にヘラ状工具によ		淡褐色	結晶片岩 大粒	溝15 ４Ｆ４グリッド	

			る刺突を巡らす。 ・粘土紐痕。					
広口壺	5／10	口　径　14.5	・緩やかに外反。 ・端部はやや角ばっておさめ，1条の弱い擬凹線を施す。 ・口縁部外面2㎜幅単位のタテヘラミガキ。 ・粘土紐痕。		淡褐灰色	結晶片岩 石英 長石	溝15 4H4グリッド	
広口長頸壺	6／10	口　径　18.9	・頸部直立。 ・口縁部大きく外反。 ・端部は僅かに上下に拡張しナデ。 ・頸部から口縁端部下端にかけてハケのち3㎜幅単位のタテヘラミガキ。 ・頸部内面から，口縁端部内面にかけて3㎜幅単位のタテヘラミガキ。 ・頸部内面にユビオサエをとどめる。 ・粘土紐痕。		淡赤褐色	結晶片岩 石英 長石	溝15 4H4グリッド	頸部下端に切断したような平坦面
広口長頸壺	7／10	口　径　15.4 体部最大径21.7	・頸部僅かに外方に立ち上がる。 ・口縁部緩やかに外反。 ・端部は僅かに下方につまみだし方形状断面を呈す。 ・竹管文を巡らす。 ・頸部から口縁端部内外面にかけて3㎜幅単位のタテヘラミガキ。 ・粘土紐痕。	・扁平な球形体部か？。 ・体部外面3㎜幅単位のタテヘラミガキ。 ・頸部との境ナデ。 ・体部内面,頸部との境に絞り目。 ・体部上半中位にエビオサエをとどめる。 ・体部内面上半中位から下半にかけてヨコヘラケズリ。	明赤褐色	結晶片岩	溝15 4D4グリッド	

器　種	番号/挿図	法　量（cm）	口　頸　部	体　底　部	色　調	胎　土	出土遺構	備　考
広口壺	8／10	口　径　13.9 体部最大径21.6	・頸部から口縁部にかけて緩やかに外反。 ・口縁端部僅かに上下に拡張しナデ。 ・口縁外面水平タタキののちナデ。 ・頸部外面10条／cmのタテハケ。 ・口頸部内面ナデ。	・扁平な球形の体部。 ・体部中位よりやや上部に最大径。 ・体部外面上半タテハケ。 ・体部外面中位３条／cmの水平タタキのち，４mm幅単位のタテヘラミガキ。 ・体部外面下半下位ハケのち４mm幅単位のタテヘラミガキ。 ・体部内面上位ユビオサエ。 ・体部内面上半下位８条／cmのヨコハケ。 ・体部内面下半８条／cmのタテハケ。	明褐色	微量の結晶片岩（精選されている）	溝15 ４Ｈ４グリリッド	
広口長頸壺	9／10	器　高　29.2 口　径　15.7 体部最大径20.0 底　径　5.6	・頸部から口縁部にかけて緩やかに外反。 ・口縁端部僅かにつまみ上げ気味におさめる。 ・口縁部右上がりのタタキ。 ・頸部外面８条／cmのタテハケのち３mm幅単位のタテヘラミガキ。 ・口縁部内面３mm幅単位のヨコヘラミガキ。 ・頸部内面８条／cmのナナメハケのち３mm幅単位の粗いタテヘラミガキ。	・球形に近い体部。 ・体部中位に最大径。 ・突出しない平底 ・体部外面上半３条／cm水平タタキのちタテハケ。 ・タテハケののち中位に向かって上下からのタテヘラミガキ。 ・体部外面下半８条／cmのヨコハケのちタテヘラミガキ。 ・体部内面上半７条／cmのヨコハケ。 ・体部内面下半８条／cmのタテハケ。 ・粘土紐痕。 ・外底面ナデ。	明褐色	結晶片岩	溝15 ４Ｄ４グリッド	体部上半に記号文 体部外面下半黒斑

長頸壺	10／11		・頸部直立。 ・頸部外面タタキのち3㎜幅単位のタテヘラミガキ。 ・頸部内面ユビオサエ。 ・粘土紐痕。	・体部外面上半上位3㎜幅単位のタテヘラミガキ。 ・体部外面上半中位3条／cmの水平タタキののち，5㎜幅単位の幅広のタテヘラミガキ。 ・体部内面ユビオサエ。 ・粘土紐痕。	外面 淡褐灰色 内面 黒灰色	結晶片岩	溝15 4F4グリッド	
広口長頸壺	11／11	器高 26.7 口径 12.5 体部最大径17.1 底径 4.9	・頸部僅かに内傾して立ち上がる。 ・口縁部緩やかに外反。 ・口縁端部僅かに上方につまみ上げる。 ・頸部外面7条／cmのタテハケ。 ・口縁部外面，タテハケのちヨコハケ。 ・口縁端面ヨコナデ。 ・頸部内面，ユビオサエのちナデ消し。 ・口縁部内面ヨコナデ。 ・頸部体部境にヘラ状工具による3条の沈線を巡す。	・球形に近い体部。 ・体部中位に最大径。 ・体部内面，頸部との境ユビオサエ。 ・粘土紐痕。 ・突出しない平底。 ・体部外面上半上位タテハケのち3㎜幅単位のタテヘラミガキ。 ・体部外面上半下位ナナメハケのち5㎜幅単位のタテヘラミガキ。 ・体部外面下半タテハケ。 ・体部内面上半ヨコハケのちナナメヘラケズリ。 ・体部内面下半タテヘラケズリ。 ・外底面ナデ。	明褐色	結晶片岩	溝15 4E4グリッド	体部外面中位まで煤の付着 内面に焦げ付き痕
広口長頸壺	12／11	器高 23.3 口径 12.0 体部最大径17.2 底径 5.7	・頸部直立。 ・口縁部緩やかに短かく外反。 ・口縁端部尖り気味におさめる。 ・頸部外面4～5条／cmの粗いタテハケ。 ・口縁部外面ヨコナデ。 ・口縁部内面部分的にナナメヨコハケ。 ・粘土紐痕。	・体部中位よりやや上部に最大径。 ・体部外面上半4～5条／cmの粗いタテハケ。 ・体部外面下半幅広の右上がりのタタキのち4～5条／cmの粗いタテハケ。 ・体部内面上半上位ユビオサエ。 ・体部上半下位から下半にかけて1cm幅原単位のタテヘラケズリ。 ・僅かに突出した上げ底。 ・粘土紐痕。	淡褐色	結晶片岩	溝15 4H4グリッド	

器　種	番号/挿図	法　　量（cm）	口　　頸　　部	体　　底　　部	色　調	胎　　土	出土遺構	備　　考
壺	13／11	体部最大径26.7 底　径　　4.9	・頸部僅かに内傾して短かく立ち上がる。 ・口縁部大きく外反か？。 ・頸部右下がりのナナメハケのち3㎜幅単位のタテヘラミガキ。 ・口縁部3㎜幅単位のタテヘラミガキをとどめる。 ・頸部内面3㎜幅単位の入念なヨコヘラミガキ。 ・頸部内面3㎜幅単位の入念なタテヘラミガキ。 ・頸部体部の境にヘラ状工具による沈線を巡らす。	・球形に近い体部。 ・体部中位に最大径。 ・体部全面にわたり，下方から上方への3段の3㎜幅単位の入念なタテヘラミガキ。 ・体部内面上位ユビオサエのちナデ。 ・体部内面中位1㎝幅単位の左方向へのヘラケズリのち，5～6条／㎝の右下がりのヨコハケ。 ・外底面ナデ。 ・突出しない平底。	淡茶褐色	結晶片岩	溝15 4G4グリッド	
広口壺	14／11	器　高　　37.3 口　径　　16.1 体部最大径31.1 底　径　　4.0	・頸部僅かに外反しながら立ち上がる。 ・口縁部緩やかに外反。 ・口縁端部下方に拡張して角ばっておさめる。 ・1条の弱い擬凹線を施す。 ・頸部外面3㎜幅単位の入念なタテヘラミガキ。 ・口縁部外面ヨコハケ。 ・頸部内面8条／㎝のナナメハケ。 ・粘土紐痕。	・球形に近い体部。 ・体部中位に最大径。 ・体部外面上位3㎜幅単位の右下がりのヘラミガキ。 ・体部外面中位3㎜幅単位の右下がりのヘラミガキ。 ・体部外面下半8条／㎝のタテハケののち3㎜幅のタテヘラミガキ。 ・体部内面上位右方向のヘラケズリ。 ・体部内面中位6条／㎝のヨコハケ。 ・体部内面下位6条／㎝の右下がりのヨコハケ。 ・外底面ナデ。 ・粘土紐痕。	明褐色	結晶片岩 石英	溝15 4D4グリッド	

広口壺	15／12	口　径　13.2	・頸部僅かに内傾して立ち上がる。 ・口縁部緩やかに外反。 ・口縁端部丸くおさめる。 ・頸部外面粗ガキ状のナデか？。 ・頸部内面ナデ。	・体部上半３条／cm幅の右下がりのタタキのちタテ方向の粗ガキ。 ・体部内面上半ナナメヘラケズリ。 ・粘土紐痕。	外面 淡灰褐色 内面 黒灰色	結晶片岩 石英	溝15 ４Ｄ４グリッド	体部外面上半黒斑
広口壺	16／12	口　径　14.2	・頸部短かく直立し立ち上がる。 ・口縁部緩やかに外反。 ・口縁端部僅かに下方に拡張。 ・端部に１条の擬凹線。 ・頸部外面６条／cmのタテハケ。 ・頸部内面ナデ。	・体部上位６条／cmのタテハケ。 ・体部内面上位ヨコヘラケズリ。 ・粘土紐痕。	淡灰褐色	結晶片岩 石英	溝15 ４Ｈ４グリッド	
広口壺	17／12	口　径　15.2	・頸部短かく僅かに内傾して立ち上がる。 ・口縁部緩やかに外反。 ・口縁端部方形状におさめる。 ・頸部外面5条／8mmのタテハケ。 ・頸部内面５条／cmのヨコハケののちナデ。	・体部外面上位６条／cmの右下がりのハケ。 ・体部外面上半４条／cmの水平タタキ。 ・体部内面上半ヨコヘラケズリ。 ・粘土紐痕。	淡赤褐色	結晶片岩	溝15 ４Ｆ４グリッド	
壺	18／12	体部最大径20.5 底　径　4.3		・体部外面上半右上がりの上下へのヘラミガキ。 ・体部外面下半ケズリ状のタテヘラミガキ。 ・体部内面12条／1.3cmのヨコハケ。 ・外底面ナデ。 ・突出しない平底。	淡赤褐色	結晶片岩	溝15 ４Ｇ４グリッド	体部外面下半黒斑 体部内面下半黒斑
壺	19／12	体部最大径20.9 底　径　5.4		・体部外面タタキのちヨコハケのち３mm幅のタテヘラミガキ。 ・体部内面９条／1.5cmヨコハケ。 ・体部内面下半中位からユビオサエのち下位にかけてタテヘラケズリ。 ・突出しない平底。	外面 淡茶褐色 内面 黒　色	結晶片岩 石英 長石	溝15 ４Ｅ４グリッド	

器　種	番号/挿図	法　量（cm）	口　頸　部	体　底　部	色　調	胎　土	出土遺構	備　考
細頸壺	20／12	口　径　4.9 頸部高　7.1 頸部径　4.1	・頸部直立。 ・口縁部緩やかに外反。 ・端部尖り気味におさめる。 ・頸部外面２㎜幅単位の入念なタテヘラミガキ。 ・口縁端部ヨコナデ。 ・粘土紐痕。	・体部外面，頸部との境に２㎜幅単位の入念なタテヘラミガキをとどめる。 ・体部内面，頸部との境に絞り目をとどめる。	褐白色	結晶片岩 微量の金雲母	溝15 ４Ｅ４グリッド	
壺	21／12	体部最大径12.6 底　径　3.5		・体部外面上半３㎜幅単位の入念なタテヘラミガキ。 ・体部外面下半５㎜幅単位の入念なタテヘラミガキ。 ・体部内面下半７㎜幅単位のタテヘラケズリ。 ・粘土紐痕。 ・突出しない平底。	赤褐色	結晶片岩 砂粒	溝15 ４Ｇ４グリッド	体部外面下半黒斑
無頸壺	22／12	体部最大径13.1		・体部中位に最大径。 ・体部外面上半タテハケのち２㎜幅単位の入念なタテヘラミガキ。 ・体部外面下半中位までタテハケのち２㎜幅単位のタテヘラミガキ。 ・体部外面下半右下がりの６㎜幅単位のヘラケズリ。 ・体部外面頸部との境ナデ。 ・体部内面上半ヨコナデ。 ・体部内面下半一部ハケのちナデ状のケズリ。 ・丸底。 ・粘土紐痕。	淡褐灰色	結晶片岩 微量の石英 長石	溝15 ４Ｈ４グリッド	
無頸壺	23／12	器　高　10.2	・口縁部僅かに外反気味に立ち上	・体部中位に最大径。	灰褐色	微量の結晶	溝15	

		口　径　11.8 体部最大径14.5 底　径　3.6	がり，尖り気味におさめる。 ・口縁部内外面ヨコナデ。	・僅かに突出した上げ底。 ・体部外面タテハケのち３㎜幅単位のタテヘラミガキ。 ・体部内面上半ユビオサエ。 ・体部内面ナデ。 ・外底面ナデ。 ・粘土紐痕。		片岩 金雲母	４Ｉ４グリッド	
甕Ａ１	24／12	器　高　14.6 口　径　14.0 体部最大径13.3 底　径　4.0	・口縁部大きく外反。 ・端部やや尖り気味におさめる。 ・口縁部貼り付け。 ・口縁部内外面ナデ。 ・口縁部体部との境ハケのちナデ。	・体部中位より上半に最大径。 ・体部外面上半７条／㎝単位のタテハケ。 ・体部外面下半上位右上がりのナナメハケ。 ・体部外面下半中位から下位にかけて４条／㎝の右上がりのタタキのちタテハケ。 ・体部内面上半上位ヨコヘラケズリ。 ・体部内面上半中位から，下半タテヘラケズリ。 ・粘土紐痕。 ・わずかに突出した平底。	淡赤褐色	微量の結晶 片岩 石英 長石	溝15 ４Ｄ４グリッド	体部外面下半煤の付着 体部内面焦げ付き痕
甕Ａ１	25／12	器　高　15.5 口　径　12.7 体部最大径13.7 底　径　3.4	・口縁部大きく外反。 ・端部を丸くおさめる。 ・口縁部貼り付け。	・体部中位上半に最大径。 ・突出しない平底で僅かに上げ底気味。 ・体部３条／㎝の右上がりのタタキのち板ナデ。 ・体部内面上位６㎜幅単位のヨコヘラケズリ。 ・体部中位６～７㎜幅単位の右下がりのヘラケズリ。 ・体部下位８㎜幅単位のタテヘラ	外面 淡茶褐色 内面 灰黒色	微量の結晶 片岩	溝15 ４Ｄ４グリッド	体部外面下半黒斑

器　種	番号/挿図	法　量（cm）	口　頸　部	体　底　部	色　調	胎　土	出土遺構	備　考
				ケズリ。 ・外底面ナデ。 ・僅かに上げ底。 ・粘土紐痕。				
甕A₁	26／13	器　高　18.0 口　径　12.4 体部最大径14.5 底　径　3.5	・口縁部大きく外反。 ・端部僅かに下方に拡張し尖り気味におさめる。 ・内外面ヨコハケ。 ・口縁部タタキ出し。	・体部中位に最大径。 ・体部上半３条／cmの右上がりのタタキのち９～10条／cmの右下がりのヨコハケ。 ・体部中位右下がりのタタキのちタテハケ。 ・体部下半水平タタキのち10条/8mm単位のタテハケ。 ・体部内面口縁部との境ユビオサエののち，ヨコヘラケズリ。 ・体部内面下半１cm幅単位のタテヘラケズリ。 ・底部ナデ。 ・突出しない平底で僅かに上げ底。	灰褐色	結晶片岩 石英	溝15 ４Ｆ４グリッド	体部外面下半煤の付着
甕A₁	27／13	器　高　25.3 口　径　16.8 体部最大径22.5 底　径　5.3	・口縁部大きく外反。 ・口縁端部尖り気味におさめる。 ・内外面ナデ。	・体部中位に最大径。 ・体部外面上半タテハケあるいはタテヘラケズリ。 ・体部外面中位１cm幅単位の右下がりのヘラケズリ。 ・体部下半タテヘラケズリのちタテハケ。 ・底位に平行タタキの痕跡をとどめる。 ・底部ナデ。 ・体部内面上半上位にユビオサエ。 ・体部内面上半から下半にかけ粗いハケ状のナデあるいはケズリ。 ・平底。	淡赤褐色	結晶片岩 石英 長石	溝15 ４Ｈ４グリッド	体部外面下半に黒斑

甕A₁	28／13	器　高　24.7 口　径　16.5 体部最大径21.1 底　径　5.3	・口縁部大きく外反。 ・口縁端部方形状におさめ，下端を僅かにつまみ出す。 ・口縁部タタキ出し。 ・外面タテハケ。 ・内面８条／cmのヨコハケ。	・体部中位より上半に最大径。 ・僅かに突出した平底で上げ底。 ・体部上半３条／cmの平行タタキののち10条／cmのタテハケ。 ・体部外面下位に３条／cmの右下がりのタタキのちハケ。 ・体部内面上半幅広の右下がりのヘラケズリ。 ・体部内面下半幅広のタテヘラケズリ。	明 褐 色	微量の結晶片岩	溝15 ４Ｉ４グリッド	
甕A₁	29／13	器　高　22.4 口　径　14.9 体部最大径16.0 底　径　4.9	・口縁部鋭く外反。 ・口縁部貼り付け。 ・端部上下が僅かにくぼみ，角ばっておさめる。 ・内面ヨコハケ。	・体部中位より上半に最大径。 ・突出しない平底。 ・体部外面中位３条／cmの右上がりのタタキののち10条／cmのタテハケ。 ・体部外面下位３条／cmの右下がりのタタキののち８条／cmのタテハケ。 ・体部内面上半上位ユビオサエののち右下がりのヘラケズリ。 ・体部内面上半から下半８mm幅単位のタテヘラケズリ。	淡 褐 色	結晶片岩 石英 長石 クサリ礫	溝15 ４Ｅ４グリッド	体部外面，部分に煤の付着
甕A₁	30／13	器　高　22.4 口　径　15.9 体部最大径18.5 底　径　4.3	・口縁部鋭く外反。 ・口縁端部方形状におさめ，下端を僅かにつまみ出す。 ・口縁部外面タテハケ。 ・口縁部内面幅広のヨコハケ。	・体部中位上半に最大径。 ・突出しない平底。 ・体部上半３条／cmの水平タタキのちタテハケ。 ・体部中位から下位にかけて３条／cmの右上がりのタタキのちナナメハケのち８条／1.5cmのタテハケ。	淡 褐 色	結晶片岩 石英 長石	溝15 ４Ｆ４グリッド	体部外面上半から底部にかけて黒斑

器　種	番号/挿図	法　量（cm）	口　・頸　部	体　底　部	色　調	胎　土	出土遺構	備　考
				・体部内面口縁部との境にユビオサエ。 ・体部内面上位から中位にかけて1.5cm幅単位の右下がりのヘラケズリ。 ・体部中位から下位にかけて1.5cm幅単位のタテヘラケズリ。				
甕A1	31／13	器　高　24.3 口　径　16.3 体部最大径19.7 底　径　4.8	・口縁部鋭く外反。 ・口縁端部方形状におさめ，下端を僅かにつまみ出す。 ・口縁部外面タテハケ。 ・口縁部内面17条／cmのヨコハケ。	・体部中位からやや上半に最大径。 ・突出しない平底で上げ底。 ・体部外面上半3条／cmの右下がりの平行タキののち10条／1.6cmのタテハケ。 ・体部外面中位下半に3条／cmの水平タタキののちタテハケ。 ・体部外面下位4条／cmの右下がりの平行タタキののちタテハケ。 ・外底面ナデ。 ・体部外面下位1.3cm幅の右下がりのナナメヘラケズリ。 ・体部内面下半ナナメヘラケズリ。	淡赤褐色	結晶片岩 石英 長石 クサリ礫 微量の金雲母	溝15 4F4グリッド	体部内面下半部分的に焦げ付き痕
甕A1	32／14	口　径　16.3 体部最大径20.5	・口縁部鋭く外反。 ・口縁端部方形状におさめ，下端を僅かにつまみ出す。 ・口縁部外面タテハケ。 ・口縁部内面8条／1.5cmのヨコハケ。	・体部中位よりやや上半に最大径。 ・体部外面上半4条／cmの水平タタキのち部分的に7条／1cm幅単位のタテハケ。 ・体部内面上半上位にユビオサエ，体部中位にかけてタテヘラケズリ。	淡褐色	結晶片岩 石英 長石 クサリ礫	溝15 4F4グリッド	体部外面中位に煤の付着

甕A1	33／14	器　高　26.0 口　径　17.5 体部最大径19.4 底　径　4.8	・口縁部大きく外反し，口縁下端部をつまみ出す。 ・１条の弱い擬凹線。 ・口縁部内外面ナデ。	・体部中位よりやや上半に最大径。 ・突出しない平底。 ・体部外面上位２条／cmの水平タタキののち13条／1.7cm幅単位のタテハケ。 ・体部外面中位２条／cmの右上がりの平行タタキののち13条／1.3cmのタテハケ。 ・体部外面下位３条／cmの水平タタキののち13条／1.7cm幅単位のタテハケ。 ・体部内面上位ユビオサエののち8～9㎜幅単位のタテヘラケズリ。 ・体部内面上半から下半1～1.5cm幅単位のタテヘラケズリ。 ・外底面２条／cmの粗いタタキ。	淡 褐 色	結晶片岩 石英 クサリ礫	溝15 ４Ｅ４グリッド	
甕A2	34／14	器　高　24.3 口　径　14.6 体部最大径17.5 底　径　4.5	・口縁部外反。 ・口縁端部下方に拡張。 ・１条の擬凹線。 ・口縁部内外面ナデ。	・体部中位に最大径。 ・突出しない平底。 ・体部外面上半５～６条／cm単位の右下がりのタタキのちタテヘラミガキ。 ・体部内面 1.3㎜幅単位の右下がりのナナメヘラケズリ。 ・外底面ナデ。	明 褐 色	結晶片岩 石英 ごく微量の金雲母 クサリ礫	溝15 ４Ｆ４グリッド	体部外面下半煤の付着
甕A2	35／14	口　径　16.3 体部最大径21.6	・口縁部外反。 ・口縁端部僅かに下方に拡張。	・体部中位に最大径。 ・体部外面９条／1.4cm単位のタテハケ。 ・体部内面上位ユビオサエのちタテヘラケズリ。 ・体部内面中位から下半タテヘラケズリ。	淡赤褐色	結晶片岩 石英 クサリ礫	溝15 ４Ｆ４グリッド	

器　種	番号/挿図	法　量（cm）	口　頸　部	体　底　部	色　調	胎　土	出土遺構	備　考
鉢B	36／14	器　高　10.8 口　径　20.6 底　径　5.0	・口縁部外反。 ・口縁端部外下方に僅かに拡張。 ・口縁部内面ヨコハケ。	・僅かに突出した平底。 ・体部外面３条～４条／cmの右下がりの平行タタキのち９条／cmのタテハケ。 ・体部内面１cm幅単位のタテヘラケズリ。 ・外底面ナデ。	内面 黒　色 外面 淡赤褐色	結晶片岩 クサリ礫 石英	溝15 ４Ｈ４グリッド	口縁部から外底面にかけて黒斑
鉢A_2	37／14	器　高　7.4 口　径　10.0 底　径　2.8	・口縁部僅かに直立気味に立ち上がる。 ・口縁端部尖り気味におさめる。 ・口縁部内外面ナデ。	・内彎気味に立ち上がる。 ・突出しない平底。 ・体部内外面３mm幅単位の入念なタテヘラミガキ。	淡茶褐色	結晶片岩粗粒 クサリ礫 ごく微量の金雲母	溝15 ４Ｈ４グリッド	
鉢A_2	38／14	器　高　5.8 口　径　9.6 底　径　3.5	・口縁部内彎気味に立ち上がる。 ・端部尖り気味におさめる。	・突出しない平底。 ・僅かに上げ底。 ・体部外面右下がりのハケ。 ・底部との境にユビオサエ。 ・体部内面11条／cm単位の左上方へのハケ。	淡赤褐色	結晶片岩 石英 ごく微量の金雲母 クサリ礫	溝15 ４Ｅ４グリッド	
鉢A_4	39／14	器　高　6.8 口　径　14.9 底　径　3.1	・端部僅かに内傾して尖り気味におさめる。 ・内外面ナデ。	・体底部内彎気味に立ち上がる。 ・突出しない平底。 ・体部外面上半４mm幅単位の左下がりのミガキ。 ・体部外面下半５mm幅単位のタテヘラミガキ。 ・体部内面板ナデ。 ・外底面粗いケズリ。	淡灰褐色	結晶片岩 石英	溝15 ４Ｅ４グリッド	外底面黒斑
鉢A_2	40／14	器　高　4.8 口　径　8.7 底　径　3.1	・端部方形状におさめる。	・体部内彎気味に立ち上がる。 ・僅かに突出した平底。 ・体部内外面ナデ。	淡赤褐色	結晶片岩 大粒 クサリ礫	溝15 ４Ｇ４グリッド	

				・外底面ナデ。		石英		
鉢A1	41／14	器　高　8.5 口　径　11.4 底　径　2.9	・端部僅かに内傾して尖り気味におさめる。 ・内外面ナデ。 ・内面ナデにより僅かな段を持つ。	・体部内彎気味に立ち上がる。 ・突出しない平底。 ・体部外面２～３㎜幅単位のヘラミガキ。 ・体部内面８㎜幅単位のタテヘラケズリ。 ・外底面ナデ。	暗赤褐色	結晶片岩 石英	溝15 ４Ｄ４グリッド	体部内外面一部朱の付着 内面底部に多量の朱の付着
鉢A1	42／14	器　高　7.9 口　径　10.1 底　径　3.8	・端部尖り気味におさめる。	・外上方に拡がる。 ・突出しない平底。 ・体部外面３条／㎝単位の右上がりのタタキのちナデ。 ・体部内面板ナデ。 ・外底面ナデ。	淡赤褐色	石英 チャート クサリ礫	溝15 ４Ｄ４グリッド	外底面から体部下半にかけて黒斑
鉢A3	43／15	器　高　6.7 口　径　12.8 底　径　3.2	・端部尖り気味におさめる。 ・外面ナデ。	・体部外上方に拡がる。 ・突出しない平底。 ・体部外面右上がりのタタキののち９条／1.5㎝単位のタテハケ。 ・体部内面9条／1.3㎝単位の右下がりのハケ。 ・体部内面下位ナデ。 ・外底面ナデ。	淡褐灰色	石英 金雲母	溝15 ４Ｆ４グリッド	
鉢A3	44／15	器　高　5.7 口　径　10.9 底　径　3.8	・端部尖り気味におさめる。 ・端部ナデ。	・体部外上方に拡がる。 ・突出しない平底。 ・体部上半３条／㎝の右上がりのタタキのちナデ。 ・体部外面下半３条／㎝の右上がりのラセンタタキ。 ・体部内面上半９条／７㎜単位のヨコハケ。 ・体部内面下半タテヘラケズリ。 ・外底面ナデ。	赤褐色	結晶片岩 石英 ごく微量の金雲母	溝15 ４Ｅ４グリッド	体部上半に黒斑

器　種	番号/挿図	法　量（cm）	口　頸　部	体　底　部	色　調	胎　土	出土遺構	備　考
鉢Ａ３	45／15	器　高　5.5 口　径　12.2 底　径　4.6	・端部尖り気味におさめる。	・体部外上方に拡がる。 ・突出しない平底。 ・体部外面８条／７㎜単位のタテハケ。 ・体部内面上半25条／2.7cm単位のヨコハケ。 ・体部内面下半ナデ。 ・外底面ハケ。	明 褐 色	結晶片岩 石英 ごく微量の金雲母	溝15 ４Ｄ４グリッド	底部から口縁部にかけて黒斑
高 杯 Ａ	46／15	口　径　14.1	・口縁端部尖り気味におさめる。 ・端部外面に１条の弱い沈線。	・内彎気味に立ち上がる。 ・外面２㎜幅単位の入念なタテヘラミガキ。 ・内面２㎜幅単位の入念なタテヘラミガキ。 ・脚部挿入付加法。 ・脚部1.5～2㎜幅単位の入念なタテヘラミガキをとどめる。	明 褐 色	結晶片岩 石英	溝15 ４Ｅ４グリッド	上端部に黒斑
高 杯 Ｂ	47／15	口　径　17.1	・口縁部屈曲して外反。 ・口縁端部丸みをもっておさめる。 ・口縁部外面ナデのち１～２㎜幅単位の交錯するタテヘラミガキ。 ・口縁部内面２㎜幅単位の入念なタテヘラミガキ。	・体部外面ヨコハケのち２㎜幅単位の入念なタテヘラミガキ。 ・体部内面２㎜幅単位の入念なタテヘラミガキ。	淡茶褐色	金雲母 石英	溝15 ４Ｉ４グリッド	口縁部外面黒斑
高 杯 Ｂ	48／15	口　径　32.9	・口縁部屈曲して外反。 ・口縁端部方形状におさめる。 ・口縁部内外面１㎜幅単位の入念なタテヘラミガキ。	・体部外面右上がりのタタキ，タテハケのち２㎜幅単位の入念なタテヘラミガキ。 ・体部内面６条／cmのヨコハケのち３㎜幅単位のタテヘラミガキ。	淡赤褐色	結晶片岩 石英	溝15 ４Ｇ４グリッド	
高杯脚部	49／15	脚　径　16.5		・緩やかに外下方に拡がり端部を僅かに屈曲。	淡赤褐色	結晶片岩 石英	溝15 ４Ｆ４グリ	

				・脚端部僅かに上下に拡張し方形状におさめる。 ・脚部外面３㎜幅単位の入念なタテヘラミガキ。 ・端部との境にナデ。 ・体部内面上半ナデ。 ・体部内面下半３㎜幅単位のタテヘラミガキのちヨコヘラミガキ。			ッド	
高杯脚部	50／15	脚　径　21.6		・脚部屈曲して大きく外方に拡がる。 ・脚部下端僅かに下方向に拡がり方形状におさめる。 ・脚部外面３㎜幅単位の入念なタテヘラミガキ。 ・脚柱部内面絞り目。 ・脚部内面９条／1.3㎝単位のヨコハケ。 ・脚端部内面ヨコナデ。 ・内側から焼成後穿孔（４孔）を施す。	暗 褐 色	結晶片岩	溝15 ４Ｊ４グリッド	
甕Ａ$_3$	１／17	器　高　15.3 口　径　18.8 体部最大径17.1 底　径　4.2	・口縁部外反。 ・口縁端部尖り気味におさめる。 ・口縁部タタキ出し。 ・内面８条／㎝単位のヨコハケ。	・体部上位に最大径。 ・突出しない平底で上げ底。 ・体部外面上半右上がりのタタキのち９条／㎝単位のタテハケ。 ・体部外面下半タテハケのち部分的に3㎜幅単位のタテヘラミガキ。 ・体部内面上半ヨコハケのち1.2㎝幅単位のタテヘラケズリ。 ・体部内面下半上半部からの 1.2㎝幅単位のタテヘラケズリ。 ・外底面ナデ。	明 褐 色	結晶片岩 石英	溝16 ４Ｄ６グリッド	体部外面下半に黒斑

器　種	番号/挿図	法　　量（cm）	口　　頸　　部	体　　底　　部	色　調	胎　　土	出土遺構	備　　考
鉢	2／17	器　高　　8.4 口　径　　11.5 底　径　　3.7	・口縁部緩やかに外反。 ・端部尖り気味におさめる。 ・口縁部内面ヨコハケのち6㎜幅単位のヨコヘラケズリ。	・体部上位に最大径。 ・突出しない平底。 ・体部外面上半7㎜幅単位のナナメヘラケズリ。 ・体部外面下半7㎜幅単位の左から右へのヨコヘラケズリ。 ・体部内面板ナデ状のタテヘラケズリ。 ・外底面ケズリ。	暗灰褐色	微量の結晶片岩 黒色鉱物 石英 ごく微量の金雲母	溝16 4Ｅ6グリッド	
鉢A_1	3／17	器　高　　9.5 口　径　　18.7 底　径　　7.5	・口縁端部僅かに内傾して丸くおさめる。 ・内外面ナデ。	・体底部内彎気味に立ち上がる。 ・突出しない平底。 ・体部外面右下がりのタタキ及びタテハケののち3㎜幅単位のタテヘラミガキ。 ・体部内面3㎜幅単位のタテヘラミガキ。 ・外底面ミガキ。	淡褐灰色	結晶片岩 クサリ礫 石英	溝16	
甕	4／17	口　径　　9.4 体部最大径12.3	・口縁部緩やかに外反。 ・口縁端部方形状におさめる。 ・口縁部外面5条／cmの粗いタテハケ。 ・口縁部内面5条／cmの粗いヨコハケ。 ・口縁部貼り付け。	・球形に近い体部。 ・体部中位に最大径。 ・丸底か？。 ・体部外面上半水平タタキののち7条／1.3cm単位の粗いタテハケ。 ・体部外面中位ナデ。 ・体部外面下位3条／cmの右下がりのタタキ。 ・体部内面上半8条／1.9cm単位の粗い右下がりのハケ。 ・体部内面下半1cm幅単位の板ナデ。	内面 灰黒色 外面 明灰褐色	チャート クサリ礫	溝19	

				・粘土紐痕。				
甕	5／17	口　径　13.8 体部最大径14.0	・口縁部外反し，端部は方形状におさめる。 ・内外面ナデ。	・体部外面３cm幅単位のタテヘラミガキ。 ・体部内面上半８mm幅単位のヨコヘラケズリ。 ・体部内面下半７mm幅単位のタテヘラケズリをとどめる。	淡 褐 色	結晶片岩 石英 黒色鉱物 ごく微量の金雲母	溝19	
鉢	6／17	口　径　16.0	・口縁端部方形状におさめる。	・体部内彎気味に立ち上がる。 ・体部外面上半部分的にヨコヘラケズリをとどめる。 ・体部外面下半９mm幅単位のタテヘラケズリ。 ・体部内面下半ヨコハケをとどめる。	赤 褐 色	粗粒の結晶片岩 微量の石英 ごく微量の金雲母	溝19	
広 口 壺	1／19	体部最大径16.9 底　径　2.3	・頸部僅かに外方に開き直立。 ・頸部外面上半タテハケのち２mm幅単位の入念なタテヘラミガキ。 ・頸部下半ナデ。	・扁平な球形の体部。 ・体部中位に最大径。 ・突出しない平底。 ・体部外面上位タテハケのち２～３mm幅単位のタテヘラミガキ。 ・体部中位２～３mm幅単位の入念なタテヘラミガキ。 ・体部低位２～３mm幅単位の入念なタテヘラミガキ。 ・体部内面，頸部との境に絞り目。 ・体部上半幅広のヨコハケのち部分的にユビオサエ。 ・体部下半15条／1.6cm 単位のナナメハケ。 ・外底面ナデ。 ・粘土紐痕。	明茶褐色	石英 微量の金雲母 微量のクサリ礫	溝1	体部外面上半に部分的に朱の付着 体部上半，下半で分割成形 体部外面中位，下半，底部に黒斑

器　種	番号/挿図	法　　量（cm）	口　　頸　　部	体　　底　　部	色　調	胎　　土	出土遺構	備　　考
甕	2／19	器　高　16.4 口　径　14.3 体部最大径14.8 底　径　4.4	・口縁部外反。 ・口縁端部僅かに尖り気味におさめる。 ・口縁部外面ナデ。 ・口縁部内面上半ナデ，下半ヨコハケ。	・体部中位より上半に最大径。 ・突出しない平底。 ・体部外面上半７条／６㎜単位のタテハケ，部分的にナデ。 ・体部外面下半７条／６㎜単位のタテハケのち，下位７㎜幅単位のタテヘラケズリ。 ・体部内面頸部との境ヨコハケ。 ・体部内面上位から下位にかけて７㎜幅単位のタテヘラケズリ。 ・外底面ナデ。	内面 淡褐灰色 外面 赤 褐 色	結晶片岩 石英 微量のクサリ礫	溝１	体部外面中位に部分的な煤の付着 体部内面中位に焦げ付き痕
甕	3／19	口　径　13.5 体部最大径19.8	・口縁部外反。 ・口縁端部外下方に拡張。 ・口縁部タタキ出し。 ・口縁部内面ヨコハケ。	・体部外面上位４条／cmの右上がりの平行タタキ。 ・体部外面中位３条／cmの右上がりの平行タタキ。 ・体部内面タテヘラケズリ。	淡褐灰色	結晶片岩 粗粒 石英 微量のクサリ礫	溝１	体部中位に煤の付着
甕	4／19	口　径　13.6 体部最大径20.8	・口縁部外反。 ・口縁端部一条の擬凹線を施し，方形状の断面。 ・外面上半ヨコナデ，下半タテハケ。 ・体部との境タタキの痕跡。 ・口縁部内面ヨコハケ。	・体部外面上半４条／cmの水平タタキののち４条／cmの右下がりのタタキ。 ・体部外面中位３条／cmの水平タタキ。 ・下位３条／cmの水平タタキののち部分的にナデ。 ・体部内面上半７～10㎜幅単位のヨコヘラケズリ。 ・体部内面下半1.3cm幅単位の幅広のヨコヘラケズリ。	赤 褐 色	結晶片岩 石英 長石	溝１	口縁部外面煤の付着
鉢	5／19	器　高　7.6 口　径　13.0	・口縁端部尖り気味におさめる。	・体部内彎気味に立ち上がる。 ・僅かに突出する平底。	淡 褐 色	結晶片岩 黒色鉱物	溝１	

		底　径　3.9		・僅かに上げ底気味。 ・体部外面上半水平タタキのちナデ。 ・体部外面下半３条／cmの平行タタキ。 ・底部との境にユビオサエ。 ・体部内面ナデ。		石英 ごく微量の金雲母		
高杯脚部	6／19	脚　径　19.0		・脚部外方に拡がる。 ・脚端部やや丸くおさめる。 ・脚柱に４孔を施す。 ・脚柱外面２mm幅単位の入念なタテヘラミガキ。 ・脚裾外面２mm幅単位の入念なタテヘラミガキ。 ・内面６cm幅単位のヨコヘラケズリのち端部ヨコナデ。	淡赤褐色	結晶片岩 石英 ごく微量の金雲母	溝１	脚部挿入付加法
甕A₁	7／19	器　高　15.4 口　径　12.3 体部最大径11.8 底　径　3.4	・口縁部外反。 ・口縁端部尖り気味におさめる。 ・口縁部４条／cmの平行タタキによるタタキ出し。 ・口縁部内面ヨコハケ。	・体部上位に最大径。 ・突出しない平底。 ・体部外面上端から口縁部にかけて４条／cmの水平タタキ。 ・体部外面中位３条／cmの右上がりの平行タタキののち部分的に２～３mm幅単位のタテヘラミガキ。 ・体部外面下位３条／cmの水平タタキ。 ・体部内面上端右下がりの粗ガキ。 ・体部内面中位から下位にかけてタテ方向のヘラミガキ。 ・外底面４条／cmのタタキ。	淡茶褐色	結晶片岩 大粒 石英 ごく微量の金雲母	溝17	

器　種	番号/挿図	法　量（cm）	口　頸　部	体　底　部	色　調	胎　土	出土遺構	備　考
甕A1	8／19	器　高　18.7 口　径　13.2 体部最大径14.4 底　径　4.8	・口縁部鋭く外反。 ・口縁端部僅かに外下方へ拡張し方形状におさめる。 ・口縁部タタキ出し。 ・口縁部内面4条／cmの幅広のヨコハケ。	・体部中位よりやや上半に最大径。 ・突出しない平底。 ・体部外面上半4条／cmの水平タタキ。 ・体部外面下半4条／cmのタタキののち1cm幅単位のタテヘラケズリ。 ・体部内面上半 1.2cm幅単位の右下がりのヘラケズリ。 ・体部外面下半1cm幅単位のタテヘラケズリ。 ・外底面ケズリ。	淡茶褐色	微量の結晶片岩 石英 ごく微量の黒色鉱物	溝17	底部から口縁部にかけて黒斑
甕A1	9／19	器　高　22.5 口　径　15.0 体部最大径19.1 底　径　4.6	・口縁部外反。 ・口縁端部下方に拡張し，1条の弱い沈線をとどめる。 ・口縁部内外面ヨコナデ。	・体部上位に最大径。 ・突出しない平底。 ・体部外面上半3条／cmの右上がりのタタキのち部分的にタテハケ。 ・体部外面下半6～8mm単位のタテヘラケズリ。 ・体部内面上半タテヘラケズリののち8～10mm幅単位のナナメヘラケズリ。 ・体部内面下半7～10mm幅単位のタテヘラケズリ。 ・外底面ナデ。	赤褐色	結晶片岩 粗粒 石英 長石 ごく微量の金雲母	溝17	底部から体部外面下半にかけて煤の付着
甕A2	10／19	器　高　31.1 口　径　16.5 体部最大径23.5 底　径　4.8	・口縁部外反。 ・口縁端部僅かに上下に拡張。 ・内外面ナデ。	・体部中位に最大径。 ・突出しない平底。 ・体部外面1.6条／1.3cmのタテハケ。 ・体部外面底部との境ナデ。	内面 黒灰色 外面 淡茶褐色	結晶片岩 石英 ごく微量の金雲母 黒色鉱物	溝17	底部から体部下位にかけて黒斑

				・体部内面上位ユビオサエ。 ・体部内面1.5～1.9cm幅単位の幅広のタテヘラケズリ。 ・外底面ハケ。				
広口壺	1／21	口　径　20.0	・頸部直立気味に立ち上がる。 ・口縁部大きく外反。 ・口縁端部を上下に拡張し，上端部つまみ上げ。 ・口縁部外端面ナデ。 ・頸部ナナメハケのち2ヵ所にヨコナデを巡らす。 ・口縁部外面2条／cmの幅広の平行タタキ。 ・口頸部内外面ヨコナデ。 ・粘土紐痕。	・球形の体部か？。	淡褐色	結晶片岩 赤色鉱物 石英	9号住居址	
広口壺	2／21	口　径　19.1	・頸部外上方に立ち上がる。 ・口縁部大きく外反。 ・端部を上方につまみ上げる。 ・頸部外面6条／1.4cmのタテハケ。 ・頸部内面上半7条／1.3cmのヨコハケ。 ・頸部内面下半ヨコナデ。 ・口縁部外面6条／1.4cmのタテハケのちヨコナデを巡らす。 ・口縁外端面ヨコナデ。 ・口縁部内面ヨコナデ。	・球形の体部か？。	淡茶褐色	結晶片岩 クサリ礫 石英 黒色鉱物	9号住居址	
鉢	3／21	体部最大径11.6		・体部中位よりやや上半に最大径。 ・体部上半タテハケのち1mm幅単位のタテヘラミガキ。 ・体部外面下半8条／cmのヨコハ	内面 暗褐灰色 外面 淡赤褐色	結晶片岩 石英	9号住居址	

器　種	番号/挿図	法　　量（cm）	口　　頸　　部	体　　底　　部	色　調	胎　　土	出土遺構	備　　考
				ケのち１～２㎜幅単位のタテヘラミガキ。 ・体部内面上半７㎜幅単位のヨコヘラケズリ。 ・体部内面下半タテヘラケズリ。 ・丸底。				
甕	4／21	口　径　14.5	・口縁部外反。 ・口縁下端はやや丸みを持ち，上端は上方につまみ上げる。 ・内外面ナデ。 ・１条の弱い擬凹線。	・体部外面頸部との境ヨコナデ。 ・体部外面上半13条／1.2㎝幅単位のナナメハケ。 ・部分的にタタキの痕跡をとどめる。 ・体部内面ユビオサエのちナデ。	明 褐 色	結晶片岩 石英 微量の金雲母 ごく微量のクサリ礫	９号住居址	体部外面煤の付着
甕	5／21	口　径　14.3	・口縁部大きく外反。 ・口縁端部やや尖り気味におさめる。		淡灰褐色	微砂粒(多) クサリ礫	９号住居址	
鉢	6／21	器　高　5.9 口　径　12.4	・口縁端部尖がり気味におさめる。	・内彎気味に立ち上がる。 ・体部外面上半ナデ。 ・体部外面下半幅広のケズリ。 ・体部内面上半ナデ。 ・体部内面下半ヘラ状のオサエ。 ・丸底に近い平底。	明灰褐色	結晶片岩 黒色鉱物 微砂粒	９号住居址	
鉢	7／21	器　高　7.1 口　径　12.2	・口縁端部尖り気味におさめる。 ・内外面ナデ。	・内彎気味に立ち上がる。 ・体部外面上半３条／㎝のやや右上がりのタタキ。 ・体部外面下半３条／㎝の水平タタキののちナナメハケ。 ・体部内面上半11条／1.4㎝幅単位のナナメハケ。 ・体部内面下半タテハケ。	内面 黒灰色 外面 淡褐色	結晶片岩 石英	９号住居址	

				・外底面ハケ。 ・僅かに平底をとどめる。				
鉢	8／21	器　高　8.8 口　径　19.6 底　径　6.5	・口縁部緩やかに外反。 ・口縁端部尖り気味におさめる。 ・内外面ナデ。 ・ヘラ押しによる片口を形成。	・内彎気味に立ち上がる。 ・体部外面２条／cmの幅広の水平タタキ。 ・体部外面下位に１cm幅単位のタテヘラケズリ。 ・体部内面８mm幅単位のタテヘラケズリ。 ・外底面１cm幅単位のケズリによる丸底に近い平底。	淡灰褐色	石英 クサリ礫 微砂粒を多く含む	９号住居址	体部外面下半に黒斑
高　杯	9／21	器　高　16.4 口　径　21.2 脚　径　16.2	・口縁部僅かに屈曲して内彎気味に立ち上がり，端部緩やかに外反。 ・口縁端部１条の擬凹線をとどめ断面方形状。 ・端部内外面ヨコナデ。 ・口縁部外面幅広のタテハケ。 ・部分的にタテヘラミガキ。 ・口縁部内面２～３mm幅単位の入念なタテヘラミガキ。	・体部外面ヨコハケ。 ・体部内面ヘラミガキ。 ・口縁部との境内外面ユビオサエ。 ・脚部緩やかに屈曲して外下方に拡がる。 ・脚端部方形状におさめ，僅かに下端部を拡張，端面ナデ。 ・脚柱部外面ナデ。 ・脚柱部内面タテヘラケズリ。 ・脚裾外面6～7条／cmのタテハケ。 ・端部に右上がりのタタキの痕跡をとどめる。 ・脚裾内面８mm幅単位のヨコヘラケズリののちヨコナデ。	淡赤褐色	結晶片岩 石英 長石	９号住居址	
高　杯	10／21	器　高　14.3 口　径　22.2 脚　径　16.5	・口縁部僅かに屈曲して内彎気味に立ち上がり，端部緩やかに外反。 ・口縁端部丸くおさめる。 ・口縁部上半ヨコナデ。 ・口縁部下半タタキのち12条／2cm単位のタテハケ。	・体部外面８条／cmのタテハケ。 ・体部内面２～３mm幅単位の入念なタテヘラミガキ。 ・口縁部との境にユビオサエあるいはヘラによるオサエをとどめる。	淡赤褐色	結晶片岩 石英 長石 微量のクサリ礫	９号住居址 （方形土坑）	

器　種	番号/挿図	法　量（cm）	口　頸　部	体　底　部	色　調	胎　土	出土遺構	備　考
			・口縁部内面２㎜幅単位のタテヘラミガキ。	・脚部緩やかに屈曲して外下方に拡がる。 ・脚柱部内面タテハケののちナデ。 ・脚柱部内面５㎜幅単位のヨコヘラケズリ。 ・脚裾部外面タテハケののち２㎜幅単位の入念なタテヘラミガキ。 ・脚裾部内面８㎜幅単位のヨコヘラケズリ。 ・脚裾外端面ナデ。 ・３孔を施す。				
二重口縁壺	１／22	口　径　23.9 体部最大径62.9	・頸部内方向に立ち上がる。 ・頸部ヨコナデ。 ・口縁部外上方に鋭く開き大きく内上方に立ち上がる。 ・口縁端部左右に拡張し平坦面を形成する。 ・口縁部上半ヨコナデ。 ・下端部に４㎜幅単位の凹線を３条巡らす。 ・口縁部下半タテハケのちヨコナデ。 ・口縁部内面上半ヨコナデ。 ・下端部にユビオサエ痕。 ・口縁内面下半ヨコナデ。 ・上半との境に強いナデ。	・体部外面９条／2.7㎝単位の幅広のタテハケ。 ・体部内面幅広のケズリ状の板ナデ。	淡茶褐色	多量の金雲母 多量の角閃石 クサリ礫	９号住居址	体部外面上半部に黒斑 讃岐系
深　鉢	１／23	器　高　13.4 口　径　16.6 底　径　5.7	・口縁部緩やかに外反して立ち上がる。 ・口縁端部方形状におさめ，ヘラ状工具による圧痕をとどめる。	・体部内彎気味に立ち上がる。 ・突出した平底。 ・口縁部との境に半裁竹管状の刻み目を持った幅９㎜程度の突帯	灰黒色	大粒の砂粒を多量に含む	４Ｅ６グリッド	縄文土器

			・口縁部外面端部より下がった所に半裁竹管状の刻み目を持った6㎜幅の突帯を巡らす。 ・口縁部内外面1～2㎜幅単位のヨコ方向のミガキ。	を巡らす。 ・体部内面頸部との境に半裁竹管状の刻み目を持った9㎜幅程度の突帯を巡らす。 ・体部内外面2㎜幅前後のヨコ方向へのミガキ。				
広口壺	1／26	口　径　12.8 体部最大径19.7	・頸部直立，口縁部外反し端部を上方へ鋭くつまみ上げる。 ・口縁部端面に2条の擬凹線を施す。 ・頸部外面ナナメハケ。 ・頸部内面ヨコナデ。 ・下端部にナナメハケ。 ・口縁部内外面ナデ。	・体部中位に最大径。 ・体部外面上位17条／2.2cm幅単位の左下がりのナナメハケ。 ・体部外面中位8条／cmの右下がりのナナメハケ。 ・体部内面上端部部分的に2～3㎜幅単位のヘラミガキの痕跡。 ・体部内面上位ユビオサエ。 ・体部内面中位8㎜幅単位のタテヘラケズリ。	明褐色	微量の結晶片岩 石英粒大 ごく微量の金雲母	土坑34 （西）	
鉢	2／26	口　径　20.3	・口縁端部尖り気味におさめる。 ・下端部僅かに丸みを持つ。 ・内外面ナデ。	・体部上位に僅かな凸部を巡らす。 ・体部外面ナデ。 ・体部内面上端，僅かながら厚みを持たす。 ・体部内面上半2㎜幅単位のヨコヘラミガキ。 ・体部内面3㎜幅単位の入念なヨコヘラミガキ。	明褐灰色	微量の結晶片岩 石英 微砂粒	土坑34 （東）	
鉢	3／26	器　高　9.2 口　径　16.4	・内彎気味に立ち上がる。 ・端部尖り気味におさめる。 ・1条の擬凹線をとどめる。	・丸底。 ・体部内面条線状のタテヘラミガキ。 ・体部内面上端部ヨコナデ。 ・体部外面上半ヨコナデ。 ・体部外面下半 1.2cm幅単位のタテ，ヨコヘラケズリ。	淡褐色	結晶片岩 石英	土坑34 （東）	

器　種	番号/挿図	法　　量（cm）	口　　頸　　部	体　　底　　部	色　調	胎　　土	出土遺構	備　　考
鉢	4／26	口　径　13.6	・口縁部緩やかに外反。 ・端部丸くおさめる。 ・外端面ナデ。 ・口縁部タタキ出しののち内外面ナデ。	・体部内彎気味に立ち上がる。 ・丸底か？。 ・体部外面３条／cmの右上がりのタタキのちスリ消し。 ・体部内面1.8cm幅単位の板ナデ。	淡灰褐色	微砂粒	土　坑　34（東）	精製された胎土
器　台	5／26	口　径　9.1 脚　径　10.4	・口縁端部尖り気味におさめる。 ・受部外端面ヨコナデ。 ・頸部外面１～２mm幅単位のヨコヘラミガキののち入念なタテヘラミガキ。 ・受部内面ナデ。	・脚部外下方へ開く。 ・脚端部丸くおさめる。 ・脚部外面タテハケのち２～３mm幅単位の入念なナナメヘラミガキ。 ・脚部下端に右上がりのタタキの痕跡。 ・脚部端面ナデ。 ・脚部内面ナデ。 ・脚部挿入付加法。	淡灰褐色	ごく微量の石英 赤色鉱物	土　坑　34（西）	精製された胎土
高　杯	6／26	器　高　13.1 口　径　20.3 脚　径　13.5	・口縁部屈曲して大きく外反。 ・口縁端部僅かに尖り気味におさめる。 ・端面に１条の弱い沈線を巡らす。 ・口縁部外面２～３cm幅単位の入念なタテヘラミガキ。 ・口縁部内面３mm幅単位のタテヘラミガキを，２条１単位で施す。	・僅かに内彎気味に立ち上がる。 ・体部外面９条／cmのヨコハケ。 ・体部内面２～３mm幅単位の入念なタテヘラミガキ。 ・脚部は屈曲して外下方に拡がる。 ・脚端部を丸くおさめる。 ・脚柱部外面ヨコナデ。 ・脚柱部内面絞り目。 ・脚裾部外面タテハケのち３mm幅単位のヘラミガキ。 ・脚裾部内面ヨコハケのち脚端部ヨコナデ。 ・３孔を施す。 ・脚部挿入付加法。	淡灰褐色	結晶片岩 石英 ごく微量の金雲母 微量のクサリ礫	土　坑　34（西）	

広口壺	1／28	口　径　14.5	・頸部直立，口縁部緩やかに外反し僅かに上端部を拡張。 ・断面方形状を呈す。 ・口縁部外面7㎜幅単位の2条の強いヨコナデ。 ・口縁部内面ヨコナデ。 ・口縁端部内側に6㎜幅単位の強いヨコナデ。		赤褐色	結晶片岩 石英 ごく微量のクサリ礫	8号住居址	
鉢	2／28	器　高　4.3 口　径　7.8 底　径　2.7	・外上方に立ち上がる。 ・口縁端部を尖り気味におさめる。	・体部外面ナデ。 ・体部内面タテ方向の板ナデ。 ・突出しない平底。 ・外底面ナデ。	淡灰褐色	クサリ礫 石英 砂粒(多)	8号住居址	
鉢底部	3／28	底　径　4.7		・体部外面3㎜幅単位のタテヘラミガキ。 ・体部内面8条／1.2cm幅単位のヨコ，タテハケ。 ・底部ドーナツ状。	褐灰色	結晶片岩 石英 ごく微量の金雲母	8号住居址	黒斑
甕底部	4／28	底　径　5.2		・突出しない平底。 ・体部外面7条／1.3cmのタテハケ。 ・底部との境にヨコナデ。 ・体部内面1cm幅単位のタテヘラケズリ。 ・外底面ナデ。	淡褐灰色	結晶片岩 石英 ごく微量の金雲母	8号住居址 （拡張部）	底部から体部下半にかけて黒斑
甕	1／31	器　高　26.0 口　径　18.6 体部最大径24.8 底　径　3.8	・外反。 ・口縁端部上端を鋭く内上方につまみ上げる。 ・弱い1条の擬凹線を施す。 ・外端面ナデ。 ・口縁部内外面ヨコナデ。	・体部中位よりやや上半に最大径。 ・突出しない平底。 ・体部外面上位14条／1.8cm単位のタテハケ。 ・体部外面中位6条／cmのナナメハケ。	淡赤褐色	結晶片岩 黒色斑粒 石英 ごく微量の金雲母	10号住居址 （柱穴）	体部外面中位から下位にかけて煤の付着 体部内面下半に焦げ付き痕

器　種	番号/挿図	法　量(cm)	口　頸　部	体　底　部	色　調	胎　土	出土遺構	備　考
				・体部外面下位7条／cmのタテハケ。 ・部分的に右下がりのタタキの痕跡。 ・体部内面上半ユビオサエののちナデ。 ・体部内面下半1～1.5cm幅単位のタテヘラケズリ。 ・外底面ハケ。				
丸底鉢	1／33	器　高 （復元高）　6.7 口　径　12.3	・口縁部緩やかに外反し，端部を丸くおさめる。 ・口縁内外面ヨコナデ。	・体部外面6～7mm幅単位のタテヘラケズリ。 ・体部内面ナデ。	内面 淡茶褐色 外面 灰黒色	結晶片岩 黒色鉱物 ごく微量の金雲母 石英	12号住居址	
二重口縁壺	2／33	器　高　31.8 口　径　20.5 体部最大径26.7	・頸部僅かに上方に開く。 ・口縁部屈曲して大きく外反。 ・口縁端部丸くおさめる。 ・屈曲部外面尖り気味におさめる。 ・頸部内外面ヨコナデ。 ・口縁部内外面ヨコナデ。	・体部中位に最大径。 ・球形の体部。 ・丸底。 ・体部外面16条／1.7cm幅単位のタテハケ。 ・体部内面上半ユビオサエののちナデ。 ・体部内面下半1.6cm幅単位のヨコヘラケズリ。 ・外底面ケズリ。 ・内底面ユビオサエのちナデ。	淡茶褐色	結晶片岩 石英 微量の金雲母	12号住居址	体部外面中位に煤の付着
壺　A	1／35	口　径　24.6	・頸部僅かに外反して立ち上がる。 ・口縁部屈曲して緩やかに外反。 ・口縁端部を方形状におさめる。 ・頸部外面3mm幅単位の入念なタ	・頸部との境に3mm幅単位の入念なタテヘラミガキをとどめる。	明赤褐色	砂粒(多) 石英 ごく微量の金雲母	井戸1	

			テヘラミガキ。 ・頸部内面４㎜幅単位の入念なヨコヘラミガキ。 ・口縁部内面２～３㎜幅単位の入念なタテヘラミガキ。 ・口縁外端面ヨコナデ。 ・口縁屈曲部外端を鋭く仕上げる。 ・屈曲部下端面ヨコナデ。					
壺 頸 部	２／35		・頸部内傾気味に立ち上がる。 ・頸部外面タテハケのちナデ。 ・頸部内面ナデ。	・頸部との境12条／cmのタテハケをとどめる。	淡灰褐色	結晶片岩	井戸１	讃岐系
壺Ｂ₁	３／35	器　高 （復元高）23.5 口　径　12.3 体部最大径20.1 底　径　3.8	・頸部直立。 ・口縁部水平気味に外反し，下端部を僅かに拡張。 ・断面方形状を呈す。 ・頸部外面10条／1.6cm幅単位のナナメハケ。 ・頸部内面ヨコハケのちナデ。 ・口縁部内外面ナデ。	・体部中位に最大径。 ・丸底に近い平底。 ・体部外面上半３条／cmの右上がりの平行タタキののち７条／cmのタテハケ。 ・体部外面下半３条／cmの右上がりのタタキののち７条／９㎜幅単位のタテハケ。 ・体部内面上端部ヨコハケ。 ・体部内面下半上部８条／９㎜幅単位のハケ。 ・体部内面下半，底部ナデ。 ・外底面タタキのちハケ。	淡褐灰色	クサリ礫 砂粒	井戸１	
壺Ｂ₂	４／35	器　高　21.2 口　径　12.9 体部最大径20.0 底　径　1.8	・頸部直立気味に立ち上がり，口縁部大きく外反する。 ・口縁端部下端下方に拡張。 ・口縁部上端鋭く上方につまみ上げる。	・体部中位に最大径。 ・僅かに丸底に近い平底をとどめる。 ・体部外面ヨコヘラケズリののち２㎜幅単位のヨコヘラミガキ。	内面 黒 灰 色 外面 淡褐灰色	結晶片岩 石英 クサリ礫 ごく微量の金雲母	井戸１	

器　種	番号/挿図	法　　量（cm）	口　　頸　　部	体　　底　　部	色　調	胎　　土	出土遺構	備　　考
			・頸部外面タテハケのちナデ。 ・頸部内面10条／cmのヨコハケ。 ・口縁部内外面ヨコナデ。	・体部内面上半ユビオサエののちヨコナデ。 ・体部内面下半９条／cm単位の下から上へのタテハケ。 ・外底面ナデ。 ・粘土紐痕。				
壺B3	5／35	器　高　31.1 口　径　16.4 体部最大径25.8	・頸部直立気味に立ち上がり，口縁部外反。 ・口縁端部上端をつまみ上げる。 ・１条の擬凹線を施す。 ・頸部外面上半タテハケ。 ・頸部内面ヨコナデ。 ・口縁部内外面ヨコナデ。	・体部中位に最大径。 ・丸底。 ・体部外面上半20条／1.8cm幅単位のナナメハケののち２～３mm幅単位の方射状のタテヘラミガキを２条単位に施す。 ・体部外面下半10条/1.4cm幅単位のタテハケ。 ・体部内面上位ユビオサエ。 ・体部内面上位から中位にかけてタテヘラケズリ。 ・底部外面ハケ	淡茶褐色	結晶片岩 石英 ごく微量の金雲母	井戸１	体部外面中位に黒斑 体部外面下半煤の付着
壺B3	6／35	器　高　32.9 口　径　17.1 体部最大径31.0	・頸部直立し，口縁部屈曲して大きく外方向へ開く。 ・口縁端部上方につまみ上げる。 ・口縁外端面幅広の擬凹線を施す。 ・下端部僅かに下方に拡張。 ・頸部外面タテハケ。 ・頸部外面中位ヨコナデ。 ・頸部内面９条／1.8cm幅単位のヨコハケ。 ・口縁部内外面ヨコナデ。	・体部中位よりやや上半に最大径。 ・球形の体部。 ・平底に近い丸底。 ・体部外面上半３条／cmの水平タタキののち12条／1.5cm幅単位のナナメハケ。 ・体部外面下半４条／cmの右上がりのタタキののち５条／cmのタテハケ。 ・体部内面上半ユビオサエ。 ・体部内面下半1～1.2mm幅単位のタテヘラケズリ。	明灰褐色	結晶片岩 石英 ごく微量の金雲母	井戸１	体部外面下半に黒斑 体部外面中位に煤の付着

壺B₂	7／36	器　高　33.0 口　径　21.3 体部最大径26.6	・頸部直立気味に立ちあがり，口縁部大きく外反。 ・口縁端部下端は丸みを持ち，上端は緩やかにつまみ上げる。 ・外端面ナデ。 ・頸部と口縁部との境に僅かな段を残す。 ・頸部外面ナナメハケのちタテ方向へのナデ。 ・口縁部内外面ヨコナデ。	・体部中位よりやや上半に最大径。 ・やや肩の張る球形に近い体部。 ・体部外面上位11条／1.4cm幅単位のヨコハケ。 ・体部中位から下位にかけて6～7条／cmのタテハケ。 ・外底面ナデ。 ・体部内面上半ユビオサエののちナデ。 ・体部内面下半 1.5cm幅単位のヘラケズリ。	赤 褐 色	結晶片岩 石英 砂粒 ごく微量の金雲母	井戸1	
甕B	8／36	器　高　19.5 口　径　15.0 体部最大径17.4 底　径　1.3	・口縁部外反。 ・端部を丸くおさめる。 ・口縁部内外面ヨコナデ。	・体部中位に最大径。 ・尖り気味の底部で僅かに平底をとどめる。 ・体部外面上位に5条／cmの右上がりの細かいタタキののち14条／cm幅単位のタテハケ。 ・体部中位14条／cmのタテハケ。 ・体部外面下位9条／cmのタテハケ。 ・部分的に右上がりのタタキを残す。 ・体部内面8～9条／cmのヨコハケ。 ・内底面にユビオサエ。	淡赤褐色	石英 クサリ礫 長石 ごく微量の金雲母	井戸1	体部外面下半に煤の付着
甕A₁	9／36	口　径　16.5 体部最大径24.2	・口縁部外反。 ・口縁端部を肥厚させ上方につまみ上げる。 ・2条の擬凹線。 ・内外面ナデ。	・体部中位上部に最大径。 ・体部外面上半23条／2cm幅単位のナナメハケ，上位はヨコナデ，部分的にヨコハケをとどめる。 ・体部外面下半8条／cmのナナメハケ。 ・体部外面上位ユビオサエ。 ・体部外面中位から下位にかけてヘラケズリ。	淡赤褐色	結晶片岩 大粒 石英(大粒) クサリ礫 ごく微量の金雲母	井戸1	体部外面下位から中位にかけて煤の付着 体部内面煤の付着

器　種	番号/挿図	法　　量（cm）	口　　頸　　部	体　　底　　部	色　調	胎　　土	出土遺構	備　　考
甕A₁	10／36	口　径　14.4 体部最大径20.0	・口縁部外反。 ・口縁端部僅かに上下に拡張，上端部はつまみ上げ。 ・口縁部外面ヨコナデ。 ・口縁部内面ヨコハケのちナデ。	・体部中位よりやや上半に最大径。 ・球形に近い体部。 ・体部外面13条／1.3cm幅単位のタテハケ，部分的にタタキの痕跡をとどめる。 ・体部外面口縁部との境ヨコナデ。 ・体部外面上半ユビオサエ。 ・体部内面下半1.3cm幅単位程度のタテヘラケズリ。	淡赤褐色	結晶片岩 石英 クサリ礫 ごく微量の金雲母	井戸1	体部外面下位から中位にかけて煤の付着
甕A₁	11／36	口　径　17.0 体部最大径21.3	・口縁部外反。 ・口縁端部下端は丸みを持ち上端は鋭くつまみ上げる。 ・口縁部内外面ヨコナデ。	・体部中位よりやや上半に最大径。 ・体部外面８条／1.5cm幅単位のナナメハケ。 ・体部外面上半ユビオサエ，口縁部との境ナデ。 ・体部内面下半タテヘラケズリ。	淡赤褐色	結晶片岩 石英 ごく微量の金雲母 クサリ礫	井戸1	体部上半から中位にかけて煤の付着
甕A₁	12／36	口　径　14.2 体部最大径21.3	・口縁部外反。 ・端部上端を僅かにつまみ上げる。 ・１条の擬凹線。 ・口縁部内外面ナデ。	・体部中位に最大径。 ・体部外面上位10条／cm単位のタテハケ。 ・口縁部との境タテハケのちヨコナデ。 ・体部外面中位から下位にかけて６条／cm単位のタテハケ。 ・下位に３条／cmの水平タタキの痕跡をとどめる。 ・体部内面上位ユビオサエ。 ・体部内面中位から下位にかけて１cm幅単位のタテヘラケズリ。	淡茶褐色	結晶片岩 石英	井戸1	体部外面煤の付着 体部内面下半焦げ付き痕
甕A₁	13／36	器　高　21.5 口　径　13.0	・口縁部外反。 ・口縁端部下端は丸みを持ち，上	・体部中位に最大径。 ・僅かに平底に近い丸底。	淡灰褐色	結晶片岩 石英	井戸1	体部外面中位に煤の付着

		体部最大径19.3	端は緩やかにつまみ上げる。 ・１条の弱い擬凹線。 ・口縁部内外面ヨコナデ。	・体部外面上半４条／cmのナナメハケ。 ・体部外面下半16条／1.6cm幅単位のタテハケ。 ・体部内面上半ユビオサエののちタテヘラケズリ。 ・体部内面中位にユビオサエ。 ・体部内面下半タテヘラケズリ。 ・外底面ハケ。		クサリ礫 ごく微量の金雲母		体部内面中位に焦げ付き痕
甕A₁	14／37	器　高　23.4 口　径　13.5 体部最大径19.9	・口縁部外反。 ・口縁端部上端を鋭くつまみ上げる。 ・２条の非常に弱い擬凹線。 ・口縁部内外面ヨコナデ。	・体部中位よりやや上半に最大径。 ・僅かに平底に近い丸底。 ・体部外面13条／1.8cm幅単位のヨコハケ。 ・体部外面下位に３条／cmの右下がりのタタキののちタテハケ。 ・下端部ナデ。 ・体部内面上端部ユビオサエ。 ・体部内面上位から下位にかけてタテヘラケズリ。 ・外底面ハケ。	内面 灰褐色 外面 淡赤褐色	結晶片岩 石英 ごく微量の金雲母 微量の黒色鉱物 微量のクサリ礫	井戸１	体部外面上位，下位に黒斑
甕A₁	15／37	器　高　23.0 口　径　14.7 体部最大径20.5	・口縁部外反。 ・口縁端部両端をつまみだす。 ・１条の弱い擬凹線。 ・口縁部内外面ヨコナデ。	・体部中位に最大径。 ・僅かに平底に近い丸底。 ・体部外面17条／1.4cm幅単位のタテハケ。 ・底部との境にヨコナデ。 ・外底面ハケ。 ・体部内面上半ユビオサエののちナデ。 ・体部内面下半1.3cm幅単位のタテヘラケズリ。	淡赤褐色	結晶片岩 石英 クサリ礫 ごく微量の金雲母	井戸１	体部外面中位に煤の付着

器　種	番号/挿図	法　　量（cm）	口　　頸　　部	体　　底　　部	色　調	胎　　土	出土遺構	備　　考
甕A1	16／37	器　高　　24.7 口　径　　15.1 体部最大径23.2 底　径　　3.0	・口縁部外反。 ・口縁端部下端はやや丸みを持ち上端はつまみ上げる。 ・非常に弱い２条の擬凹線。 ・口縁部内外面ヨコナデ。	・体部中位に最大径。 ・僅かに丸底に近い平底。 ・体部外面上半21条／２cm幅単位のタテハケ，上位ハケのちヨコナデ。 ・体部外面下半21条／２cm幅単位のタテハケ，下位ハケのちナデ。 ・体部内面上半ユビオサエのちナデ。 ・体部外面下半1.3／cm 幅単位のタテヘラケズリ。 ・外底面ハケ。	淡赤褐色	結晶片岩 石英 ごく微量の金雲母 微量のクサリ礫	井戸１ 12号住居址	12号住居址と接合 体部外面中位から下位にかけて煤の付着 体部内面下位焦げ付き痕
甕A1	17／37	器　高　　22.4 口　径　　14.6 体部最大径20.8	・口縁部外反。 ・口縁端部上端を鋭くつまみ上げる。 ・非常に弱い１条の擬凹線。 ・口縁部内外面ヨコナデ。	・体部中位に最大径。 ・平底に近い丸底。 ・体部外面上半13条／1.5cm幅単位のナナメハケ。 ・頸部との境ヨコナデ。 ・体部外面下半11条／1.4cm幅単位のタテハケ。 ・下位ヨコナデ。 ・体部内面上半ユビオサエののちナデ。 ・体部内面下半タテヘラケズリ。 ・外底面ハケのちナデ。	明 褐 色	経晶片岩 石英 ごく微量の金雲母 クサリ礫	井戸１	体部外面下位から中位にかけて煤の付着 体部内面下位に焦げ付き痕
甕A1	18／37	器　高 （復元高）21.5 口　径　　11.5 体部最大径18.0 底　径　　2.0	・口縁部外反。 ・口縁端部上端を鋭くつまみ上げる。 ・弱い２条の擬凹線。 ・口縁部内外面ヨコナデ。	・体部中位に最大径。 ・僅かに丸底に近い平底。 ・体部外面上位15条／1.3cm幅単位のタテハケのち上半部ヨコナデ。	明 褐 色	結晶片岩 石英 微量のクサリ礫 ごく微量の	井戸１	体部外面中位から下位にかけて煤の付着

				・体部外面中位16条／２cm幅単位のタテハケ，部分的に右下がりのタタキの痕跡。 ・体部外面下位９条／cmのタテハケのち底部との境ヨコナデ。 ・体部内面上半ユビオサエののち板ナデ。 ・体部内面下半１cm幅単位のナナメヘラケズリ。 ・外底面ハケ。		金雲母		
甕C	19／37	口　径　11.9 体部最大径12.7	・口縁部外反。 ・口縁部タタキ出し。 ・口縁端部を僅かに方形状におさめる。 ・口縁部内面ヨコハケ。	・胴長の体部。 ・体部中位よりやや下半に最大径 ・体部外面上位から中位にかけて３条／cmの水平タタキののち部分的に６条～７条／６mm幅単位のタテハケ。 ・体部外面下位タテハケののち７mm幅単位のタテヘラケズリ。 ・体部内面上位１cm幅単位のヨコヘラケズリ。 ・体部内面下位から中位にかけて８～10mm幅単位のタテヘラケズリ。	淡赤褐色	石英 長石 微砂粒 クサリ礫 ごく微量の金雲母	井戸１	体部外面下位に黒斑
甕A_2	20／37	口　径　7.4 体部最大径11.5	・口縁部短かく外反し，上端部を僅かにつまみ上げる。 ・口縁部内外面ヨコナデ。	・体部外面上位細かいタテハケののち１mm幅単位のタテヘラミガキ，上端部ヨコナデ。 ・体部外面中位８条／７mm幅単位の細かいタテハケ。 ・体部内面上半ユビオサエ。 ・体部内面下半９mm幅単位のナナメヘラケズリ。	淡暗褐色	石英 ごく微量のクサリ礫 ごく微量の金雲母 微量の黒色鉱物	井戸１	

器　種	番号/挿図	法　量（cm）	口　頸　部	体　底　部	色　調	胎　土	出土遺構	備　考
鉢A4	21／28	器　高　9.2 口　径　8.0 底　径　3.1	・僅かに外反。 ・端部は尖り気味におさめる。 ・内外面ヨコナデ。	・体部中位に最大径。 ・平底。 ・体部外面上半14条／cmの細かいタテハケ。 ・口縁部との境にヨコナデのち体部外面下半1cm幅程度の板ナデ状のケズリ。 ・体部外面下端に4条／cmの平行タタキ，部分的にヘラケズリの痕跡。 ・体部内面1cm幅程度のナナメヘラケズリ。 ・内底面にクモの巣状のハケの痕跡。 ・外底面ナデ。	灰白色	石英 微砂粒	井戸1	体部外面下位に黒斑
鉢A2	22／38	器　高　5.4 口　径　10.5 底　径　3.3	・口縁端部尖り気味におさめる。	・体部内彎気味に立ち上がる。 ・僅かに突出した平底で，円板状の底部の貼り付けか？。 ・体部外面3条／cmの右上がりのタタキののち，一部タテハケ。 ・底部との境にユビオサエ。 ・体部内面 1.2cm幅単位のヨコハケの痕跡。 ・外底面ナデ。	淡褐色	結晶片岩（微量） 石英 ごく微量の金雲母 微量の黒色鉱物	井戸1	体部外面黒斑
鉢A1	23／38	器　高　6.1 口　径　9.8 底　径　2.8	・口縁端部尖り気味におさめる。 ・口縁端部内面ヨコナデ。	・体部内彎気味に立ち上がる。 ・僅かに平底で円板状の底部の貼り付けか？。 ・体部外面3条／cmのラセン状のタタキ。	内面 黒灰色 外面 濃灰褐色	砂粒 石英 長石 クサリ礫 黒色鉱物	井戸1	

				・体部内面12条／1.4cm幅単位のナナメハケ。 ・外底面ナデ。				
鉢A1	24／38	器　高　6.6 口　径　11.7	・口縁端部僅かに内傾し，尖り気味におさめる。 ・口縁部内面ヨコナデ。	・体部内彎気味に立ち上がる。 ・丸底。 ・体部外面上半タタキののちヨコナデ。 ・体部外面下半5条／cmの水平タタキ。 ・体部内面2～3mm幅単位の入念なタテヘラミガキ。 ・外底面5mm幅単位のヘラケズリ。	淡灰褐色	砂粒(多) 石英 長石 クサリ礫 黒色鉱物 ごく微量の金雲母	井戸1	
鉢A1	25／38	器　高　6.1 口　径　9.8	・口縁端部尖り気味におさめる。 ・口縁端部内面ヨコナデ。	・体部内彎気味に立ち上がる。 ・丸底。 ・体部外面上半4条／cmの右上がりのタタキののちヨコナデ。 ・体部外面下半7mm幅単位のヨコヘラケズリ。 ・体部内面7mm幅単位のタテヘラケズリ。	内面 淡灰黒色 外面 淡灰褐色	チャート 砂粒 石英 長石 クサリ礫 ごく微量の金雲母	井戸1	底部外面から口縁部にかけて黒斑
鉢A1	26／38	器　高　6.7 口　径　13.0	・口縁端部尖り気味におさめる。	・体部内彎気味に立ち上がる。 ・底部ケズリ出しによる僅かな平底に近い丸底。 ・体部外面上半タタキのちヨコナデ。 ・体部外面下半3条／cmの右上がりの平行タタキ。 ・体部外面底部との境6mm幅単位のヘラケズリ。 ・体部内面ナデ。 ・内底面に僅かにヨコハケ。	淡褐灰色	石英 クサリ礫 ごく微量の金雲母	井戸1	体部外面黒斑

器　種	番号/挿図	法　量（cm）	口　頸　部	体　底　部	色　調	胎　土	出土遺構	備　考
鉢A3	27／38	器　高　7.2 口　径　11.8	・口縁端部尖り気味におさめる。	・体部外上方に拡がる。 ・底部尖り気味の丸底。 ・体部外面3条／cmの右上がりの平行タタキ。 ・体部内面7条／cmのナナメハケ。 ・内底面クモの巣状のハケ。 ・外底面ナデ。	淡灰褐色	クサリ礫 石英 長石 微砂粒 ごく微量の金雲母	井戸1	
鉢A3	28／38	器　高　11.4 口　径　15.2	・口縁端部尖り気味におさめる。	・体部内彎気味に立ち上がる。 ・尖り気味の底部。 ・体部外面2条／cmの幅広の右上がりのタタキ。 ・体部外面下位タタキのちナデ。 ・体部内面上半12条／2cm幅単位のナナメハケ。 ・体部内面下半6条／cmのタテハケ。 ・底部に1孔を施す。	褐灰色	結晶片岩 石英 長石 ごく微量の金雲母 微量のクサリ礫	井戸1	体部外面下位から上位にかけて黒斑
鉢B	29／38	器　高　6.8 口　径　21.7	・口縁端部僅かに肥厚して内方に拡張。 ・上部に平坦面を形成。 ・口縁部内外面ヨコナデ。	・体部内彎気味に立ち上がる。 ・丸底。 ・体部外面7㎜～10㎜幅単位のヨコヘラケズリ。 ・体部内面2～3㎜幅程度の入念なタテヘラミガキ。	赤褐色	結晶片岩 石英 クサリ礫 長石 ごく微量の金雲母	井戸1	
脚部	30／38	底　径　3.3		・体部外面3条／cmの水平タタキ。 ・脚部外面ユビオサエ痕。 ・脚端部尖り気味におさめる。	外面 淡赤褐色 内面 淡灰褐色	石英 長石 ごく微量のクサリ礫 粗砂粒	井戸1	製塩土器

高　杯	31／38	口　径　23.0	・僅かに屈曲して大きく外反。 ・口縁端部僅かに丸みを持っておさめる。 ・口縁部内面２㎜幅単位のタテヘラミガキ。 ・受部外面ヨコナデのち２㎜幅単位のタテヘラミガキ。		淡茶褐色	結晶片岩 石英 ごく微量の金雲母 微量のクサリ礫	井戸１	
広口壺	１／40	器　高　52.2 口　径　19.9 体部最大径43.2 底　径　8.4	・頸部僅かに内彎気味に立ち上がり，口縁部大きく外反。 ・口縁端部大きく上下に拡張。 ・２条の擬凹線を施す。 ・径１cm幅程度の竹管文を２個１組単位で巡らす。 ・頸部12条／1.9cm幅単位のタテハケ。 ・頸部内面ナデ。 ・口縁部内外面ナデ。 ・口頸部接合痕。	・体部中位に最大径。 ・突出しない平底。 ・体部外面上位，中位８条／1.8cm幅単位のタテハケ。 ・体部外面中位９条／1.4cm幅単位のナナメハケのちナデ。 ・体部外面下半４～６㎜幅単位の入念なタテヘラミガキ。 ・体部内面上半上位にユビオサエ。 ・体部内面下半，幅広のタテヘラケズリ。	赤褐色	結晶片岩 石英 クサリ礫 微量の金雲母 砂粒	溝１	体部外面下位と上位に黒斑
広口壺	１／44	口　径　11.3	・口縁部外反。 ・口縁端部を下方に拡張。 ・口縁端部に非常に弱い擬凹線。 ・口縁部外面ハケのち１㎜幅単位のタテヘラミガキ。 ・口縁部外面上半ヨコナデ。 ・口縁部内面ヨコハケのちナデ。		暗褐色	結晶片岩 石英 クサリ礫 ごく微量の金雲母	溝22	
広口壺	２／44	口　径　18.4	・頸部内傾して立ち上がり，口縁部外反。 ・口縁端部僅かに上下に拡張。 ・１条の幅広の擬凹線。	・体部外面タテハケのち２㎜幅単位のタテヘラミガキ。 ・頸部との境にヘラ状工具による刺突文。	淡褐色	結晶片岩 石英 ごく微量の金雲母	溝22	口縁部内面に黒斑

器　種	番号/挿図	法　量（cm）	口　頸　部	体　底　部	色　調	胎　土	出土遺構	備　考
			・頸部外面10条／２cm幅単位のタテハケのち頸部下半にナデ状の凹線を巡らす。 ・頸部内面上位ユビオサエののちヨコナデ。 ・頸部内面体部との境ヨコハケ。 ・口縁部外面10条／２cm幅単位のタテハケ。 ・端部ヨコナデ。 ・口縁部内面ヨコハケ。 ・端部ヨコナデ。	・体部内面頸部との境ユビオサエ。		ごく微量のクサリ礫		
壺	３／44	器　高　16.8 口　径　9.9 体部最大径14.5	・頸部短かく直立。 ・口縁部外反。 ・口縁端部を僅かに上下に拡張。 ・頸部外面タテハケのちヨコナデ。 ・頸部内面10条／cmのヨコハケのち部分的にヨコナデ。 ・口縁部内外面ヨコナデ。	・体部中位に最大径。 ・平底に近い丸底。 ・体部外面上位10条／cm単位のヨコハケ。 ・体部外面中位６条／cmのタテハケ。 ・体部外面下位３条／cmの幅広の右下がりのタタキののち６条／cmのタテハケ。 ・体部内面１cm幅程度のタテヘラケズリ。 ・頸部との境，ユビオサエののちタテヘラケズリ。	内面 淡灰黒色 外面 淡赤褐色	石英 クサリ礫 微量の金雲母 微砂粒 チャート	溝22	
長頸壺	４／44	体部最大径17.2		・やや丸みを帯びた算盤形の体部。 ・体部外面上半15条／1.4cm幅単位のタテハケのち部分的に２～３mm幅単位のタテヘラミガキ。	暗茶褐色	石英 長石 多量の金雲母 角閃石	溝22	讃岐系

				・上端部ヨコナデ。 ・体部外面下半タテハケのち2㎜幅単位の入念なタテヘラミガキ。 ・体部外面最大径部分に2㎜幅程度の入念なヨコヘラミガキ。 ・体部内面上半ユビオサエ。 ・体部内面下半8～10㎜幅単位のヨコヘラケズリ。				
無頸壺	5／44	器高 11.2 口径 8.6 体部最大径13.1	・口縁部ユビオサエにより短かくつまみ上げる。	・球形に近い体部。 ・体部中位に最大径。 ・ドーナツ底。 ・体部外面上半タテハケ。 ・体部外面下半粗いナデ状のケズリ。 ・体部内面ナデ。 ・粘土紐痕。	淡褐灰色	結晶片岩 石英 長石 微量のクサリ礫	溝22	体部外面上半から口縁部にかけて黒斑
無頸壺	6／44	口径 10.0 体部最大径19.1	・口縁部ユビオサエにより短かくつまみ上げる。 ・口縁部外面ユビオサエ。 ・口縁部内面ヨコナデ。	・体部外面ヨコ方向へのヘラケズリ。 ・上端部タタキの痕跡。 ・体部中位にタテハケの痕跡。 ・体部内面上位ヨコナデ。 ・体部内面中位6～8㎜幅単位のヨコヘラケズリ。 ・粘土紐痕。	淡褐色	結晶片岩 石英 クサリ礫 ごく微量の金雲母	溝22	体部外面中位から口縁部にかけて黒斑
甕	7／44	口径 15.1	・口縁部外反し，上端部は僅かに上方に尖る。 ・口縁部内面強いナデによる2条の凹部の形成。 ・体部との境ナデによる鋭い稜。 ・内外面ナデ。	・肩の張る体部。 ・体部外面23条／1.5cm幅単位の細かいタテハケ。 ・口縁部との境ヨコナデ。 ・体部内面ユビオサエ痕。	暗茶褐色	石英 長石 多量の金雲母 角閃石	溝22	讃岐系

器　種	番号/挿図	法　量（cm）	口　頸　部	体　底　部	色　調	胎　土	出土遺構	備　考
甕	8／44	口　径　12.8 体部最大径23.3	・口縁部外反。 ・端部を僅かに上下に拡張。	・体部外面上半11条／1.5cm幅単位のタテハケ。 ・体部外面下半タテハケあるいはナデで部分的にタテヘラミガキ。 ・体部内面上位ユビオサエ。 ・体部内面中位から下位にかけて7～10cm幅単位のヨコヘラケズリ。 ・口縁部との境，ヨコハケのちヨコナデ。	暗褐色	角閃石 チャート 金雲母 石英 長石	溝22	讃岐系
甕	9／44	口　径　15.0 体部最大径22.2	・口縁部外反。 ・端部を上方につまみ上げる。 ・内外面ヨコナデ。	・体部中位に最大径。 ・体部外面上位に8条／cmのナナメハケ。 ・体部外面中位から下位にかけて6条／cmのナナメハケ。 ・体部内面上半ユビオサエ。 ・体部内面下半 1.2cm幅単位のタテヘラケズリ。 ・口縁部との境ヨコナデ。	淡赤褐色	結晶片岩 石英 ごく微量の金雲母 クサリ礫	溝22	
鉢	10／44	口　径　17.9	・体部上端部で内傾気味に屈曲し外反。 ・端部を尖り気味におさめる。 ・口縁部外面ヨコナデ。 ・口縁部内面ヨコハケ。	・体部内彎気味に立ち上がり，上部で屈曲。 ・体部外面口縁部との屈曲部ヨコナデ。 ・体部外面7mm幅程度のヨコヘラケズリ。 ・体部内面13条／cmのナナメハケのち部分的にタテヘラミガキ。	明褐灰色	結晶片岩 石英 長石 微量のクサリ礫	溝22	
鉢	11／44	器　高　15.0 口　径　33.0	・口縁部外反 ・端部方形状におさめる。	・体部内彎気味に立ち上がる。 ・丸底。	淡褐灰色	結晶片岩 石英	溝22	

			・口縁部外面6条／cmのタテハケのちヨコナデ。 ・口縁部内面ヨコハケのちナデ。	・体部外面上位6条／cmのタテハケ。 ・体部外面中位3条／cmの水平タタキののちタテハケ。 ・体部外面下位 1.1cm幅程度のナデ状のタテヘラケズリ，部分的にタタキの痕跡。 ・体部内面上位9条／2cm幅単位のヨコハケ。 ・体部内面中位から下位にかけて4～6mm幅単位のタテヘラケズリ。 ・底部内外面ナデ。		長石 クサリ礫 微量の金雲母 黒色鉱物		
鉢	12／45	器　高　9.3 口　径　11.0	・口縁部外反。 ・端部を上方に僅かに拡張。 ・口縁部内外面ヨコナデ。	・球形に近い体部。 ・丸底。 ・体部内彎気味に立ち上がる。 ・体部外面上半12条／cmのタテハケ。 ・体部外面上位上半タテハケのちヨコナデ。 ・体部外面中位9条／cm単位のナナメハケ。 ・体部外面下半9条／1.3cm幅単位のタテハケ。 ・体部内面9mm幅程度のヨコヘラケズリ。	赤褐色	微量の結晶片岩 石英 長石 ごく微量の金雲母 微量のクサリ礫 微量の黒色鉱物	溝22	体部外面中位に黒斑
鉢	13／45	器　高　6.3 底　径　2.8		・内彎する体部。 ・突出しない平底。 ・体部外面上位9条／cmのタテハケ。	灰黒色	結晶片岩 石英 ごく微量の金雲母	溝22	

器　種	番号/挿図	法　量（cm）	口　頸　部	体　底　部	色　調	胎　土	出土遺構	備　考
				・口縁部との境ヨコナデ。 ・体部外面中位10条／９㎜幅単位のタテハケ。 ・体部外面下位ナデ。 ・体部内面ナデ。		黒色鉱物		
鉢	14／45	器　高　5.5 口　径　14.4 底　径　3.5	・端部尖り気味におさめる。	・内彎気味に立ち上がる。 ・僅かに突出した平底。 ・体部外面４条／cmの右上がりのタタキ。 ・底部との境にユビオサエ。 ・体部内面10条／1.4cm幅単位のナナメハケ。 ・外底面ナデ。	乳灰色	石英 クサリ礫 微量の金雲母	溝22	体部外面黒斑
甕	15／45			・丸底。 ・体部外面３条／cmの右上がりのタタキ。 ・体部内面ヨコハケのち，タテ方向の板ナデ。	暗灰色	石英 長石 多量の微砂粒 黒色鉱物	溝22	体部外面煤の付着 内面全面にわたり，朱の付着
高　杯	16／45	口　径　17.3	・口縁部屈曲して外反。 ・口縁端部尖り気味におさめる。 ・内外面ヨコナデ。	・受部外面２㎜幅単位の格子状の入念なヨコヘラミガキ。 ・受部内面２㎜幅単位の四方向への入念なヘラミガキ。 ・口縁部との境強いナデ。	茶褐色	多量の金雲母 角閃石 石英 クサリ礫	溝22	讃岐系 受部に黒斑
高　杯	17／45	口　径　13.9	・口縁部鋭く屈曲して外反。 ・口縁端部尖り気味におさめる。 ・口縁部内外面ヨコナデ。	・受部外面３㎜幅程度の格子状の入念なヨコヘラミガキ。 ・受部内面２㎜幅程度の入念なヘラミガキ。 ・脚部２㎜幅程度の入念なタテヘ	暗茶褐色	角閃石 多量の金雲母 石英 クサリ礫	溝22	讃岐系

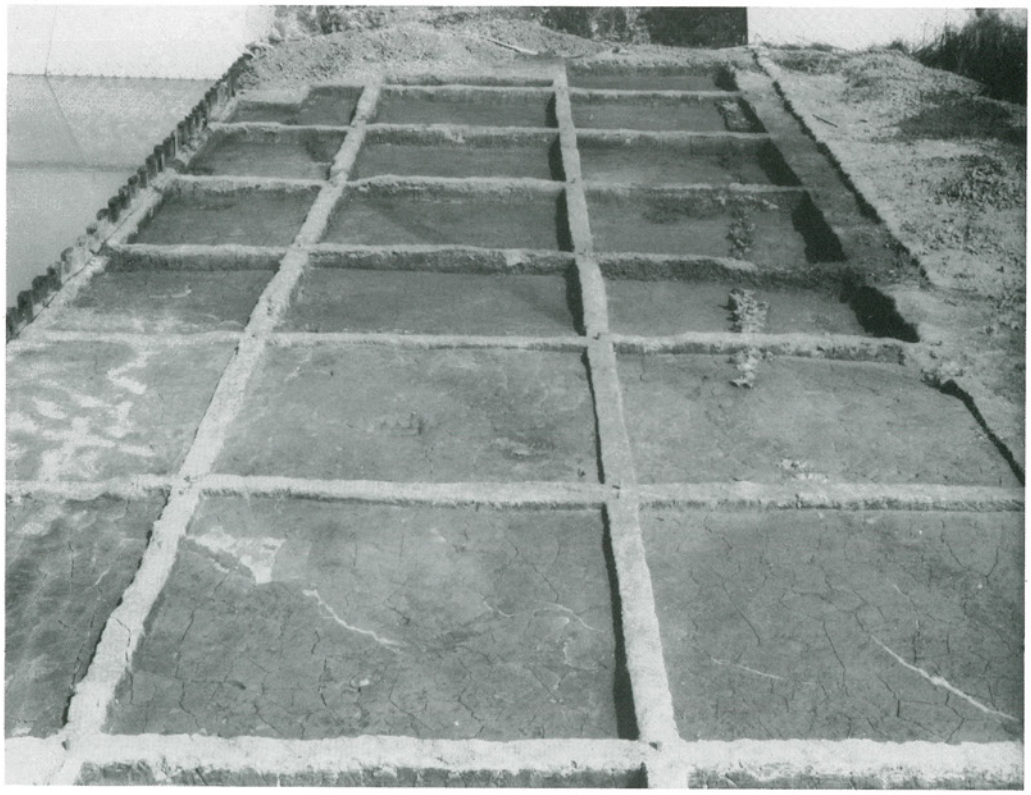
				ラミガキをとどめる。 ・脚部円板充塡。				
高　杯	18／45	器　高　11.2 口　径　16.4 脚　径　9.8	・脚部から外上方に立ち上がり，端部を下方向に拡張。 ・１条の擬凹線。	・脚部外下方に開き脚端部を拡張。 ・脚端部丸みを持っておさめる。 ・脚部内面絞り目。 ・３孔を施す。	赤 褐 色	砂粒（多） 石英 長石 ごく微量の金雲母	溝22	
甕	１／49	口　径　14.0 体部最大径21.3	・口縁部外反。 ・口縁上端部を鋭くつまみ上げる。 ・１条の擬凹線。 ・口縁部内外面ヨコナデ。	・体部中位に最大径。 ・球形に近い体部。 ・丸底か？。 ・体部外面上位 10条／1.3cm幅単位のタテハケ。 ・体部外面中位から下位にかけて10条／1.5cm幅単位のタテハケ。 ・体部外面中位に３条／cmの右下がりのタタキの痕跡をとどめる。 ・体部内面上位ユビオサエ。 ・体部内面中位タテヘラケズリ。 ・体部内面下位１cm幅単位のタテヘラケズリ。	暗赤褐色	微量の結晶片岩 クサリ礫 微量の石英 ごく微量の金雲母	土坑26	体部外面下半から中位にかけて煤の付着
甕	２／49	口　径　14.6	・口縁部外反。 ・口縁上端部をつまみ上げる。 ・口縁部外面ヨコナデ。	・体部外面上端部４条／cm幅の右下がりのタタキのち12条／1.5cm幅単位のタテハケ。 ・体部外面上半９条／cmのナナメハケ。 ・体部内面上半ユビオサエ。	淡 褐 色	結晶片岩 石英 長石 微量の金雲母	土坑26	体部外面中位煤の付着
鉢	３／49	器　高　6.3 口　径　9.0 底　径　3.2	・口縁端部尖り気味におさめる。	・体部内彎気味に立ち上がる。 ・突出しない平底。 ・体部外面３条／cm幅の幅広の右	淡 褐 色	微粒の結晶片岩 石英	土坑26	外底面から体部下位にかけて黒斑

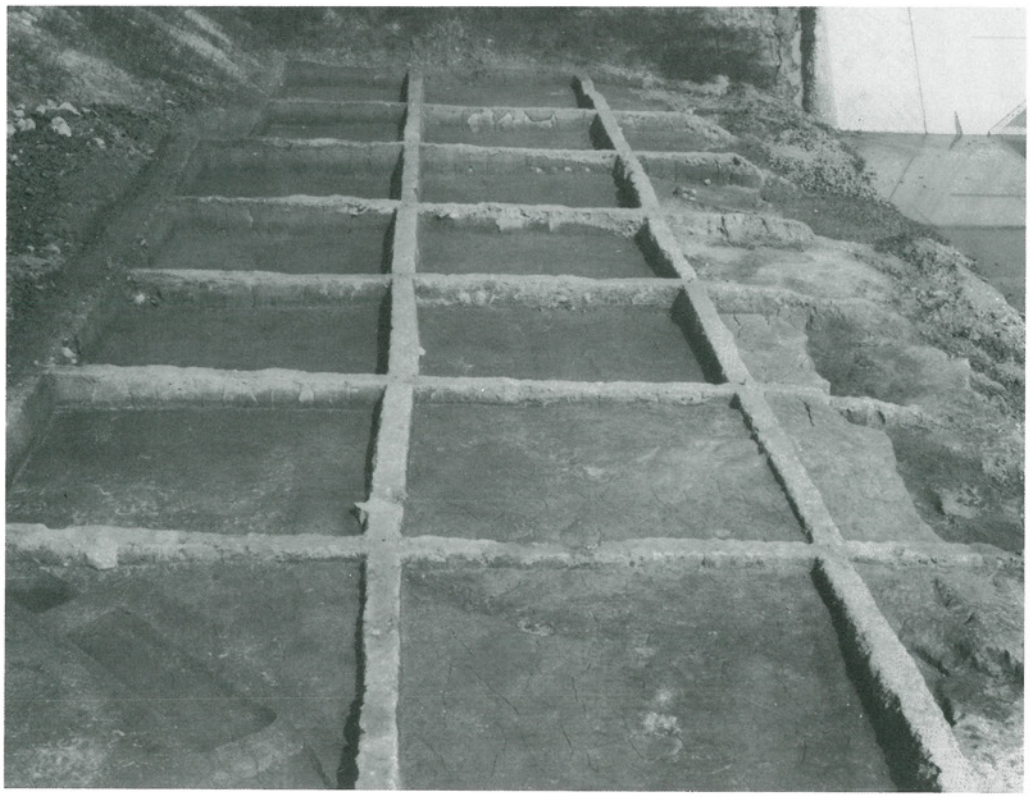
器　種	番号/挿図	法　量（cm）	口　頸　部	体　底　部	色　調	胎　土	出土遺構	備　考
				上がりのタタキののちナデ。 ・体部外面底部との境4㎜幅単位のヘラケズリ。 ・体部内面ナデ。 ・内底面ケズリの痕跡をとどめる。 ・外底面ケズリ。		長石 ごく微量の金雲母 ごく微量の黒色鉱物		
鉢	4／49	器　高 （復元高）　8.6 口　径　22.5	・口縁端部は僅かに肥厚し，上部に平坦面を形成，凹線状に窪む。 ・口縁部外面ヨコナデ。 ・口縁部内面ハケのちヨコナデ。	・体部僅かに内彎気味に立ち上がる。 ・尖り気味の丸底か？。 ・体部外面中位1～1.3cm幅単位のヨコヘラケズリ。 ・体部外面下位から外底面にかけて1cm幅程度のタテヘラケズリ。 ・体部内面上位から下位にかけて7条／8㎜幅単位のナナメハケのちナデ。 ・体部内面上位から底面にかけて2㎜幅単位の方射状のタテヘラミガキ。	淡 褐 色	微粒の結晶片岩 石英 長石 微量の黒色鉱物 ごく微量の金雲母	土坑27	底部から体部外面下位にかけて黒斑
甕A₁	5／49	器　高　15.5 口　径　9.9 体部最大径15.1	・口縁部外反。 ・口縁部上端をつまみ上げる。 ・口縁部内外面ナデ。	・体部中位に最大径。 ・丸底。 ・体部外面9条／cmのタテハケの痕跡をとどめる。 ・体部内面ユビオサエののちナデ状のケズリ。	明赤褐色	結晶片岩 微量の金雲母 石英 微量のクサリ礫	土坑29	体部下半に黒斑
鉢	6／49	器　高　4.8 口　径　9.2 底　径　2.4	・口縁端部を尖り気味におさめる。 ・口縁部外面ヨコナデ。	・体部内彎気味に立ち上がる。 ・突出しない平底。 ・体部外面3条／cmの右上がりのタタキ。 ・体部内面上半11条／1.1cm幅単位のヨコハケ。 ・体部内面下半6条／9cm幅単位	淡灰褐色	石英 微量の金雲母 微量の黒色鉱物	土坑29	底部から口縁部にかけて黒斑

				のヨコハケ。 ・外底面ナデ。				
鉢	7／49	器　高　6.5 口　径　9.2 底　径　2.2	・口縁端部尖り気味におさめる。 ・口縁部外面ヨコナデ。	・体部内彎気味に立ち上がる。 ・突出しない平底。 ・体部外面３条／cmの右上がりのタタキ。 ・体部外面下位６mm幅単位のタテヘラケズリ。 ・体部内面６条／cmのヨコハケ。 ・外底面ナデ。	淡灰褐色	石英 微量の黒色鉱物 微量のクサリ礫	土坑29	体部内面焦げ付き痕をとどめる。
鉢	8／49	器　高　6.3 口　径　19.2	・口縁端部方形状におさめ平坦面を形成，凹線状に窪む。 ・口縁部内外面ヨコナデ。	・体部内彎気味に立ち上がる。 ・底部丸底。 ・体部外面中位から外底面にかけて１cm幅単位のヨコヘラケズリ。 ・体部内面ヨコナデ。	淡赤褐色	結晶片岩 石英 ごく微量の金雲母	土坑29	
甕	9／49	器　高　26.0 口　径　18.0 体部最大径24.5 底　径　4.9	・口縁部鋭く外反。 ・口縁部内面ナデによる２条の凹部の形成。 ・口縁端部１条の擬凹線。 ・内外面ナデ。	・体部中位よりやや上半に最大径。 ・やや肩の張る体部。 ・突出しない平底。 ・体部外面上位11条／1.5cm幅単位のタテハケ。 ・口縁部との境ナデによる２条の凹部を形成。 ・体部外面，中位11条／1.2cm幅単位のタテハケ。 ・体部外面下位３mm幅程度の入念なタテヘラミガキ。 ・体部内面上位ユビオサエ。 ・口縁部との境ヨコナデ。 ・体部内面中位 1.1cm幅単位のヨコヘラケズリ。 ・体部内面下位 1.4cm幅程度のタテヘラケズリ。 ・外底面条線状のミガキ。	暗茶褐色	角閃石 多量の金雲母 石英	土坑33	讃岐系 体部外面頸部から底部にかけて煤の付着 体部内面下位焦げ付き痕

図　　版

調 査 区 全 景

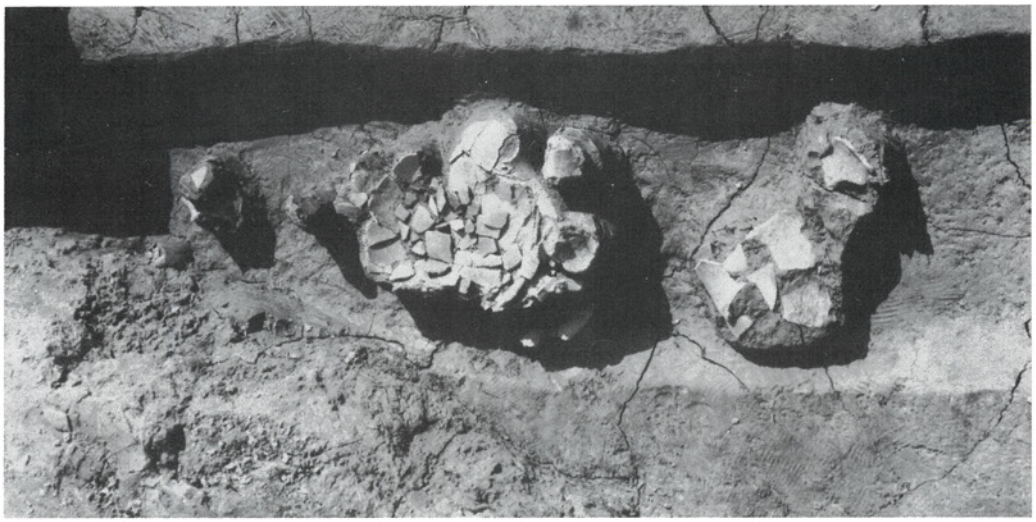


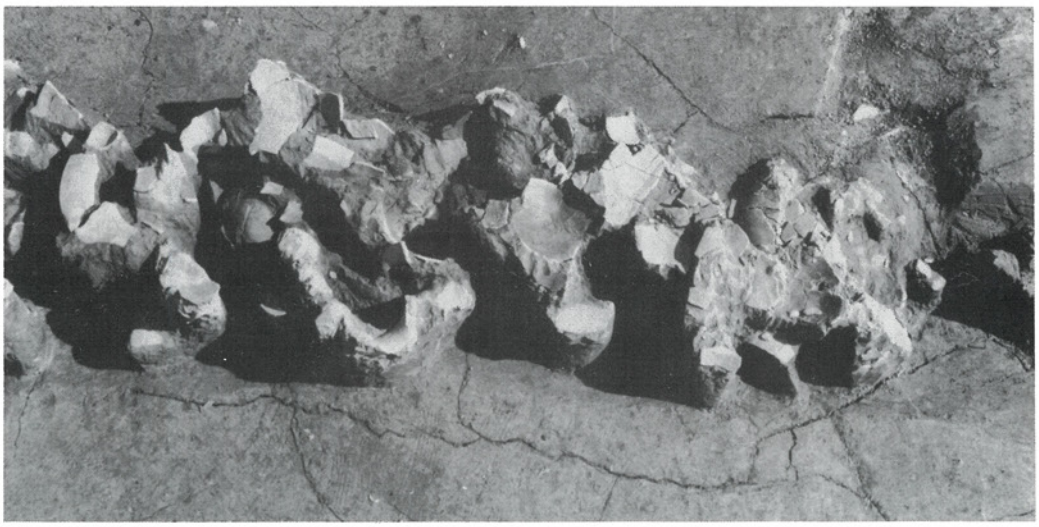


遺構面検出状態（上 東側調査区・下 西側調査区　南より）

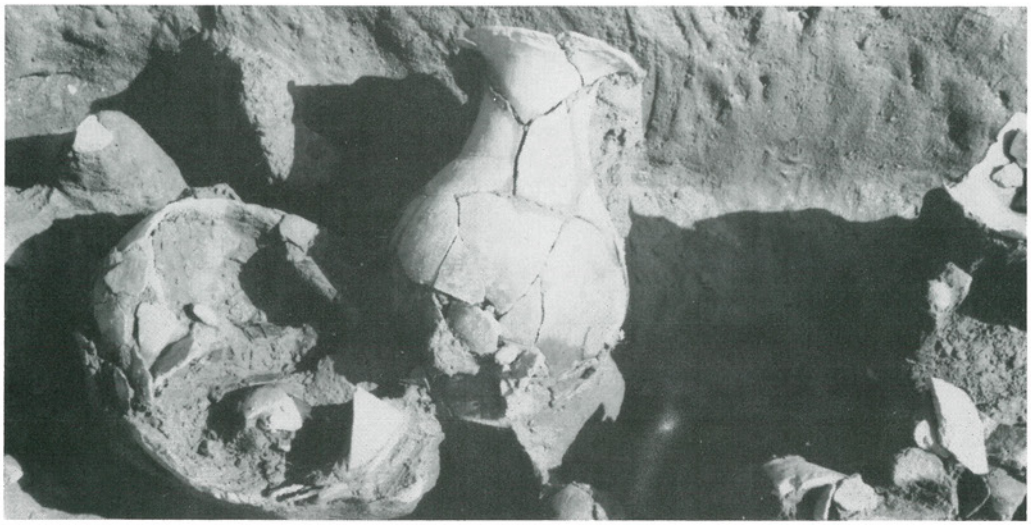
東側調査区（4C4グリッド～4J6グリッド）全景（南より）

西側調査区（4B13グリッド～4K15グリッド）全景・溝16全景（南より）



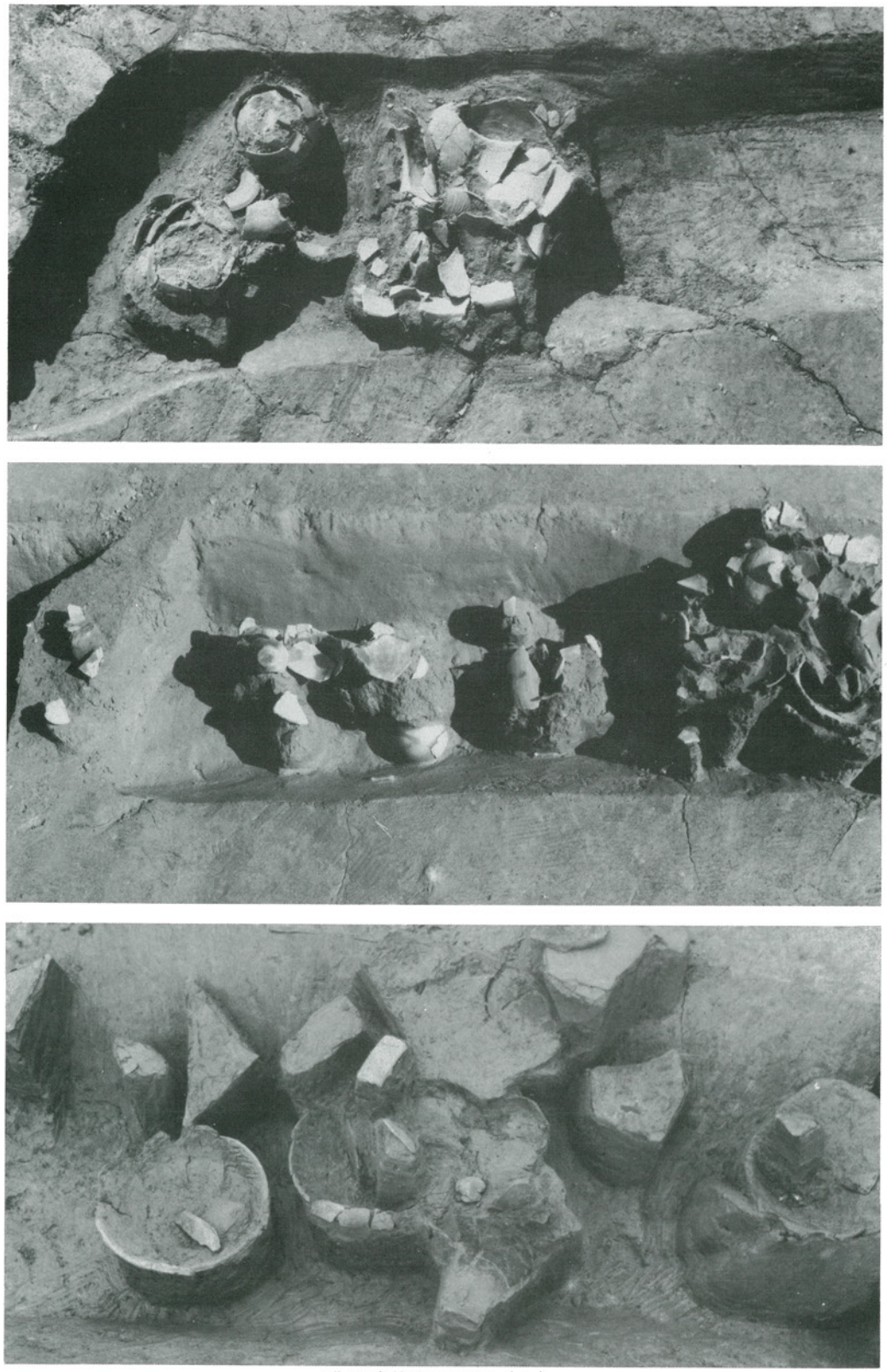


溝15遺物出土状況（１）

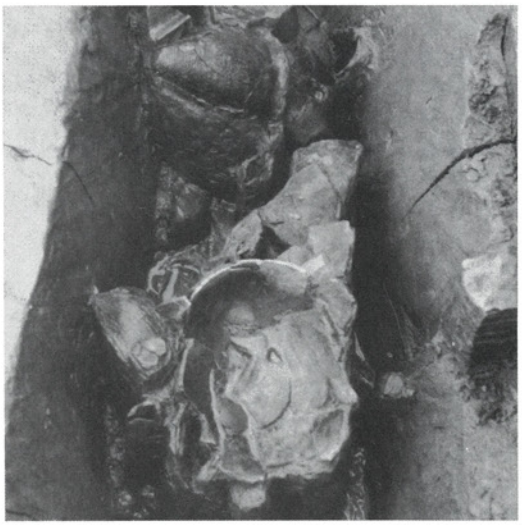


溝15遺物出土状況（２）

溝15遺物出土状況（３）



溝15遺物出土状況（４）

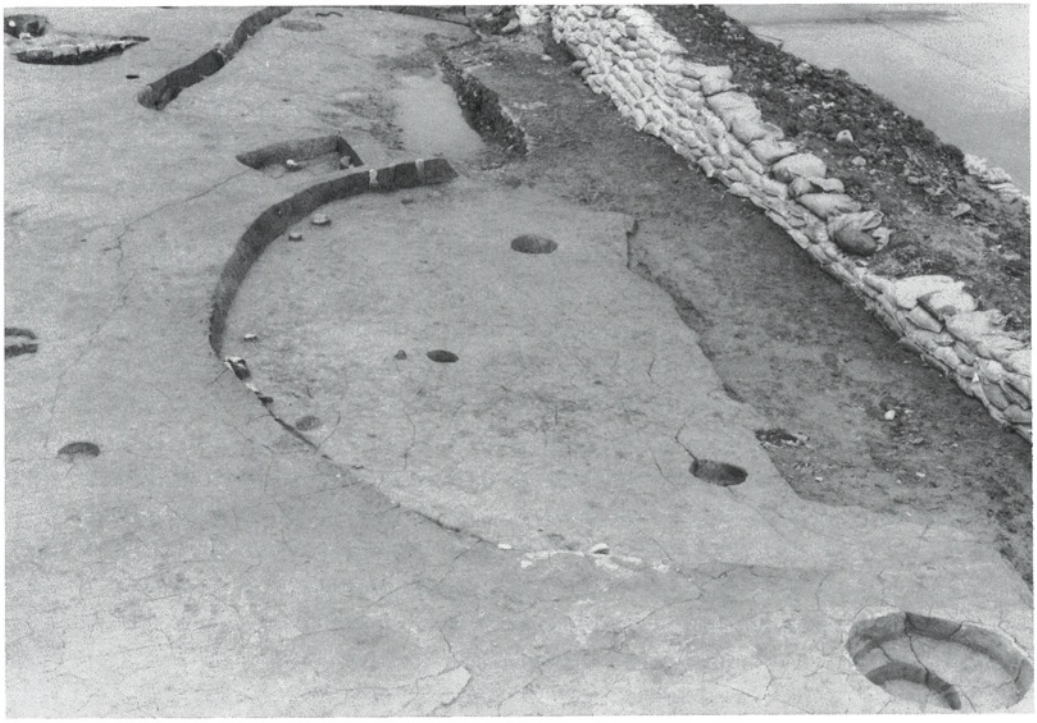


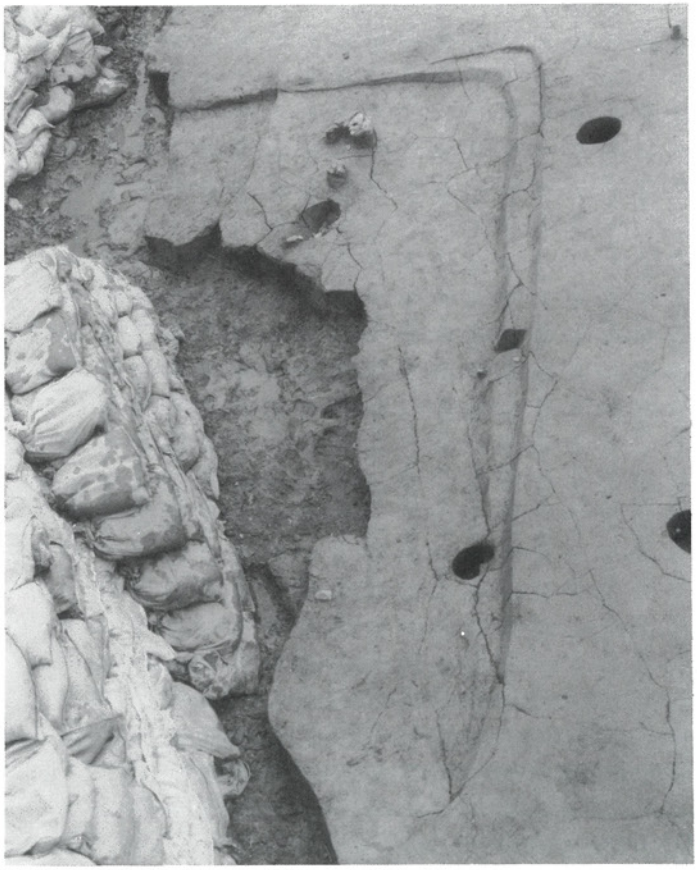
溝17遺物出土状況

溝1遺物出土状況

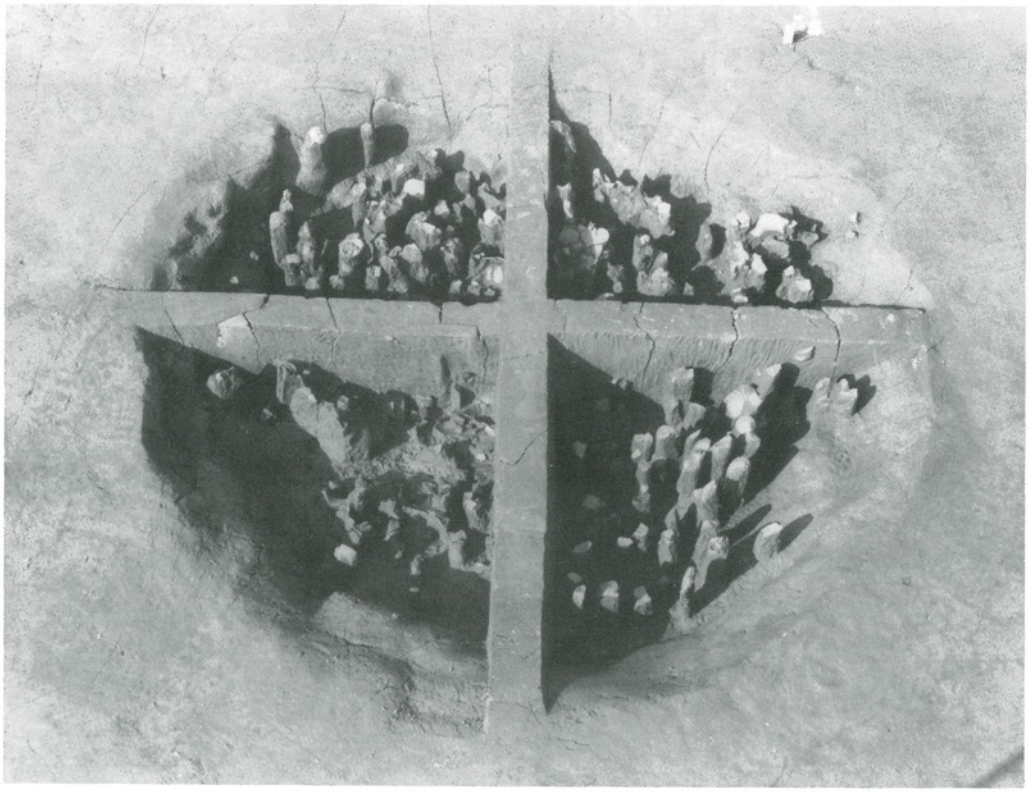
9号住居址・12号住居址全景（上 東より・下 南より）

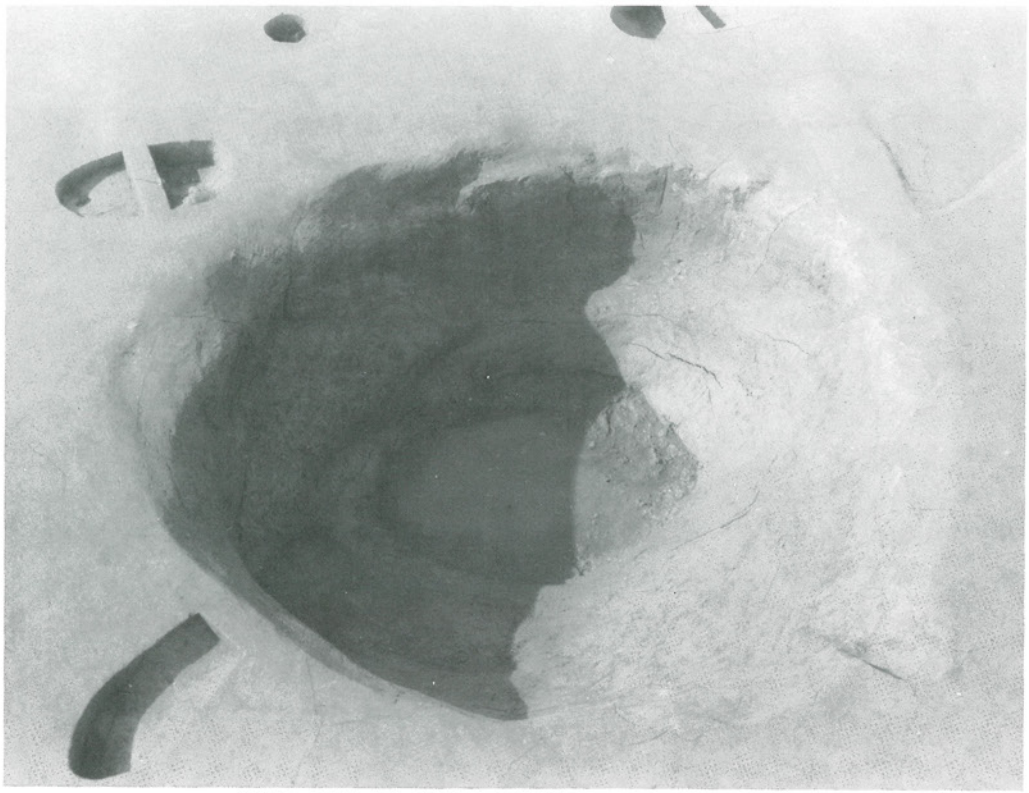
土坑34全景（上 遺物出土状況・下 完掘状態）





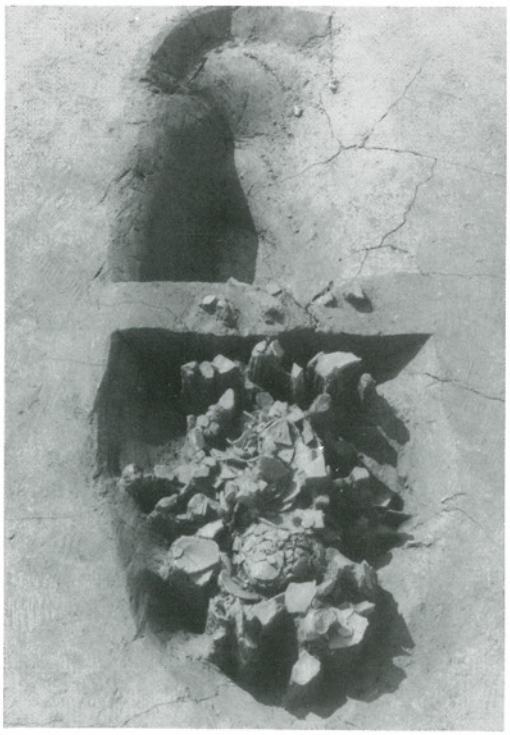
8号住居址・10号住居址全景（上 南より・下 北より）

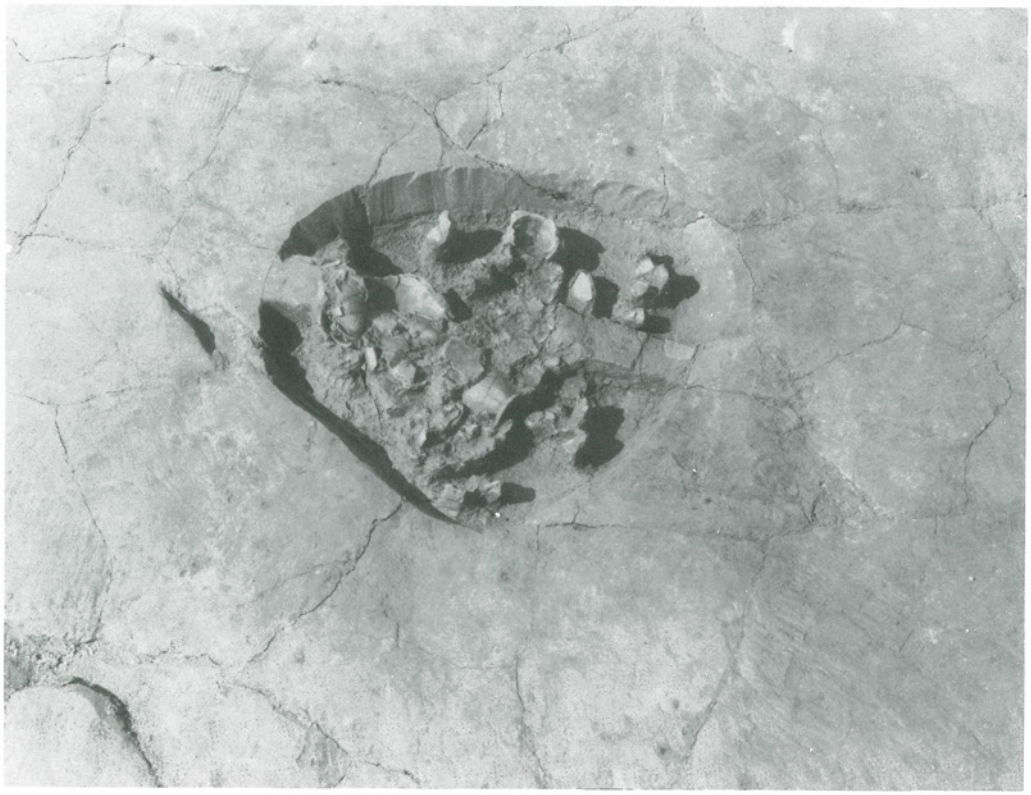




井戸１全景（上 遺物出土状況・下 完掘状態）

溝19・溝1全景（左南より・右西より）





土坑29・土坑26全景

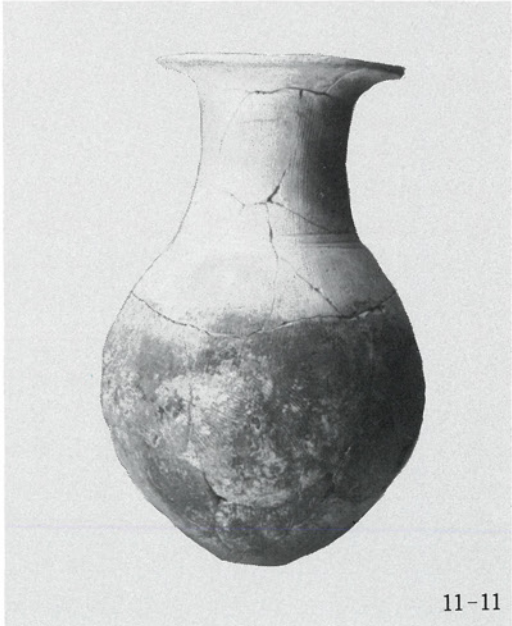
10-4

10-6

10-7

10-8

10-9


11-11

出 土 遺 物 （1）

11-12

12-15

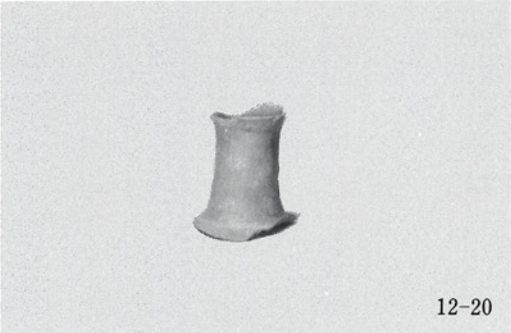
11-14

11-13

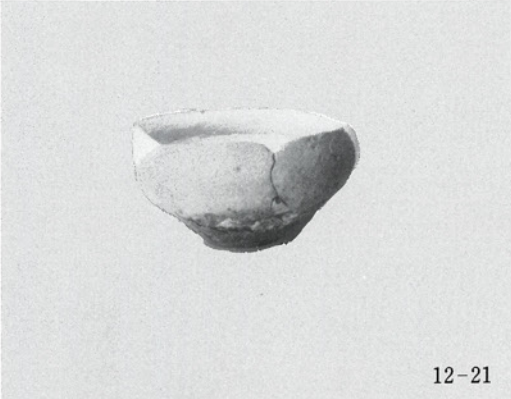
12-18

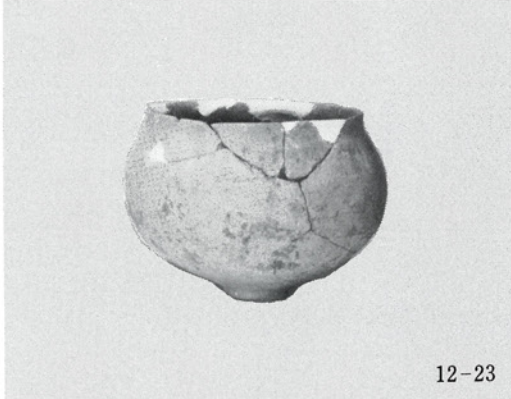
12-19

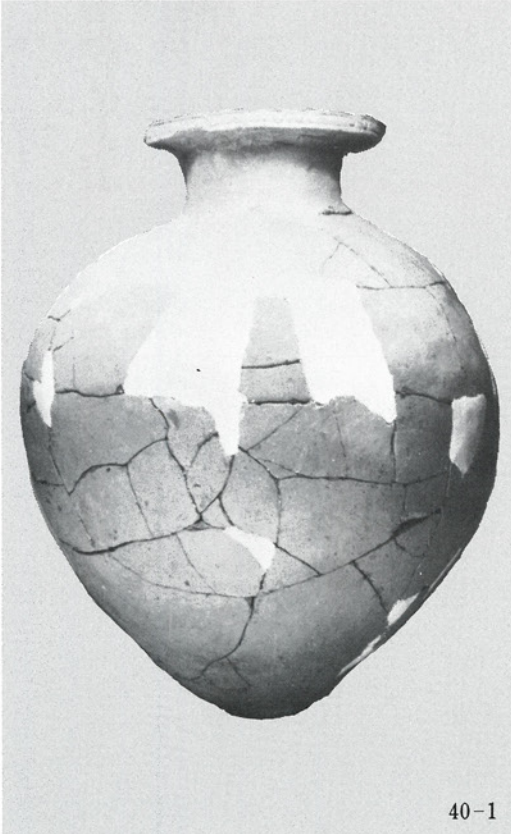
出 土 遺 物 （2）

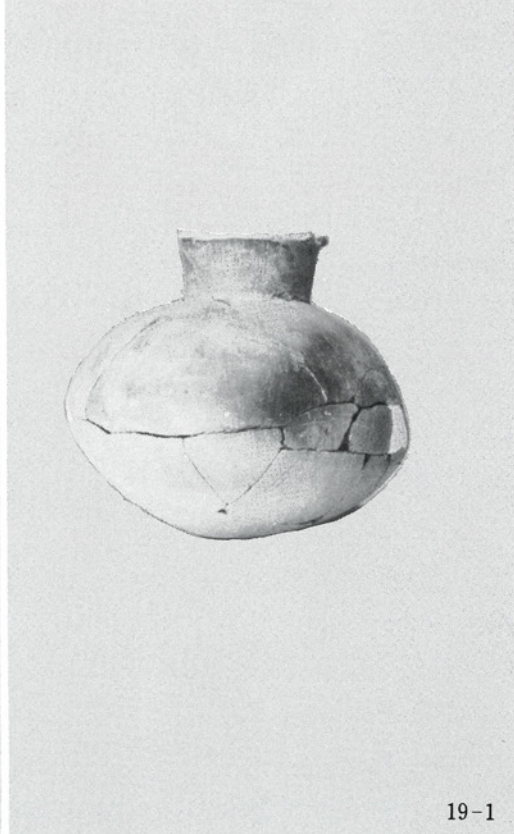

12-20

12-22


12-21


12-23

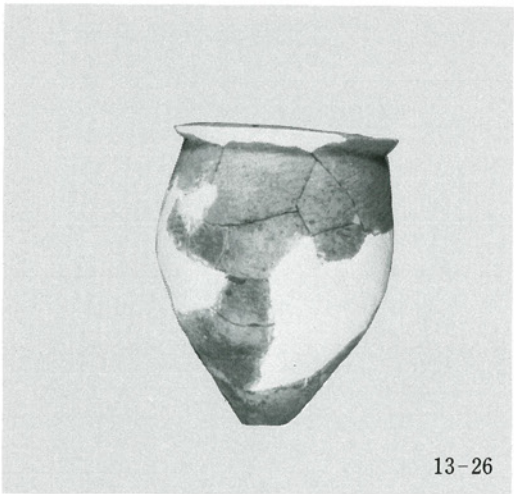

40-1

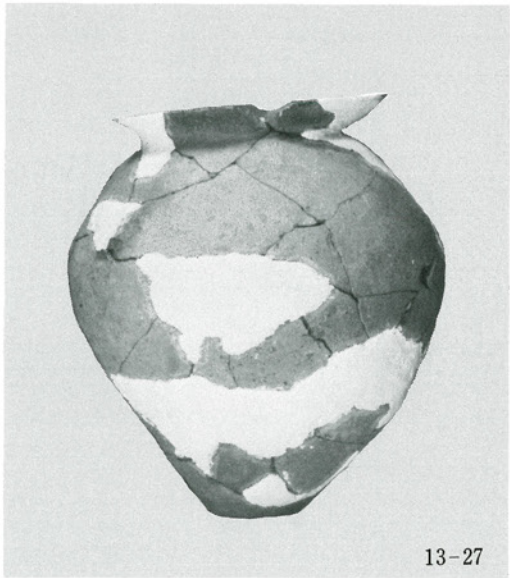

19-1

出 土 遺 物 （3）

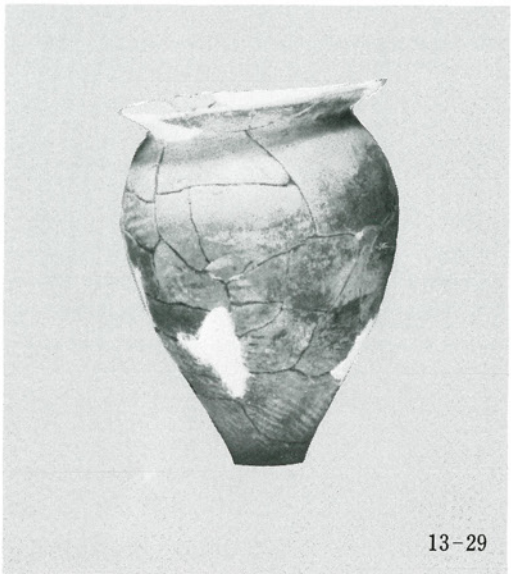
12-24

12-25


13-26


13-27

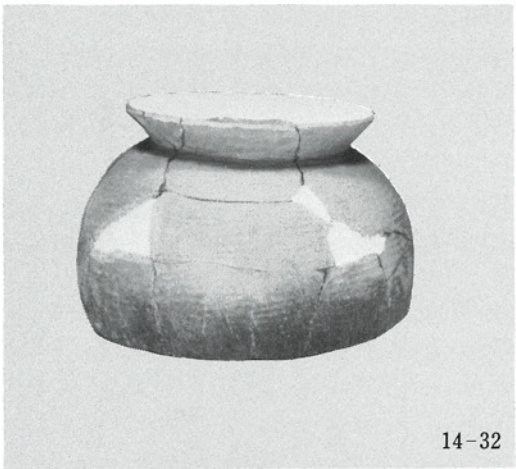
13-28


13-29

出 土 遺 物 (4)

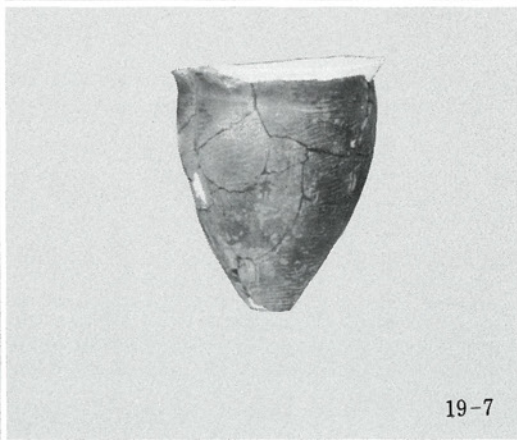
13-30

13-31


14-32

14-33

14-34


19-7

出 土 遺 物 （5）

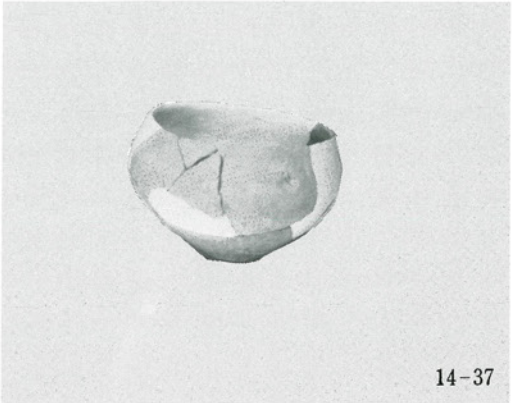
19-2

19-8

19-9

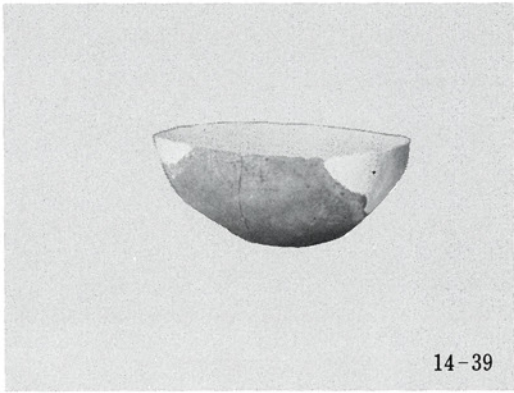
19-10

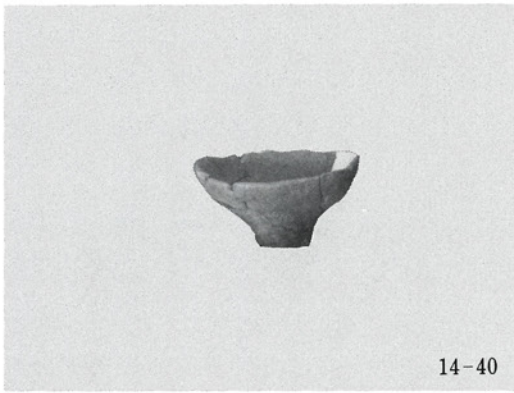
14-36

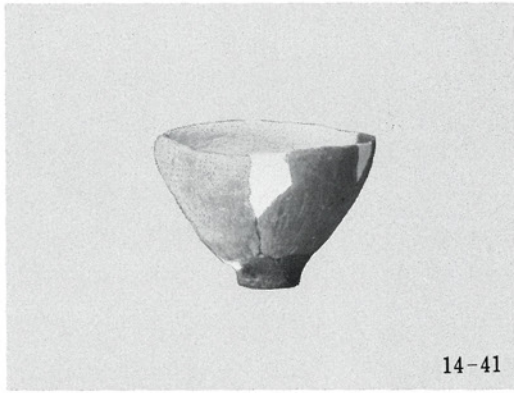

14-37

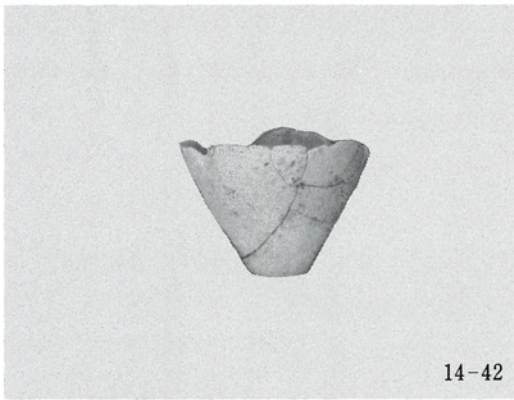
出 土 遺 物 （6）

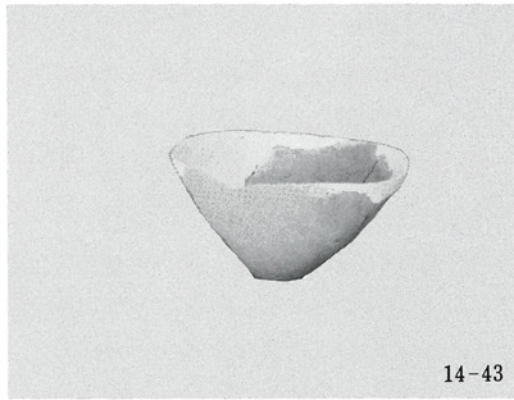
14-38

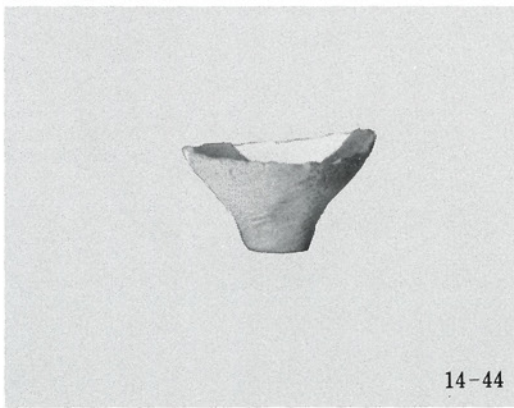

14-39

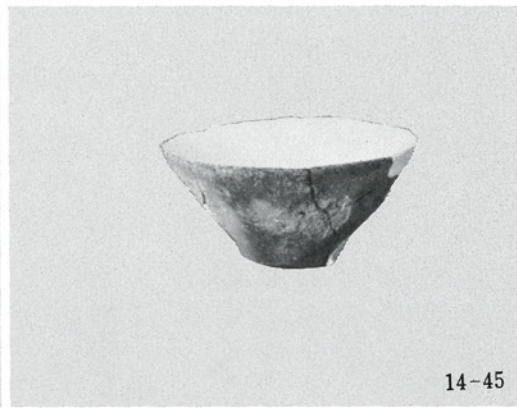

14-40


14-41

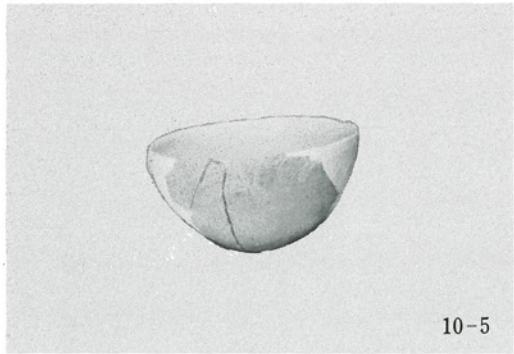

14-42

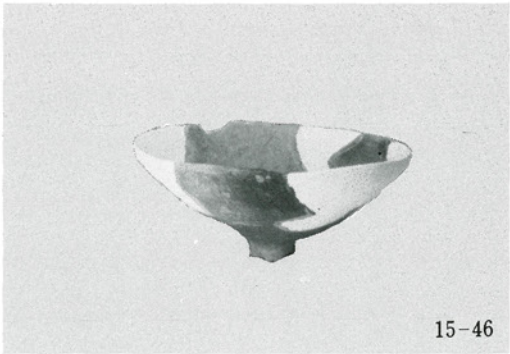

14-43

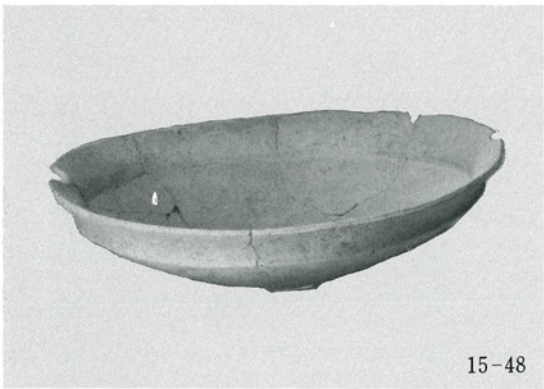

14-44

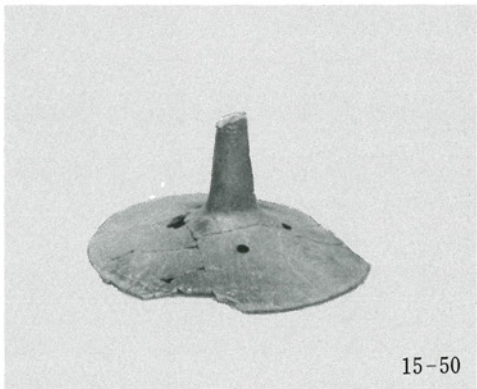

14-45

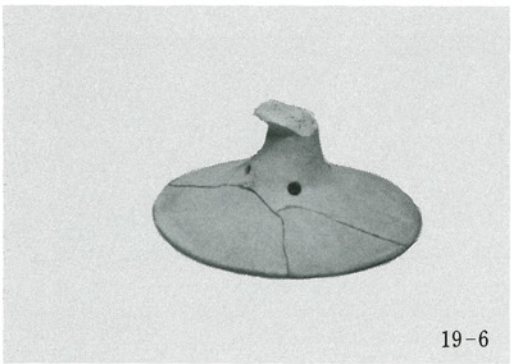
出 土 遺 物 (7)


10-5


15-46


15-48


15-50

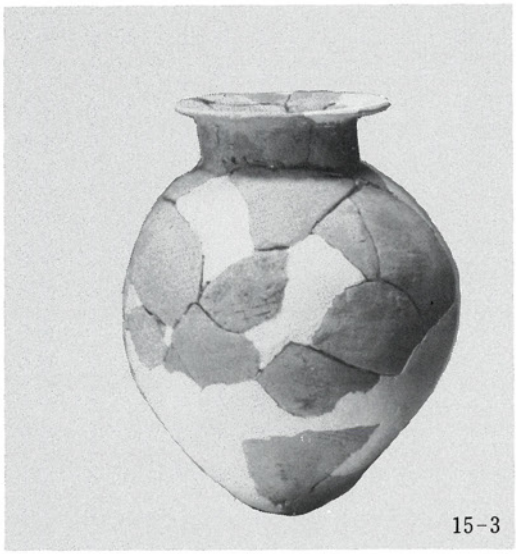

19-6

17-2

17-1

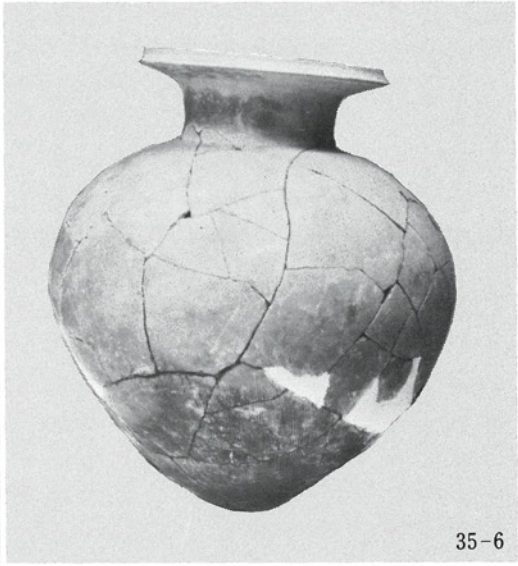
17-3

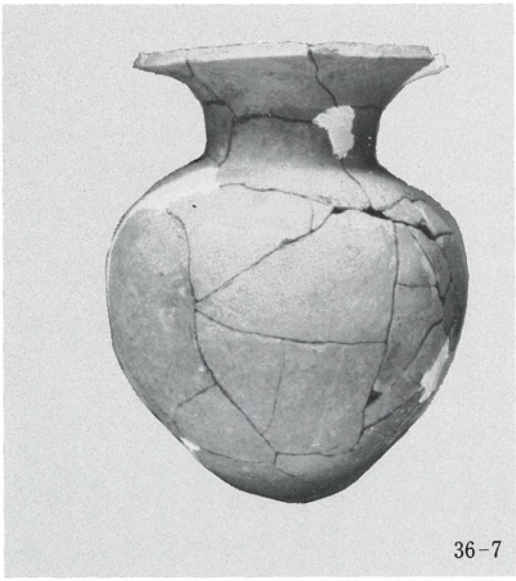
出 土 遺 物 （8）

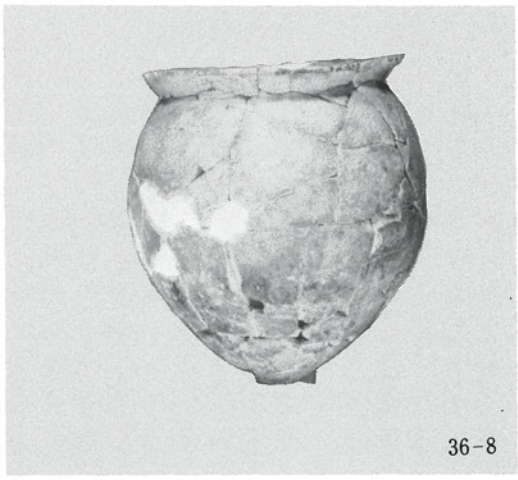

15-3

35-5

35-4


35-6

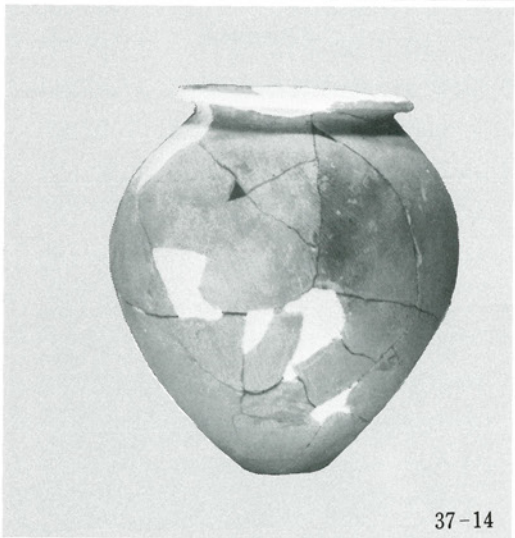

36-7

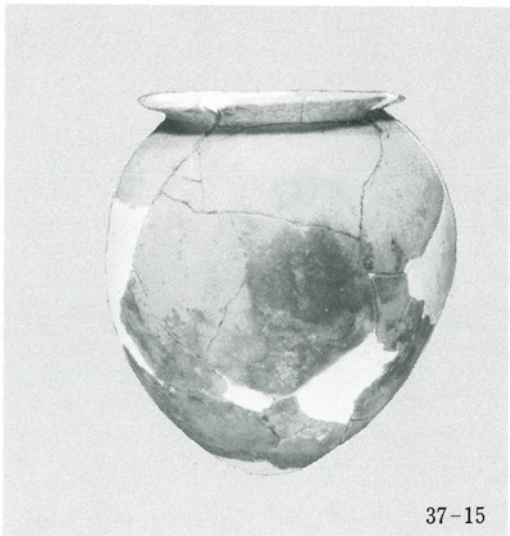

36-8

出 土 遺 物 (9)

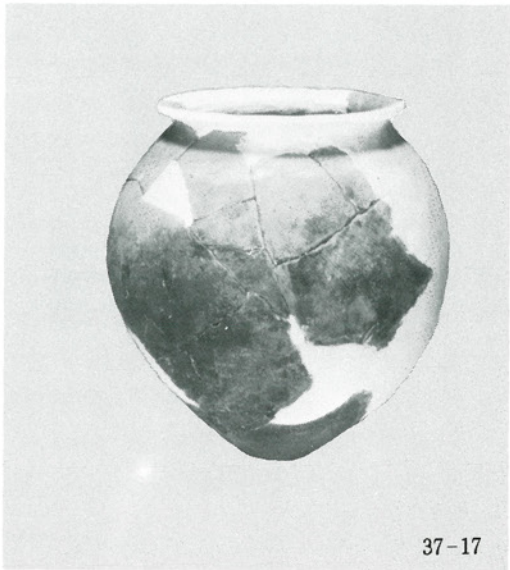
36-11

36-12


37-14

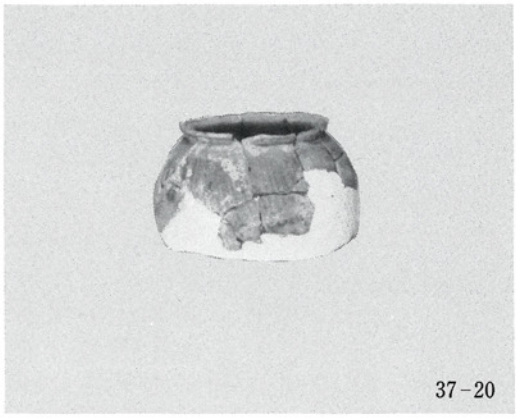

37-15

37-16


37-17

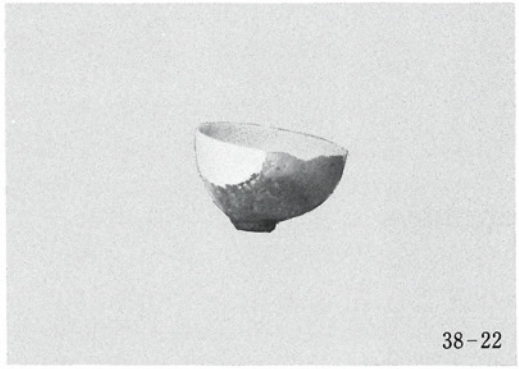
出 土 遺 物 (10)

37-19

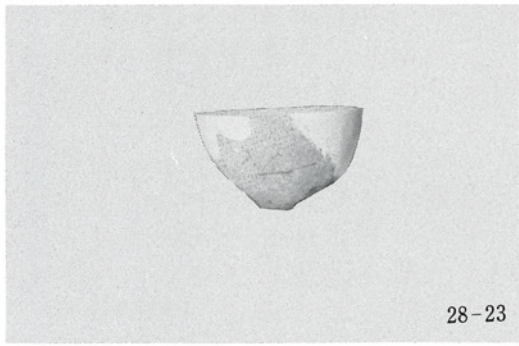


37-20

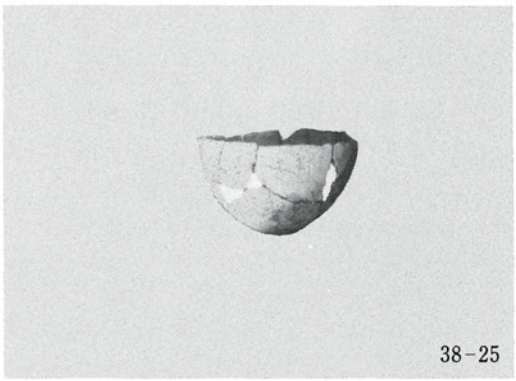
38-21



38-22



28-23

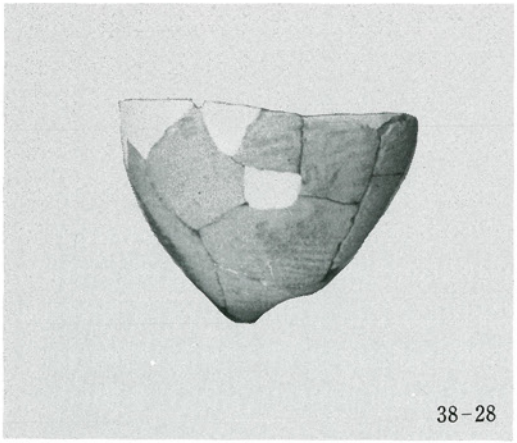


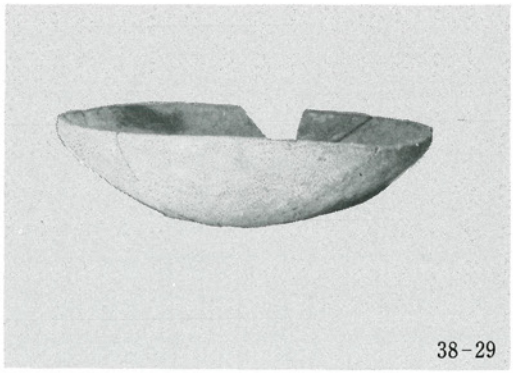
38-25

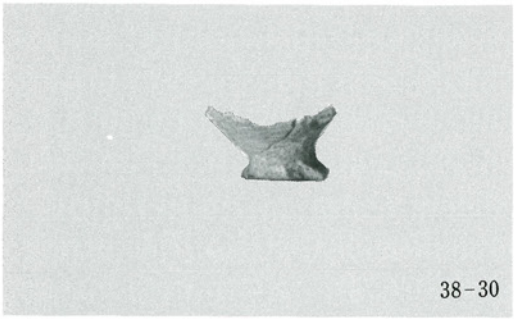
38-26

38-27

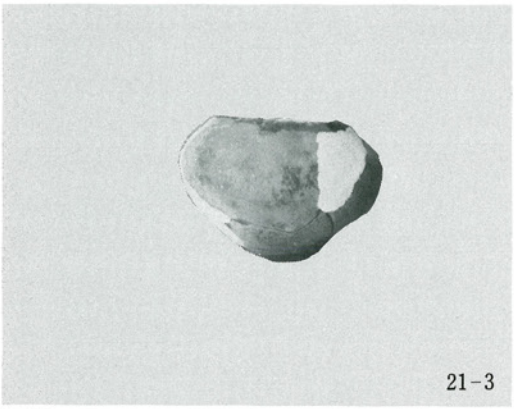
出 土 遺 物 (11)

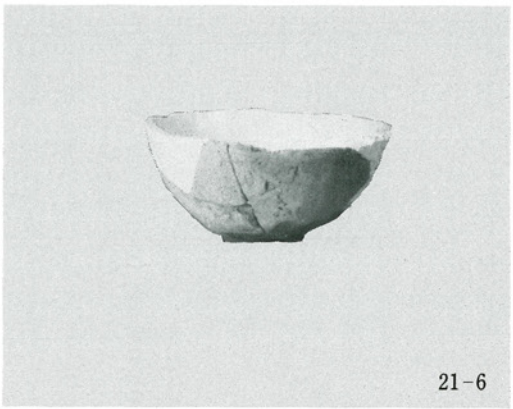

38-28

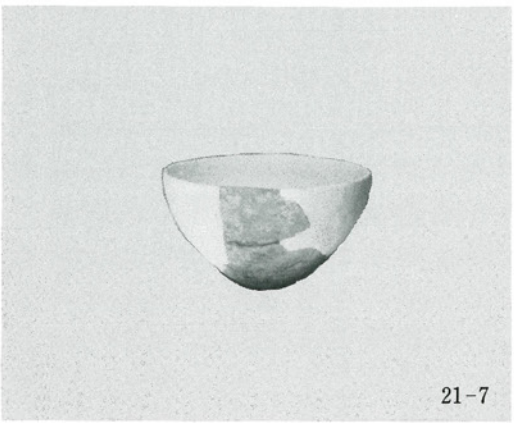

38-29

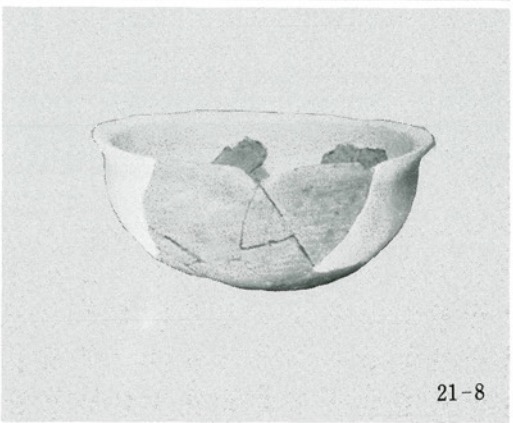

38-30

21-2

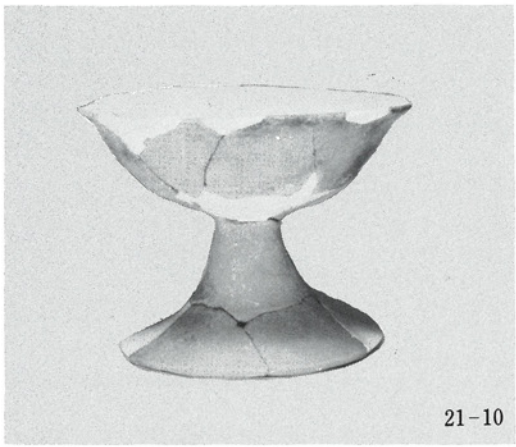

21-3


21-6


21-7


21-8

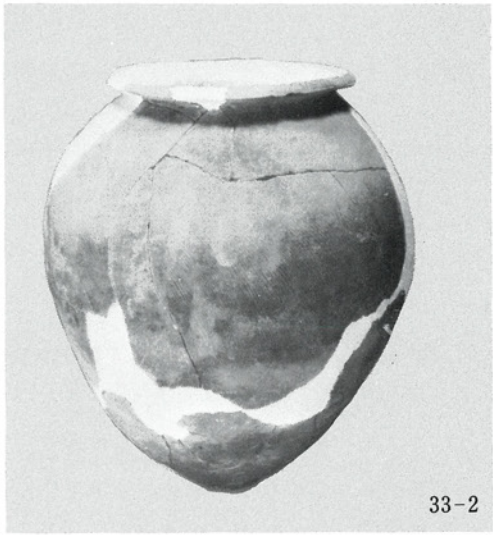
出 土 遺 物 (12)



21-10

21-9

22-1



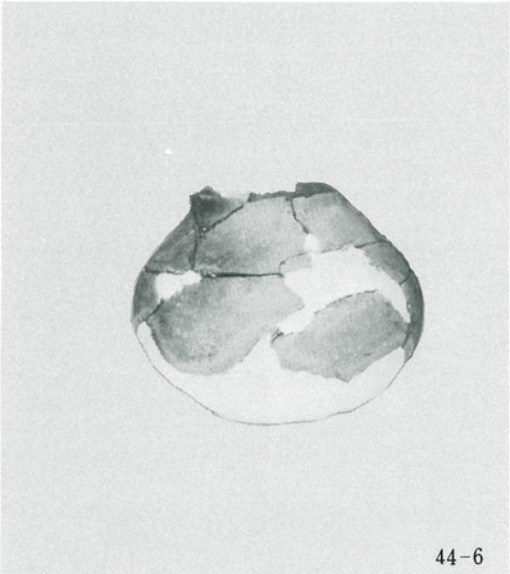
33-2

33-1

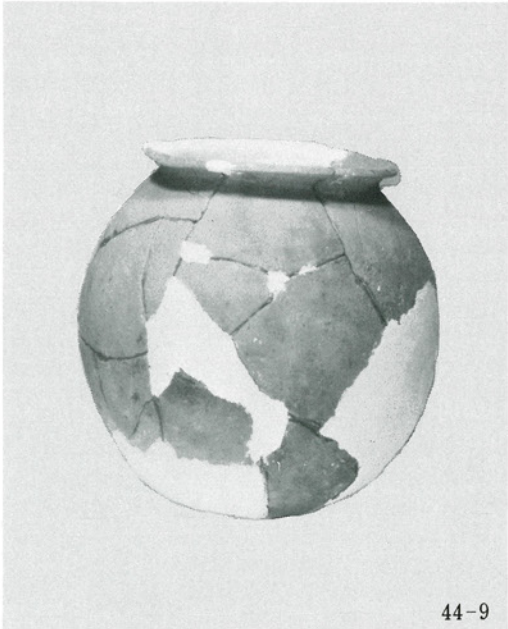
出 土 遺 物 (13)

44-3

44-5



44-6

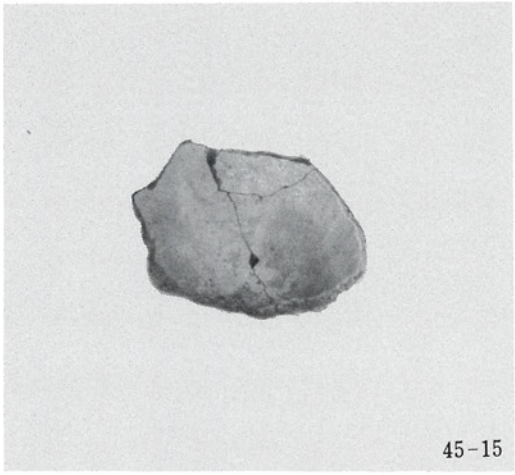


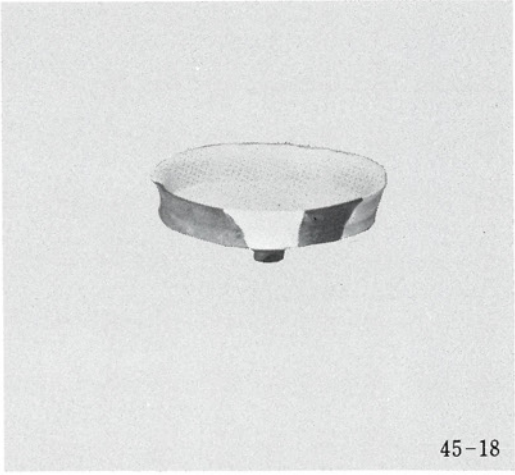
44-9

44-12

45-13

出 土 遺 物 (14)

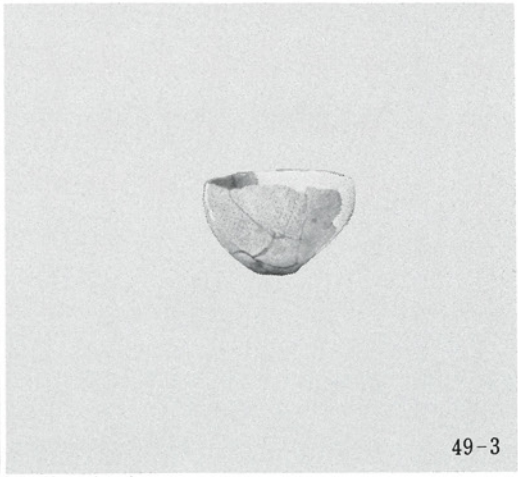

45-15


45-18

45-17

17-4

49-1

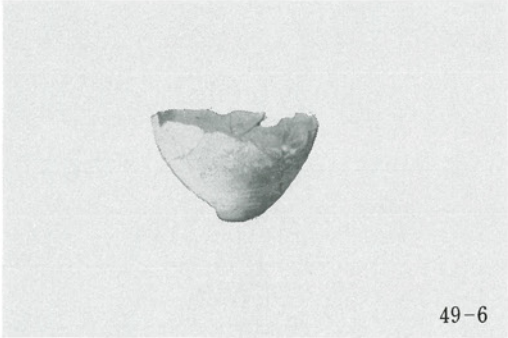

49-3

出 土 遺 物 (15)

49-4

49-8

49-5

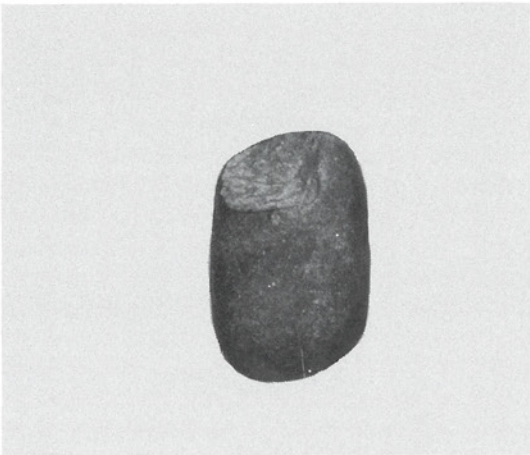

49-6

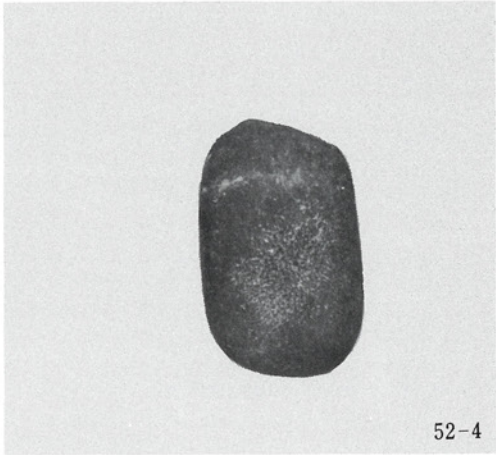
49-7

26-6

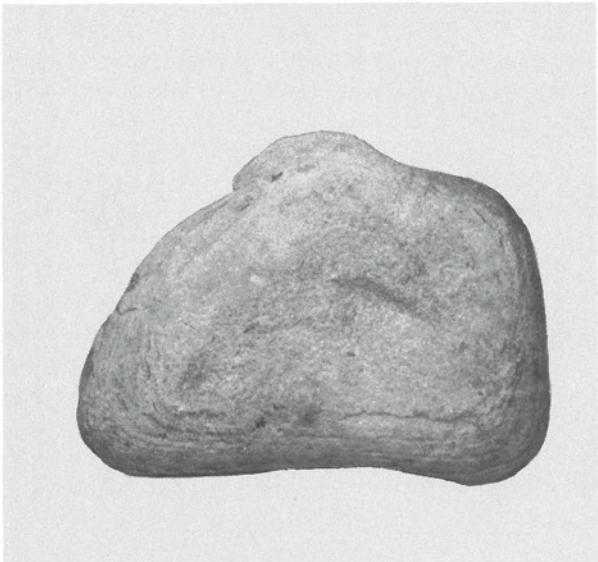
26-3

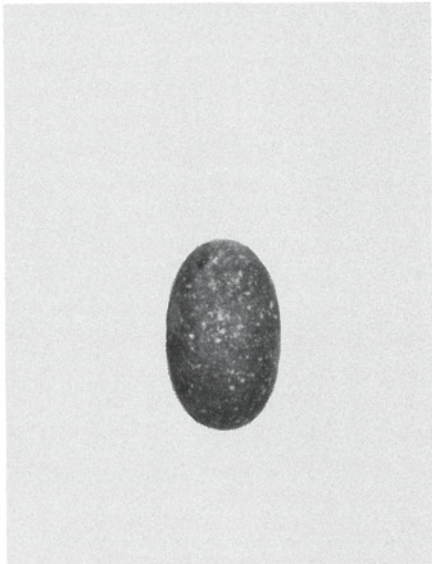
出 土 遺 物 (16)

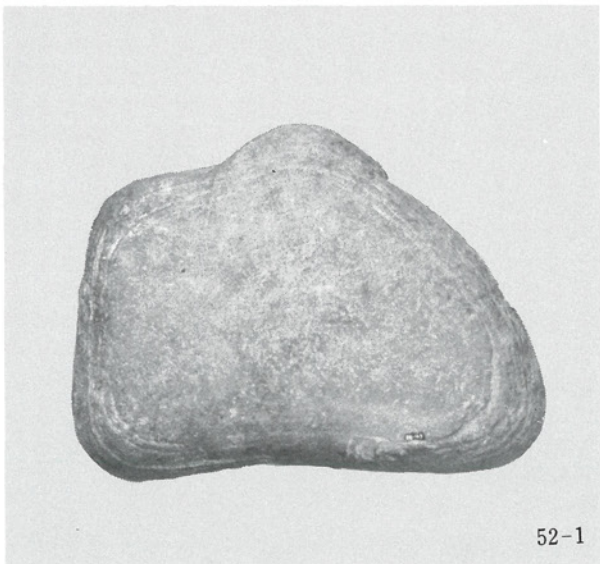




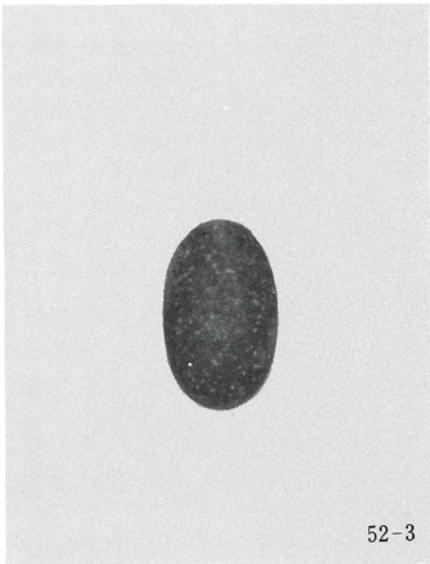
52-4



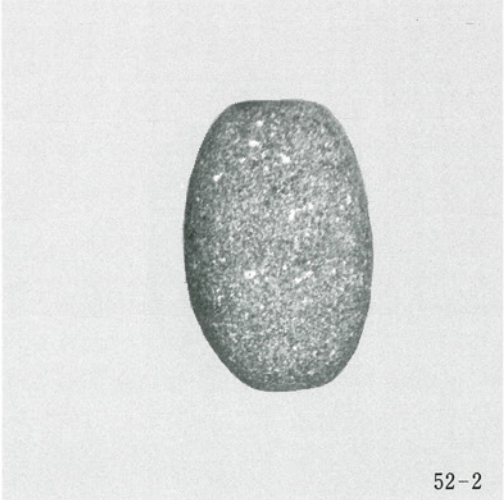




52-1

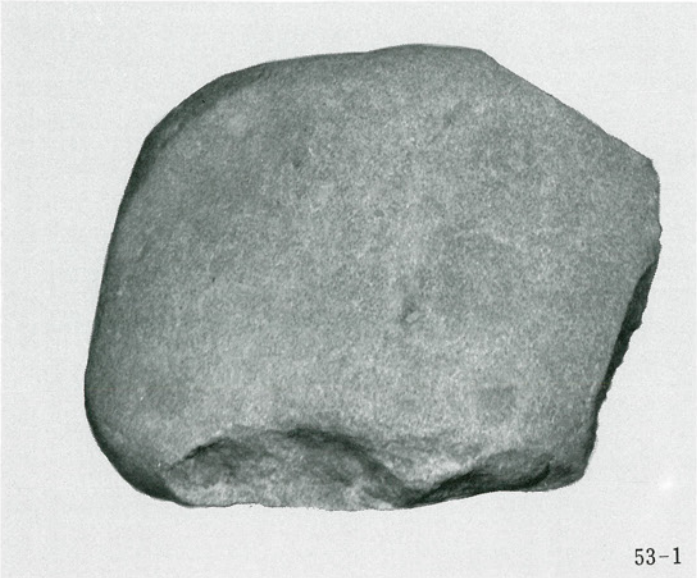


52-3



52-2

53-2



53-1

52-5

出 土 遺 物 (18)

黒谷川郡頭遺跡　II

発　行　　徳島県教育委員会
　　徳島市万代町１丁目１番地

印　刷　　㈱徳島印刷センター
　　徳島市問屋町

昭和62年３月28日